

愛媛の道徳教育

第49集



2025.3

愛媛県教育研究協議会 道徳委員会

目 次

「愛媛の道徳教育」第49集の発刊にあたって	1
I 道徳委員会研究部の提案	
令和6年度研究の基本構想	2
小学校の実践事例	6
中学校の実践事例	8
II 「第27回愛教研小・中学校道徳教育研究大会」記録	
研究大会要項	10
第1分科会 道徳科講座 道徳科の基礎・基本	11
第2分科会 小学校部 提案・演習	13
第3分科会 中学校部 授業提案	15
特別講演記録(教科調査官 堀田 竜次 先生)	17
III 研究大会報告	
第60回全国小学校道徳教育研究大会	28
IV 支部だより	
四国中央	29
新居浜	31
西条	33
今治・越智	35
松山	37
東温	39
伊予	41
上浮穴	43
大洲	45
喜多	47
八幡浜	49
西宇和	51
西予	53
宇和島	55
北宇和	57
南宇和	59
附属	61
おわりに	63
役員一覧	64
付録 令和6年度特色ある道徳教育推進事業 授業実践ブックレット	

「愛媛の道徳教育」第49集の発刊にあたって

愛媛県教育研究協議会道徳委員会

委員長 山岡 健二(西条市立国安小学校校長)

道徳科が教科化され、今年度で小学校は7年目を迎えました。教科書ができたこともあり、道徳科の授業を週1回行うことは当たり前となり、量の確保は確実に図られるようになってきました。一方、道徳科の授業の質についてはいかがでしょうか。「考え、議論する道徳」「主体的・対話的で深い学び」「個別最適な学び」「協働的な学び」など、授業の在り方については、いくつかの方向性が示されています。少し前の資料にはなりますが、令和3年度に実施された道徳教育実施状況調査において、道徳科の授業を実施する上での課題として、上位に、「話し合いや議論などを通じて、考えを深めるための指導」「物事を多面的・多角的に考えるための指導」「道徳的価値の理解を自分との関わりで深めるための指導」が挙げられています。道徳科の授業の在り方を示している道徳科の目標「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己(人間として)の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」の中にある内容について、教職員は課題を感じていることが分かります。そこで、本委員会においては、本年度より研究主題を「よりよく生きるための基盤となる道徳性が育つ道徳教育の研究ー学びがいのある道徳科の授業を要としてー」とし、研究を進めているところです。

本年度も本委員会の中核的な行事である「愛教研小・中学校道徳教育研究大会」を8月9日(金)に松前総合文化センターにて開催することができました。本研究大会は、本県の道徳教育の推進と道徳科の授業力向上を目指して、実施してまいりました。本年度の研究大会では、模擬授業や演習等を取り入れた実践的な三つの課題別分科会と文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 堀田竜次様のご講演を行うことができました。本年度も県内各地から200名を超える方にご参加いただき、授業力向上につながる研修が実施できたことを大変うれしく思います。本研究大会の内容については、本冊子に掲載しておりますので、ぜひご確認ください。

結びになりますが、本冊子を発行するに当たり、研究大会についてまとめていただいた皆様、各支部の取組についてご報告いただいた支部委員長様、編集作業にご尽力いただいた道徳委員会の皆様に心から感謝を申し上げます。本冊子の発刊がこれからの皆様の道徳科の授業改善の一助になれば大変ありがたいと思います。

I 道德委員会研究部の提案

令和6年度 研究の基本構想 — 学びがいのある授業の充実のために —

愛媛県教育研究協議会道德委員会研究部

1 はじめに

道德が教科化されて以降、道德科の充実が図られ、実践はより精査・精選されてきている。愛媛県教育研究協議会道德委員会では、県内の小・中学校における研究推進状況を踏まえ、「学びがいのある授業」を充実させるため、共に考え、語り合う「場」の設定など対話の在り方を要として、子どもの道德性が育つことを目指し、研究に取り組んでいる。

私たちの願いは、各校が目指す道德教育目標の達成のために、道德教育や道德科を充実させることにある。そこで、各校が道德教育や道德科を行っていく上で道標となる基本構想を提案することで、目標達成の一助としたい。

2 研究主題

よりよく生きるための基盤となる道德性が育つ道德教育の研究

— 学びがいのある道德科の授業を要として —

3 主題設定の理由

本研究の主題設定の理由を、社会情勢や学習指導要領の内容を踏まえた上で、私たちが大切にしたいことも加えた、三つの側面から見ていく。

(1) 子どもを取り巻く、現代の社会情勢の側面

グローバル化はますます進み、人やもの、情報だけでなく、多様な価値観や文化が複雑かつ密接に絡み合う中で、子どもは生きている。そのような社会を生き抜いていくためには、他者と協働しながら考え、自らよりよく課題を解決する力が不可欠である。そこで、目の前の事象に対し、深く見つめ、広い視野から多面的・多角的に考え、判断する力や善を志向する思いを基盤に、適切な行為を選択し、それを進んで実行しようとする心構えや身構えを持って行動する子どもの育成の重要性が増している。

(2) 学習指導要領の側面

全教育活動の中で行われる「道德教育の目標」は、学習指導要領第1章総則の第1の2の(2)の3段目に「自己(人間として)の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道德性を養うこと ※()は中学校」とある。そして、その道德教育の中に「道德科」はあり、「道德科が学校の教育活動全体を通じて行う道德教育の要としての役割を果たす」ものとして位置付けられている。つまり、道德性を養うことを目指す中で、中核的な役割を果たすものが道德科であり、それが道德教育の要として実効性のあるものとなるには、道德科の特質を踏まえた授業を地道に実践していくことが肝要である。

一方、「要となる道德科」が目指すものは、学習指導要領「第3章 特別の教科道德」の「第1目標」に示されているように、「よりよく生きるための基盤となる道德性を養うため、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てること」である。そのために、「各教科等で行われる道德教育を計画的・発展的に道德科の指導を進めていくこと」に留意していくことが大切である。

(3) 私たちが大切にしたいこと

私たちが大切にしたいことは、「毎時間の地道な積み上げ(日々の生活における道德教育)の下、「学びがいのある授業」を意識し、道徳的価値の自覚を深めていくことにある。そこで、授業において道徳的価値の自覚を深めるために、「学びがいのある授業」を次のように捉える。

【学びがいのある授業とは】

- 真剣に考えることができた時間（集中して考え、しんどかったけれど時間が知らないうちに過ぎた）
- 自分の思いや考えが素直に誠実に発言できた時間（全部言えてスッキリした）
- 自分の思いや考えがみんなに認められた時間（受け止めてもらえてうれしい、満足した）
- 自分が持っていない価値観に出会えた時間（新しい考えに出合って、ハッとした）
- 道徳的価値の大切さを再認識、再確認できた時間（胸にストンと落ちた《納得した》）
- 守るべき道徳を自らが納得してつくることができた時間（満足感とともに身構えができた）

「学びがいのある授業」を実現することは「考え、議論する道徳が実現できる」と考える。

以上三つの側面から、子どもを取り巻く社会情勢や道徳教育、道徳科に求められている留意点、そのために意識しなければならないことを鑑み、研究主題「よりよく生きるための基盤となる道徳性が育つ道徳教育の研究－学びがいのある道徳科の授業を要として－」を設定した。

4 研究の視点

私たちは、次の3点に着目して研究を推進している。

(1) 道徳教育の推進と充実

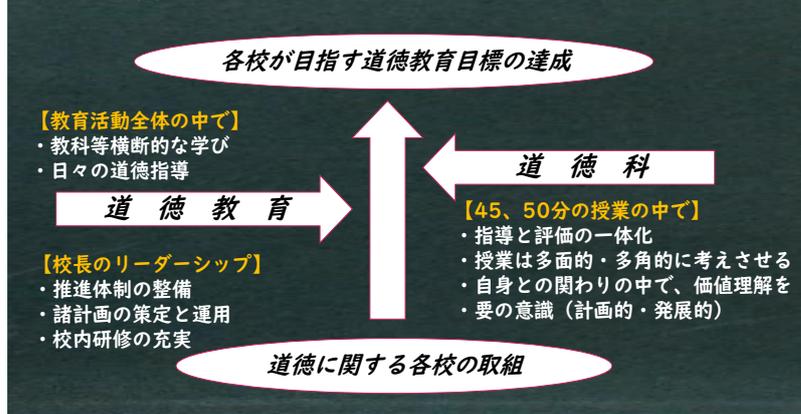
道徳教育を推進するために留意することに以下の点を挙げる。

- 校長の方針の下、道徳教育推進教師を中心とした、各校の実態及び特色を生かした道徳教育推進体制の確立
- 円滑な推進体制の下、作成された諸計画の運用
- 重点内容項目を意識した各教科等との横断的な学びの実現
- 「学びがいのある授業」の実現に向けた校内研修の充実

これらは、各校の道徳的な課題に対し、日々の道徳教育を充実させ、「学びがいのある道徳科の授業」を実施することで、各校が目指す道徳教育目標を達成するという道筋をつくることであり、それはシンプルであるほどよい。

つまり、「各校の道徳的な課題」や「道徳教育、道徳科」について校長のリーダーシップの下、推進体制を充実させ、内容項目を意識した教科等の横断的な学びを計画していく中で、「学びがいのある授業」を意識できるように、全教職員で取り組んでいくことができるよう、校内研修を計画・運用していくことが肝要である（資料1）。

【研究の視点(1) 道徳教育の推進と充実】



資料1 道徳教育の推進と充実

(2) 学びがいのある道徳科の授業の充実

私たちは、文部科学省が示した「令和の日本型学校教育」を踏まえ、一人一人の子どもの可能性を引き出し、誰一人取り残すことのない教育を実現していくことを念頭に置いている。なぜなら、「特別の教科 道徳」において「要」となる授業を充実させることが、私たちの提案する「学びがいのある道徳科の授業」を充実させることと同義と捉えているためである。その充実のために、以下のことに留意し、授業を構築していく。

ア 道徳科における「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させる

私たちは、子どもの特性や学習進度等に応じて重点的な指導を行うなど、効果的な指導方法や

教材等の柔軟な提供や設定をすることなどを熟考し、実施していくことを「個別最適な学び」と捉えている。一方、探究的な学習や体験学習等を通じ、子どものよさや可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせり、よりよい学びを生み出すことが「協働的な学び」と捉えている。

この二つの「学び」を一体的に充実させることで、目の前の子ども一人一人にとっての「学びがいのある授業」につなげていく。

イ 明確な指導観を持ち、指導と評価の一体化を図った授業を構築する

道徳科は、ねらいとする道徳的価値について考えを深める時間である。その実現のためには、子どもの発達の段階を踏まえた上で、その特質を十分に考慮し、それに応じた学習指導過程や指導方法を構築することに加え、子どもの学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握したり、授業改善に生かしたりする「評価」まで、見通しを持っておくことが大切となる。

つまり、教師が明確な指導観を持ってねらいを決め、授業実践の下、ねらいが達成されたかを評価する「指導と評価の一体化」を毎時間進めていく。

ウ 多様な価値観に触れさせる

現代の社会情勢を鑑みると、「多様な価値観に触れさせる」ことは、多くの情報や多様な価値の中から、自分に必要なものを選び取る力を養うことであり、それらのよさを取り入れながら、自分の生き方・人生を自分で創り上げていく力を養うことにつながると考える。つまり、一人一人の考えを出し合うことで、多様な考えに触れ、そのよさを吟味しながら、自分の考えについて振り返って思考を深めることが肝要となってくる。

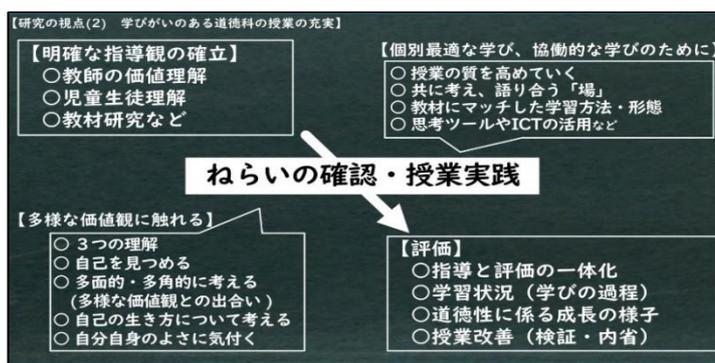
そのために、道徳科の授業においては、子どもが主体的、能動的に自らを振り返って成長を実感したり、今後の課題や目標を見つけたりすることができるように、共に考え、語り合う「場」を設定していく。

エ 道徳的諸価値の理解を深め、自分との関わりで道徳的価値を捉え、自己の生き方を考えさせる

前述ア～ウに関連させた計画的・発展的な構想の下、要となる道徳科において大切にすべきは、45、50分の授業の在り方である。

私たちは、目の前にいる子どもの反応や思いを大切にした上で、子ども自身が価値理解（価値そのものの理解）、他者理解（価値についての別の見方）、人間理解（よいと分かっている価値を実現することの難しさ）という、「三つの理解」を深められるよう、授業を実践していく。その際、道徳的価値が自身の生き方について自分自身に問う場を設定しておく必要がある。その場が、「よりよく生きる基盤となる道徳性が育つ」きっかけとなると考える。

私たちは、以上のことを踏まえ、多様な価値観に触れ、物事を多面的・多角的に考えられる場の設定や「三つの理解」が促される「学びがいのある授業」を意識する。その過程の中で、道徳的価値の自覚を深めることを目指していくとともに、そのねらいに沿った評価をしていくこと（「指導と評価の一体化」）のデザインを資料2に示す。



資料2 指導と評価の一体化に関する流れ

(3) 開かれた道徳科・道徳教育の充実

「開かれた道徳教育の充実」のためには学級・学年間、家庭や地域の人々、各分野の専門家等とのつながりを大切にしていって、共通理解・相互の連携を図っていくことが大切である。そのために考えられる例について「学校」「地域・社会」の視点からそれぞれ考える。

ア 学校内で開く

道徳教育推進教師が中心となって、参観日等での道徳科の授業公開や地域学校協働活動を生かした道徳教育を計画し、地域との連携し、道徳教育を推進する。

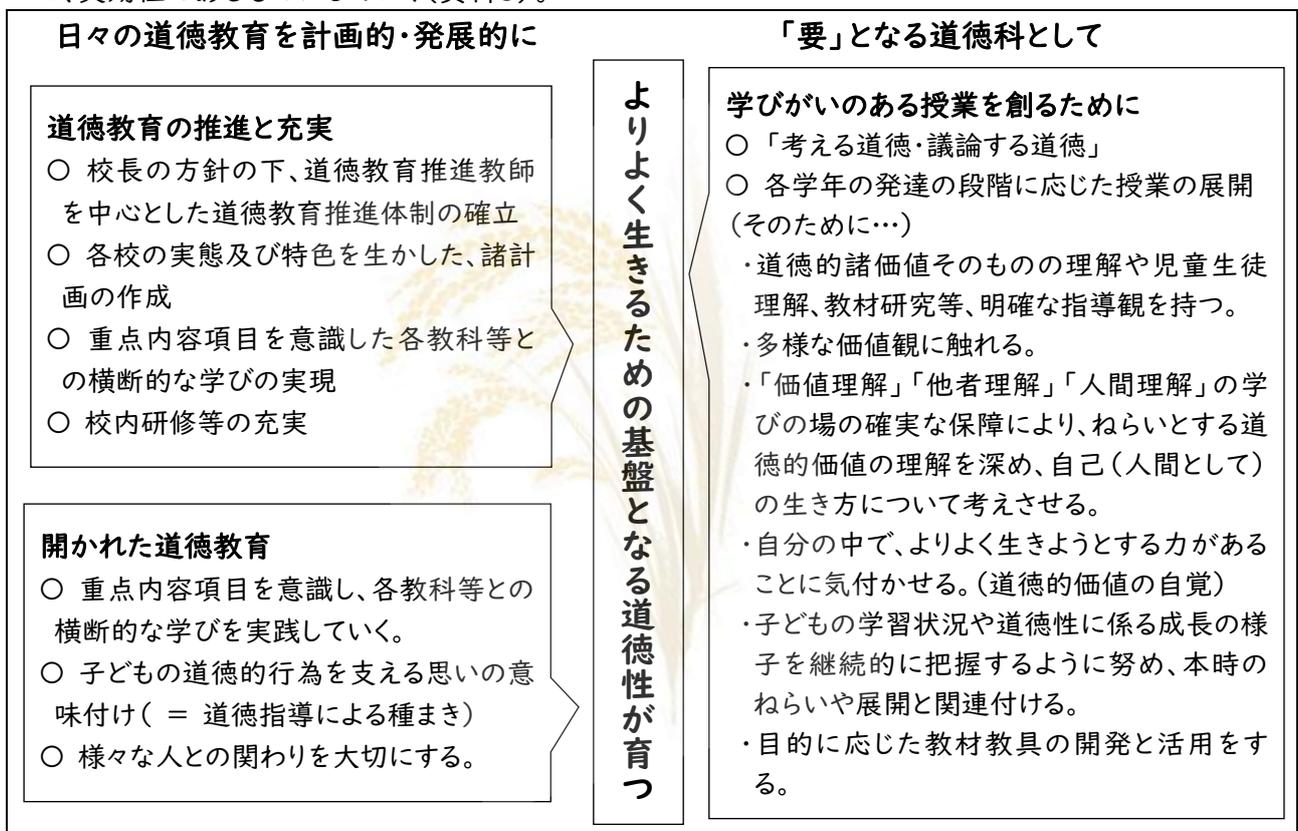
また、他学年や他学級、特別支援学級と連携するなど、インクルーシブ教育の観点や人と人との様々な関わりを大切に道徳教育の推進を図る。

イ 家庭や地域社会に開く

学校・学年便り、ホームページ等を活用し、学校で行っている道徳教育について情報を発信するのみならず、子どものよい点や道徳的習慣の様子などを伝えたり、情報提供を呼び掛けたりするなど、保護者・地域への発信を積極的に行う。

5 研究推進の全体像

「子どもの道徳性が育つ」という、豊かな実り…。そのために「三つの研究の視点」を有機的に関連させ、実効性のあるものにしていく(資料3)。



資料3 研究推進の全体像

6 おわりに

私たちは、要となる道徳科に「学びがいのある授業」を見いだした。

それは、ねらいとする道徳的価値について「考え、議論する」中で、醸成されていくものと捉えている。また、それは各教科等で行われる道徳教育を補ったり深めたり、相互の関連を考えて発展させたり統合させたりする特質に留意し、計画的・発展的に道徳科の指導を日々進めていくものだと考えている。そのために、日々の道徳教育の推進と充実を図りながら、学級・学年間、家庭や地域の人々、各分野の専門家等とのつながりを大切にしていき、「開かれた道徳、学校」となる土壌を整備していくことを忘れてはならない。

そして、子どもたちが9~12年という長いスパンの中で、いろいろな経験や価値観に触れられる「場」の設定を私たちは工夫していく。それらの積み重ねによって、笑顔あふれる幸せな未来のために、「よりよく生きる基盤となる道徳性」を子ども自身が育てていくことができると信じている。

「役割演技」を通して語り合う道徳科の授業

愛媛県教育研究協議会道徳委員会研究部

1 授業実践の基本構想

道徳における「葛藤」とは、道徳的価値観の間で「何が正しいのか、どう行動すべきなのか」などについて迷い、考えることを指している。読み物教材を吟味していくと、ねらいとする道徳的価値に起因する主人公（登場人物）の葛藤場面が取り入れられているものが多く見られる。この葛藤場面こそ、道徳的価値観が揺り動かされ、自己を見つめながらその見方を広げ、価値理解を深めていくところである。

その際、取り上げられる手法の一つに「役割演技」がある。これは、ある場面・状況において子どもを特定の役割に投影させ、具体的な表現活動を通して道徳的な感じ方や考え方を深めさせるものである。

そこで、相反する主人公の心の中の思いをペアで役割演技させ、行為の判断の基となる多様な価値観に出合わせながら、ねらいとする道徳的価値についての理解を深めさせる。その上で、正直に明るい心で、生活しようとする道徳的心情を育みたいと考え、本授業を構想した。

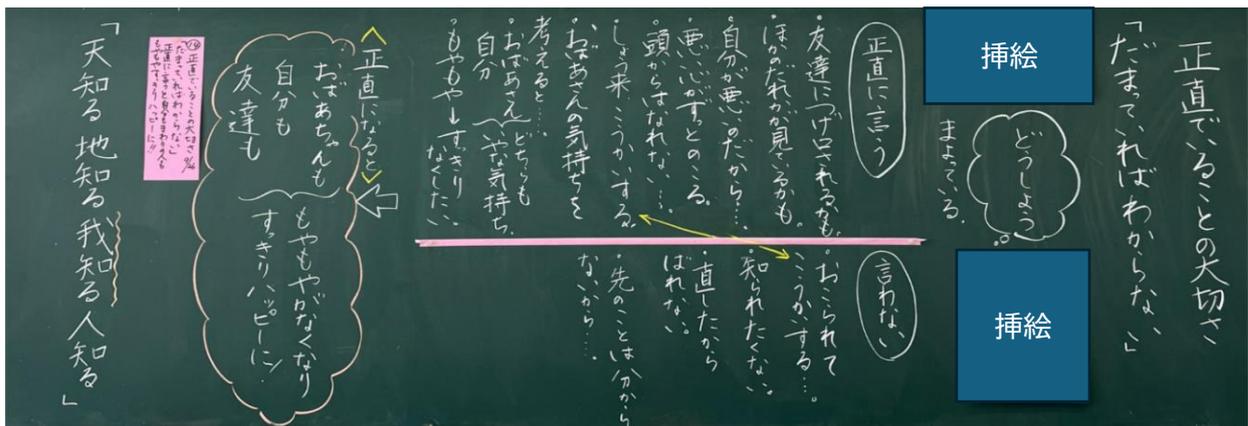
2 授業の実際

- (1) **主題名** 正直でいることの大切さ【A 正直、誠実】
- (2) **教材名** だまっていればわからない（「小学道徳4」教育出版）
- (3) **ねらい** なかなか眠れなかった「ぼく」の葛藤する思いを考えるを通して、なぜ、正直であることが大切であるかということに気づき、過ちや失敗を素直に改め、正直に明るい心で生活しようとする道徳的心情を育てる。

(4) 教材内容

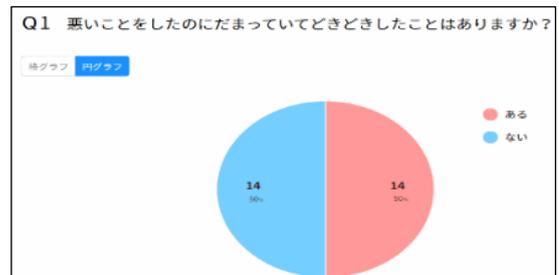
友達とサッカーの練習をしていた「ぼく」が蹴ったボールが隣の家に飛び込み、おばあさんが大切にしていた植木鉢を倒してしまった。「ぼく」は、そっと鉢を元に戻し、「黙っていればわからない」と練習を続けたが、その夜、なかなか眠れなかった。翌朝、おばあさんに大きな声で謝り、許してもらったことで、心が軽くなった気がした。

(5) 授業の実際



葛藤場面における「する・しない」といった二項対立の選択には、自分のこととして考え、子ども自身の生活経験や根拠となる思いが表出することが期待される。

この「自分のこととして考え、実感を伴って教材とつなげる」ためにタブレット端末を利用し、アンケート（資料1）を実施、提示する「場」を導入時に設けた。



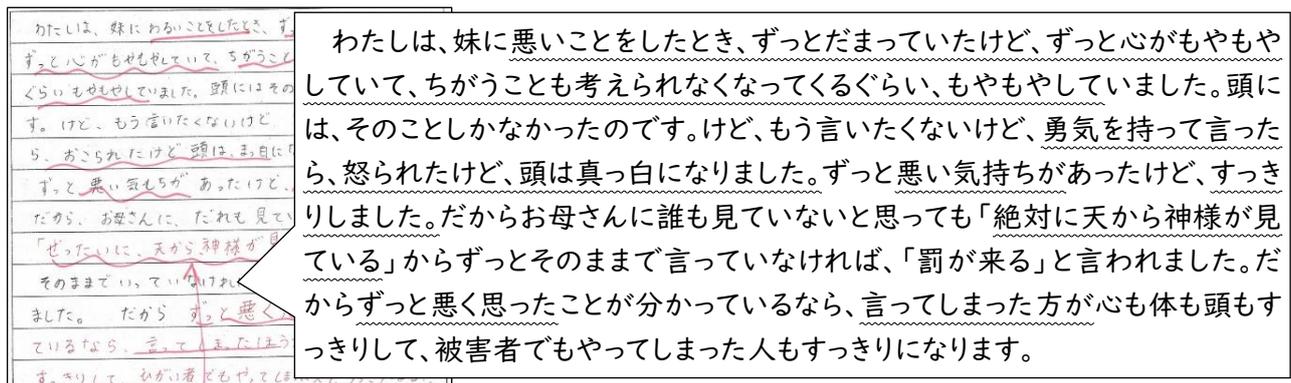
資料1 アンケート結果

3 指導の詳細

学習活動	発問(○)と実際の反応(・)	指導上の留意点(○)
1 アンケート結果を見て問題意識を持つ。	○ 悪いことをしたのに、黙っていてどきどきした人が半分います。どんな気持ちでしたか。 ・ばれたらどうしようとずっと思っていた。	○ アンケート結果から、正直に話すことができないときのどきどきした気持ちを思い出させて教材につなげる。
2 教材文を読んで考える。 ペア→全体	○ ふとんに入ってもなかなか眠れなかったぼくの思いを考えましょう。  <p>誰も見ていないから大丈夫。 でも、一生心の中に残って後悔するよ。</p> <p>【正直に言った方がよい】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分が悪いから言わないと。 ・悪い心がずっと残って将来後悔する。 ・おばあさんも自分も嫌な気持ちになっている。 ・もやもやが残るのでなくしたい。 ・誰かが見ているかもしれない。 	○ (どうしよう…)とはどういうことかを考えさせ、「正直に言った方がよい」と「だまっていればよい」という二つの考えで迷っていることに気付かせる。 ○ 「ぼく」の心の中の二つの思いを「でも…」でつないで、ペアで話し、おばあさんに話すことにした思いを考えさせる。 ○ ペアで役割を交代し、同様に考えさせる。 ○ 全体で話し合い、自分の考えに近いものについて思いを伝え合う。
3 振り返り	○ 今日の学習で学んだことを振り返りましょう。	○ 自分のことを振り返り、正直に言ってすっきりしたことや、この時間考えたことを書くように伝える。

4 実践を振り返って

翌日おばあさんに正直に話すことを前提に、ペアで相手が納得できるように「語り合わせる」活動を行った。すると、自分の経験を思い出したり、自分と反する相手の考えを聞いたりした上で反論し、納得できる考えをお互いに伝えていた。その後、行動の根拠となる考え方を出し合い、自分の考えがどれに近いか話し合った。その後、自分のことを振り返らせると、以下のような考えが見られた(資料2)。



わたしは、妹に悪いことをしたとき、ずっとだまっていたけど、ずっと心がもやもやして、ちがうことも考えられなくなってくるぐらい、もやもやしていました。頭には、そのことしかなかったのです。けど、もう言いたくないけど、勇気を持って言ったら、怒られたけど、頭は真っ白になりました。ずっと悪い気持ちがあったけど、すっきりしました。だからお母さんに誰も見ていないと思っても「絶対に天から神様が見ている」からずっとそのまま言っていなければ、「罰が来る」と言われました。だからずっと悪く思ったことが分かっているなら、言ってしまった方が心も体も頭もすっきりして、被害者でもやってしまった人もすっきりになります。

資料2 ワークシート

ワークシートには、「だまっていればわからない」に関連する子どもたちの思いが、たくさんつづられていた。子どもたちは「正直に言うこと」についての難しさや後ろめたさ、怖さなどにまで、言及している。それに対し、子どもたち自身の思いには「レジリエンス(うまく適応していく力)」が働いているように読み取れた。「正直であることのよさ」は、自分自身が分かっている。だからこそ、自分は「失敗に向き合うことを大切にしたい」という語りに思える。

その契機となったのは、葛藤場面を通じた役割演技の際、存分に語らせたことが要因にあると考える。

中学校の実践事例

「対話」を目指した地域教材での実践 - ゲストティーチャーと先人の思いに触れる -

愛媛県教育研究協議会道徳委員会研究部

1 授業実践の基本構想

多面的・多角的に物事を捉えるためには、共に考え語り合う場の設定が重要である。それを叶えることができるのが道徳科の授業のはずだが、発表する生徒が限られたり、教師がしゃべりすぎたりすることが課題として挙げられる。その解決策として、「こどものための哲学 (philosophy for children:p4c)」の手法を取り入れ、発言した生徒に指名させているが、更に対話の質を高め、自己の考えを実感を持って深めさせることを目指した。

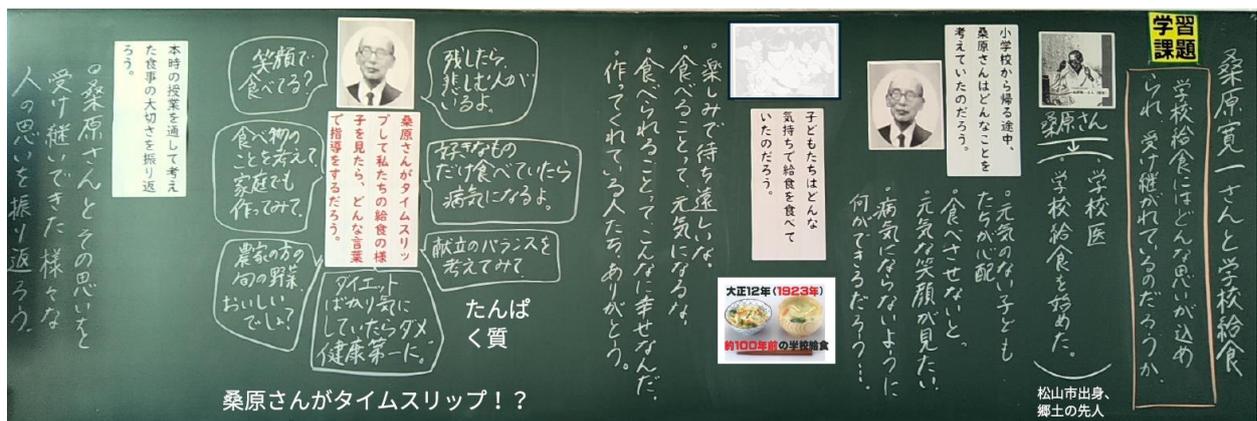
そこで大切にしたことは、「開かれた道徳教育の充実」を目指して学級・学年間、家庭や地域の人々、各分野の専門家等とのつながりである。教員同士の共通理解や相互の連携を図り、学級の仲間を越えて様々な人々と共に考え語り合う「場」の設定と、質の高い対話を実現させるための創意工夫を行った。ゲストティーチャーを招き公開授業を行えば、推進体制が確立し、様々な人々が関わった授業になる。教員も含めてみんなで考え、議論する道徳を創ることができれば、生徒に実感を持たせた自己内対話を促し、実効性のある授業ができるだろうと考えた。本実践は、郷土の偉人である桑原寛一(松山市)の「栄養価値の高い食事が健康を保つことにつながる」という思いと、食育の視点「生涯にわたり健康で充実した生き方ができるためのよりよい食習慣」を関連させたものである。ゲストティーチャーの協力を得ることで、当時の給食を再現したものに触れたり、調理員の学校給食への思いを聞いたりしながら、生徒が自分との関わりで道徳的価値を捉え、自己の生き方を考えさせるための「対話」を目指した授業を構想した。

2 授業の実際

- (1) **主題名** 学校給食における心身の健康の増進【A 節度、節制】
- (2) **教材名** 桑原寛一 地域医療への貢献(一部抜粋)
(「ふるさと松山学 語り継ぎたい ふるさと松山 百話Ⅲ 嬉しきは故郷なり」松山市教育委員会)
- (3) **ねらい** 桑原寛一の生き方に学び、日々の食事を大切にしていこうとする道徳的態度を育む。
- (4) **教材内容**

桑原寛一(大正時代)は、貧しい農村地区の人々を救うため、患者に節制や労働の在り方について話したり、一人一人の食事内容について尋ねたりしながら無料で診療を行った。そして、予防医学に目を向け、栄養の改善のため、私費を投じて松山市久米地区で学校給食を始めた。現代においても、食事を疎かにすることなく、健康のためにバランスのよい食事をとることの大切さに気付かせてくれる教材である。

(5) 授業の実際



3 指導の詳細

学習活動	発問(○)と実際の反応(・)	指導上の留意点(○)
1 桑原さんと学校給食について考える。 →栄養教諭の話聞く。	○ (学校医としてやせ細った子どもたちを見た後) 小学校から帰る途中、桑原さんはどんなことを考えていたのだろう。 ・元気がない子どもたちが心配だ。何とかしたい。 ・成長のために、もっと食べさせないといけない。 ○ (初めて給食を食べた) 子どもたちは、どんな気持ちで給食を食べていたのだろう。 ・食べることで元気になるし、幸せな気持ちになれる。 ・作ってくれた人たちに感謝したい。	○ 事前に読んで考えさせておく。 ○ 桑原さんの強い意志とそれを受け取った子どもたちの心情を考えさせる。
2 桑原さんの生き方から考える。 →調理員の話聞く。	◎ 桑原さんがタイムスリップして教室に来たら、どんな言葉で指導をするだろう。 ・献立に使われている旬の野菜は何だろう。 ・たくさん食べるのと、好きなものばかり食べるのは違う。 ・ふだんからバランスの良い食事について考えているか。	○ 桑原さんが病院設立時の挨拶で話した「栄養価値の高いもの」に込めた思いについて考えさせる。
3 本時の学習を振り返る。	○ 本時の授業を通して考えた食事の大切さを振り返ろう。	○ 食生活を整えようとする気持ちについて振り返らせる。

4 実践を振り返って

生徒は、桑原寛一との対話や、身近で受け継いでいる人との対話を通して、自己を振り返り、健康のために考えて食べることや感謝しながら食べること、先人の思いを感じながら食べることについて改めて考えていた。「学校給食に込められた思いや受け継がれているもの」について考えた次のような感想が見られた。

○ 世界の食事がとれない人たちにこそ、桑原さんの思いが届いてほしい。
○ 好き嫌いがあるのは事実だが、自分の気持ちを押し通さず、給食を通して元気な体を作ってほしいと願う方たちの思いも受け取って、給食の時間をもっと大切にしていきたい。
○ ふだん何気なく食べている給食には、昔から受け継がれてきた優しさや思いやりが込められていることを知り、残さずに食べようと思った。
○ 苦手なものは残すこともあったけれど、今後は残食をなくし、自分に合った量を食べたいと思う。
○ 祖母が食事を作ってくれているが、感謝しながらおいしく食べたい。手伝うなどして一緒に作りたい。

道徳的価値を実現することのよさについて強く意識させてくれた桑原寛一。生徒は、自分の弱さ(好き嫌い、ダイエットを気にして食べたくない等)に気付きながらも「節度、節制」の道徳的価値(心身の健康の増進を図ることは、充実した人生を送る上で欠くことができないものである)の実現のために努力し、自ら食育に関わっていかうとする気持ちを高めた。それは、授業以降に「いただきます」「ごちそうさま」の声が大きくなった生徒、残さないようにつぎ分けようと努力する配膳係、早く準備に取り掛かることで残食を減らそうとする給食委員、野菜嫌いな友達に「野菜も食べよう」と声を掛ける生徒の姿から分かる。

本実践は、ゲストティーチャーの協力で得られたものが大きい。桑原の思いを受け継ぐ調理員から、出汁をいりこから取っている話を聞いたことで、以前よりも味わって食べるようになった。その変容は生徒だけのものではない。授業を創り、授業を参観した教員の心をも動かすのは、道徳科が対話によって共に学ぶ時間だからだ。日々の教育活動でため込んだ食育の心を、更に道徳科で耕したことが、自己内対話の充実につながった。つまり、自己の生き方に対する考えが深まったのは「昔の子ども」「桑原」「栄養教諭」「調理員」「級友」「教師」「家族」と対話を行った結果である。今後も、生徒の道徳性を育てるために、道徳科における対話と日々の対話を大切に、生徒の成長を見取っていきたい。

Ⅱ 「第27回 愛教研小・中学校道德教育研究大会」記録

<研究大会要項>

- 1 主催 愛媛県教育研究協議会
- 2 後援 愛媛県市町教育委員会連合会
松前町教育委員会
- 3 日時 令和6年8月9日(金) 10:20~15:40
- 4 場所 松前総合文化センター
- 5 研究主題 よりよく生きるための基盤となる道德性が育つ道德教育の研究
－ 学びがいのある道德科の授業を要として －
- 6 日程

9:50	10:20	11:50	13:00	13:40	13:50	15:30	15:40
受付	課題別分科会	昼食	開会行事 基調提案	休憩	特別講演	閉会行事	

7 特別講演

演題 「内面的資質としての道德性を主体的に養う道德科の授業」

講師 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官

堀田 竜次 先生

8 課題別分科会

分科会 【対象】	内容	提案者	指導助言者
第1分科会 【小・中】	道德科講座	松山市立鴨川中学校 校長 森脇 和夫	
第2分科会 【小学校】	小学校部会 提案・演習	伊方町立大久小学校 教諭 大橋 周平	愛媛県教育委員会義務教育課 指導主事 赤松 聖則
第3分科会 【中学校】	中学校部会 授業提案	松山市立北条南中学校 教諭 大柳 美優	愛媛県教育委員会中予教育事務所 指導主事 友澤 美和

【課題別分科会の概要】

第1分科会【小学校】【中学校】

学習指導要領解説にある【内容項目の指導の観点】に着目し、ねらいとする道德的価値について、児童生徒の発達段階を踏まえた捉え方を押さえた。そして、演習では一枚物の写真や統計資料を用いて、内容項目の捉えやそれに伴う授業展開について考えることで、研修を深めた。

第2分科会【小学校】

主人公に対する「共感的理解」とそれに付随する問い返しを提案とし、教材「心と心のあく手」の模擬授業を行った。全体で意見交換しながら、授業づくりのポイントについて、研修を深めた。

第3分科会【中学校】

道德科における問題解決的な学習について理解を深めた。そして、生徒一人一人が課題に対する答えを導き出すことの工夫について演習を行い、生徒が主体的に取り組む授業の在り方について、研修を深めた。

第1分科会 道徳科の基礎・基本【道徳科講座】

提案者 松山市立鴨川中学校 校長 森脇 和夫

1 研修の主な内容

本分科会は、前半は全体で道徳科の授業についての講義、後半は校種別に分かれて新しい形の読み物教材(4コマ漫画、写真、データなど、道徳的な起承転結が見付けにくい教材)を使った授業の実践報告を行った。

2 全体会・講義

(1) 講義の内容

ア 学習指導要領の解説について

学習指導要領に書かれてある「道徳科の目標」について、解説に書かれてある用語の説明を通して理解を深めた。また、内容項目について、特に児童生徒の「発達段階」の視点で、解説の読み取り方について話があった。



イ 学習指導案「主題設定の理由」の書き方

道徳性の諸様相の育成に向けて、教師が道徳的価値の理解をしっかりと行い、授業のねらいを明確にして子どもに「考えさせるべきこと」を確かに持たせ、自分の問題として捉えられるように授業を工夫するための「主題設定の理由」の書き方について話があった。

ウ 読み物教材の分析について

分類、活用の仕方の類型化、道徳的問題としての「起承転結」などの解説があった。

エ 発問について

発問構成、教材の構造分析からの中心発問、補助発問(問い返し発問)の解説があった。

オ 話し合い活動について

道徳科の話し合い活動は、「議論する問題に道徳的な内容を含んでいること」「必ず自分の考えを持って話し合いに臨むこと」などの解説があった。

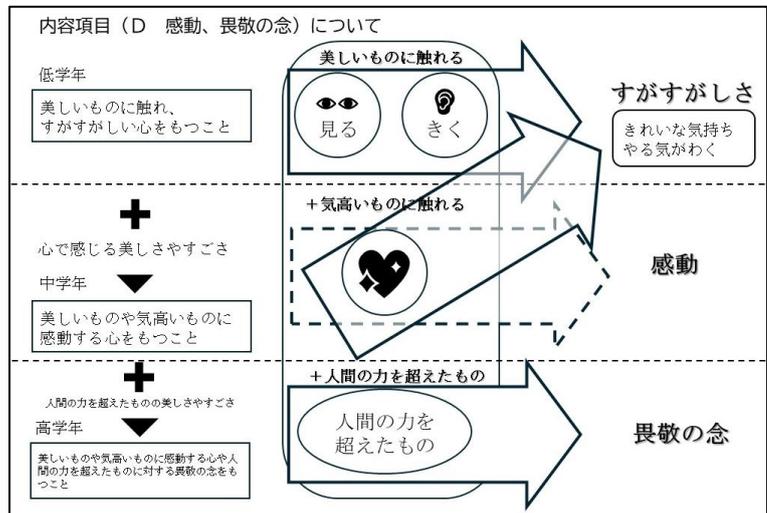
(2) 講義の様子

約1時間の講義であったが、参加者は今後の授業に役立てようと、熱心に講師の話を聞いて、道徳科の授業の基礎・基本を学んでいた。

3 校種別実践報告(小学校)「写真教材の活用」愛媛大学教育学部附属小学校 教諭 辻 健一

(1) 明確な指導観を持つために

本実践は小学1年生を対象に行った。授業を行うにあたり、取り扱う内容項目【D 感動、畏敬の念】について分析・整理した(資料1)。低学年では、美しいものに触れ、すがすがしさを感じることが目標とされているが、本学級の子どもたちの様子を見ると、目に見えるものだけでなく、友達への努力や優しさからも美しさを感じているようであった。そこで、本実践では花畑や有名な絵画などの目



資料1 内容項目【D 感動、畏敬の念】の価値分析

や耳から美しさを感じる写真に加え、ごみ拾いをする人、子どもたちが使っている雑巾や短縄の写真も用意した。

(2) ねらい

複数の写真からそれらの美しさを探すことを通して、美しいものが自分たちに与えてくれるよさに気付いたり、美しいものに触れたりして美しさを感じる道徳的心情を養う。



(3) 授業の概要

導入では、花畑(見た目が美しいもの)の写真を提示し、それを見た子どもたちの率直なつぶやきから「美しいものって、どんなものなのだろう」という学習課題を設定した。

展開では、複数の写真から美しさを探す活動を行った。雑巾の写真を見て、「この写真は、先生が間違えて準備したんだ」とつぶやく子どもがいたが、それに対して「見た目は真っ黒だけど、みんなのために行動した証拠だから心が美しいよ」と自分の考えを伝える子どももいた。

終末では、美しいものに出会うとどんな気持ちになるのか考えた。「きれいな気持ち」「自分たちも頑張ろうという気持ち」など、すがすがしい気持ちになることに気付いたり、美しいものに触れるよさについて感じたりしている子どもの姿が見られた。

4 校種別実践報告(中学校)「4コマ漫画の活用」伊予市立港南中学校 主幹教諭 重松 直綾

(1) ねらい

かけがえのない自己を肯定的に捉えさせることを通して、その人固有の持ち味である個性を輝かせ、自分に自信を付けて生活していこうとする態度を育てる。【A 向上心、個性の伸長】



(2) 授業の概要

展開は、資料2のとおりである。4コマ漫画の4コマ目における登場人物のせりふを考え、そのせりふにした思いを伝え合い、それを基に話し合う活動を通して、ねらいに迫る授業とした。

(3) 質疑応答

Q 実際の4コマ目を生徒に提示したか。自分であれば、3コマ目の場面を主発問の場面とすると思う。

A 生徒から実際の4コマ目のせりふと同様な考えが出たので、提示した。指導案を審議する中で、その意見は出ていた。過去に4コマ漫画を読み物資料と同じように取り上げた際に、スムーズに授業が展開しなかったことがあり、今回のような展開を考えた。

Q 他学年で同じ教材を用いた授業をすることについては、どう考えるか。

A 同じ教材であったとしても、発達段階によって考えや見方が変わってくるのではないか。その変化を感じることを考えると、意味があるのではないか。

	学習活動	主な発問(○、◎)と予想される生徒の反応(・)	・指導上の留意点 ◎評価
導入	1 自分にとって「自信のあること」と「自信のないこと」を考え、本時のねらいを共有する。	○自分にとって「自信のあること」と「自信のないこと」を考えてみよう。 ・計算が速い ・運動が得意 ・勉強が苦手 ・運動が苦手	・挙げた内容から、他人と自分を比べていることに気付かせる。
展開	2 4コマ漫画の空欄を埋めて話し合う。 (1) 4コマ漫画の最後のコマの空欄に当てはまる言葉を考える。	○最後のコマの空欄に当てはまる言葉を考えてみよう。 ・全部捨てて楽になったなあ。 ・外にあるものでは自信はつかないぞ。 ・外じゃなく中が大事なんだよ。	・外から見えるものだけで自信が付くわけではないことに気付かせる。
	(2) 最後のコマに当てはめた言葉の理由を話し合うことで、自信を付けるために必要なことについて考える。	○最後のコマにその言葉を当てはめた理由を話し合ってみよう。 ・自信は外にあるものだけでは付かない。 ・自分の外ではなく、中が大切。 ・他人と比べるのではない。	・助言することを通して、自信は、他人と比べて外にあるもので付くのではないことに気付かせる。
	(3) 教師の話を聞く。	自分に自信が付くとは、どういうことなのだろう。 ◎自信とはいったい何だろう。 ・あることが得意になること。 ・自然と自分の中に生まれてくるもの。 ・他人と比べずに自分をそのまま受け入れることができれば身に付くもの。	・適宜助言したり、切り返し発問をしたりして、他人と比べるだけではなく、自分を受容していくことが大切であることに気付かせる。 ・実際の4コマ漫画を見せて、自身の考えを照らし合わせる。
終末	3 今日の学習を振り返り、課題について自分自身で考えたことをまとめる。	○自分に自信を付けて生活していくために、どうすることが大切だろう。	・考えを共有するために、タブレットを活用する。 ◎自分に自信を付けて生活していこうとする態度が育ったか。(ワークシート)

資料2 指導案(略案)

1 発表のテーマと概要

道徳科の教材を基に授業を構想する場合、①「教材分析」、②教材分析を受けて指導過程を構成する「中心発問」の吟味、③補助発問やねらいを達成するための「効果的な手法」について考える。しかし、実際に授業を実践してみると、想定どおりに展開されなかったという経験はないだろうか。

本分科会では、模擬授業を通して、授業展開について、参加者の先生方と一緒に研修を深めていった。

2 発表の内容

(1) 使用教材:心と心のあく手(「わたしたちの道徳」文部科学省)について

【教材の内容において、ポイントとなる部分】

- 「ぼく」は学校帰りに重そうな荷物を持っているおばあさんに出会った。
- 「ぼく」は、荷物を持とうと声を掛けたが、断られた。
- このことをお母さんに話すと、「おばあさんは、歩く練習をしている」ことを知らされる。
- 数日後、おばあさんに出会った。
- 「ぼく」は、声を掛けようと思ったが、そっと後ろをついて行くことにした。
- おばあさんは無事目的地に着き、それを見た「ぼく」は、「心と心のあく手」をしたような気持ちになった。

(2) 教材研究から(ねらいとする道徳的価値について)

「親切、思いやり」は、よりよい人間関係を築く上で求められる基本的姿勢として、相手に対する思いやりの心を持ち親切にすることに関する内容項目である。望ましい人間関係を構築するには、互いが相手に対して思いやりの心を持って接するようにすることが不可欠である。思いやりとは、相手の気持ちや立場を自分のことに置き換えて推し量り、相手に対してよかれと思う気持ちを相手に向けることである。つまり、親切は目に見える行為だが、思いやりは目に見えないものである。指導に当たっては、思いやりの意義や大切さについて一度立ち止まって考える必要がある。そうすることが望ましい人間関係を築くことにつながっていくと考える。相手の立場や思いを理解しようしたり、気持ちを考えたりすることを通して、親切な行為を支える思いやりの気持ちを育みたい。

(3) 本時のねらい

ぼくのおばあさんに対する思いやりを考えることを通して、思いやりのよさや大切さについて理解を深め、思いやろうとする道徳的心情を養う。

(4) 模擬授業

上記の内容で模擬授業を行った。この授業で大切にすることは次の2点である。

ア 主人公に対する共感的理解

「ぼく」は学校帰りに重そうな荷物を持ったおばあさんに出会った。迷いながらもおばあさんに対して、荷物を持とうと声を掛けたが断られてしまった。この場面を実際に子どもと教師で役割演技をして断られることで、おばあさんに対し



てマイナスのイメージを抱いた「ぼく」の理解に寄り添うからこそ、2回目に同じ場面で見守ることを選んだ「ぼく」に対する子どもの問いを生ませることができると考えた。

イ 子どもの意見に対する投げ掛けによって、思いやりの見方・考え方についての共有の仕方

中心発問やその後の補助発問において、子どもの問いに対する、思いやりの見方・考え方を個・全体に投げ掛けることで、授業のねらいである道徳的心情を高めようと考えた。道徳的価値である思いやりを捉えるため、おばあさんに対しての思いが出た意見に対しては問い返しを行い、様々な見方・考え方が出るように工夫した。

3 指導助言 愛媛県教育委員会義務教育課 指導主事 赤松 聖則 様

(1) 明確な指導観に基づく授業づくり

指導観の一番目に位置付く道徳的価値の理解については、授業づくりの出発点となるため、特に大切にしたい。教師が本時に扱う道徳的価値について十分に理解してはじめて、子どもの実態、教材活用の在り方、指導方法等を明確にすることができる。「生命の尊さ」という一つの道徳的価値をとってみても、その中には、生命の有限性をはじめ、連続性、唯一性、優先性等、その価値を支える要素が多数含まれている。教師はこれら道徳的価値に含まれる要素を多面的・多角的に捉え、深く理解しておく必要がある。この道徳的価値の確かな理解が、教材の適切な活用や子どもたちの多様な考えの創出につながり、ひいては授業の充実に結び付くと考える。

(2) 学びを深めるための問い返し発問の重要性

学びを深めるためには、発問の工夫が必要不可欠である。中心発問はもとより、問い返しの発問を工夫し、子どもたちが思わず考えたいような場面を多くつくるのが大切である。本時においても、たくさんの問い返しの発問により、子ども役の先生方が「うっ」と考え始め、自分との関わりで道徳的価値について理解を深める場面がたくさん見られた。

問い返しの発問は、教師の指導観に基づき、本時のねらいや子どもの実態、思考の流れ等によって決まるものであり、この教材であれば、この問い返しの発問というような正解があるわけではない。それを前提とした上で、本日、授業を見せていただき、「親切」に対する捉え方や考え方を深めるために、例えば、次のような問い返しの発問も活用できるのではないかなと思う。

- 相手に気付かれず見守るだけでも、「親切」と言えるのかな。
- おばあさんに「ぼく」の思いは伝わっていないよね。「ぼく」は残念に思っているよね。
- おばあさんが家に着いた後、見守っていたことをはっきりと伝えた方がいいのでは。

問い返しの発問を考えるに当たっては、「こう問い掛けたら子どもたちはどう答えるかな」といった、教師自身のわくわく感を大切に、授業では、子どもと一緒に考えることを楽しんでほしい。

(3) 授業で大切にしたいこと

道徳の授業を充実させるためには、その土台として日頃から何でも言い合え、認め合える学級の雰囲気をつくるのが大切である。このような支持的風土を醸成するためには、授業における子どもや教師の聴く態度が非常に重要になる。まずは教師がモデルとなり、日々の授業の中で聴き合いを大切にしながら、支持的風土をつくっていくことが求められる。本時において、大橋先生は発言者の方をきちんと見て、うなずいたり、相槌を打ったりしながら話を全身で受け止めていた。先生の受容的な態度が、何を言っても大丈夫だという温かい雰囲気を生み出し、子ども役の先生方の安心した学びにつながっていた。大橋先生の人間味ある指導や、子どもと共に考え、悩み、感動を共有していこうとする姿勢を、どの先生方も見習ってほしい。

第3分科会 授業提案【中学校】

提案者 松山市立北条南中学校 教諭 大柳 美優

1 発表のテーマと概要

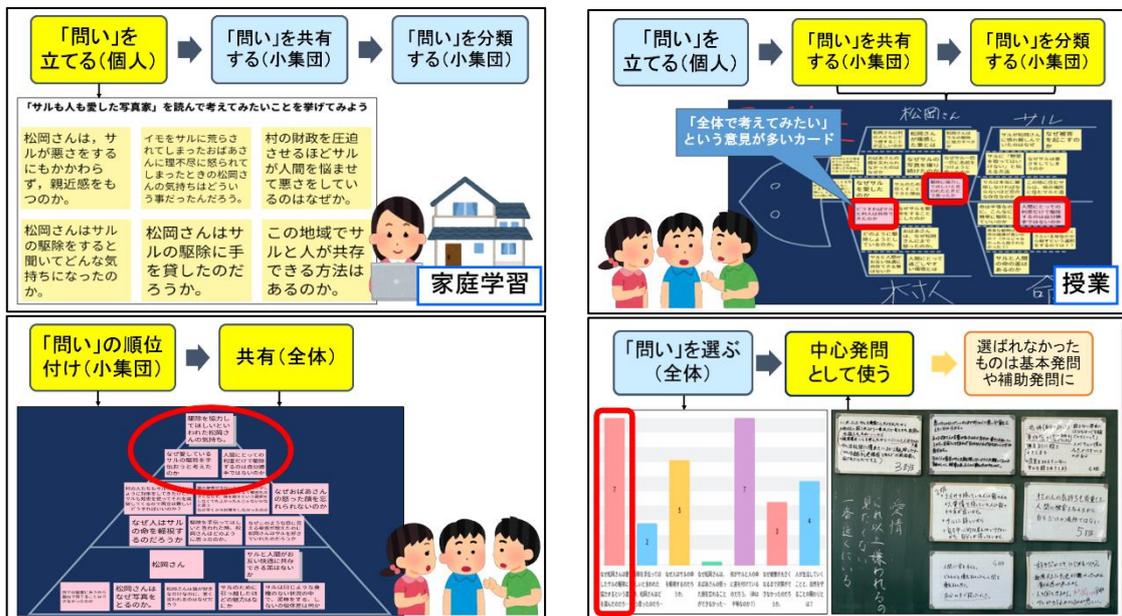
本分科会では、道徳科の授業における問題解決的な学び方の工夫をテーマとして、授業の提案と演習を行った。提案した実践は、生徒同士、あるいは生徒と教師間の問題意識の差をなくし、本当に考えたいことを明らかにしていくために生徒が立てた「問い」を生かす、「問い」を立てる授業である。また、授業の過程では、価値に対する考えを深め合うために、協働学習支援ツールを活用して意見交換の充実を図っている。今回は、提案内容と、その後の演習で出た意見の一部を抜粋して報告する。



2 発表の内容

(1) 「問い」を立てる学習活動について

提案した実践は中学3年生で行い、内容項目は【D 生命の尊さ】を扱った。教科書から二つの教材（「命の花プロジェクト」「サルも人も愛した写真家」※どちらも「中学道徳3」教育出版）を取り上げ、3時間かけて行っている。第1時に「命は本当に平等なのか」考え、授業への意識付けを行った。第2時までの間に家庭学習で感想を共有するなどして、家庭学習と授業の一体的な充実を意識し、学びの継続を図った。第2時では生徒があらかじめ立てた「問い」を小集団で精選し、全体で中心発問を決定した。そして、第3時で、生徒が選んだ中心発問を基に授業を構成した（資料1）。



資料1 第1時から第3時までの流れ

(2) 学びを深め合うための交流し考える学習の工夫について

「問い」を立てる授業では、主に共有ノート（資料1）を活用して自由に意見交流をしたため、生徒は必要に応じて他班の内容から参考になる考えを取り入れていた。これにより、小集団では思い付かなかった考えが出てきたり、行き詰まっていたところが補われたりするなどして、それぞれの考えを深めていた。

また、小集団活動時には、話し合いの質を高め、自分たちで学びを深められるように、「フレーズ集」を提示した。



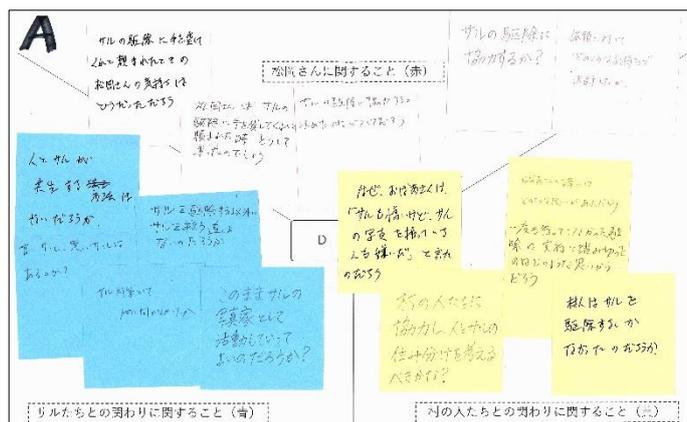
資料2 共有ノート

3 演習の様子

提案後、小グループに分かれて、実際に授業をするならばどのような中心発問を立てるのがよいか意見を出し合った(資料2)。

その結果、中心発問は「村人からサルの駆除に協力してほしいと言われたときの松岡さんの思い」に焦点を当てたものにするのがよいのではないかという意見が多数出た。また、「自分が松岡さんならどのような決断をしただろう」や、「自分が松岡さんなら命の選択ができたかどうか」といった、“命の重さ”や“命の選択”といったテーマまで落とし込んでいけるのではないかという意見も出た。

参加者の先生方と、中心発問について意見交流することで様々な面からの気づきがあり、大変有意義な時間になった。



資料3 小グループの話合い

4 指導助言 愛媛県教育委員会中予教育事務所 指導主事 友澤 美和 様

(1) 問題解決的な学習について

愛教研道徳委員会では、子どもたちの道徳性を育てるには、学びがいのある授業を積み重ねていくことが大切であると考えられているが、大柳先生の授業はまさに「学びがいのある授業」だったと思う。道徳科の特質を生かした授業を行う上で、問題解決的な学習等を有効に活用することが重要だと言われている。道徳科における問題解決的な学習とは、子どもが生きる上で出合う様々な道徳上の問題や課題を、多面的・多角的に考えながら課題解決に向けて話し合う中で、道徳的諸価値のよさを理解し、自分との関わりで道徳的価値を捉え、道徳的価値を自分なりに発展させていくようにすることである。このような学習となるためには指導方法の工夫が大切であるが、本実践では、生徒にとって「解決したい」「みんなで考えたい」「考える必要がある」と感じられる問題が存在し、それを解決するために、共有ノートや思考ツールの活用、フレーズ集を提示するなど、様々な工夫がなされていた。

(2) 問いの設定について

本実践では、生徒が個人で考えた問いを基に、グループでそれらの問いを分類したり、上位になるものを考えたりしていた。これは、生徒が導入の段階で多様な視点から物事を捉えて問題意識を持ち、人間としての生き方について考え、語り合う学習を、繰り返し積み重ねているからできたことである。子どもの問いから授業を創ることは、授業時数の確保や継続性の面において課題があるとのことであったが、子どもたちが事前に教材を読み、「考えてみたい問い」を考えたものの中から教師が指導の意図を明らかにした上で、何を中心にして自分との関わりで考え深めさせていくのかを考慮し、発問を組み立てていくのであれば、無理なく実践できるのではないかと。

(3) 言葉の大切さ

道徳科の授業において、言葉が担う役割は大きい。「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、いじめの態様で最も多いのは、冷やかしか悪口といった言葉によるいじめである。これを鑑みると、教師自身が言葉をいかに大切に扱うか、子どもたちに言葉の大切さをどれだけ伝えられるかが重要になる。本実践では、フレーズ集が活用され、生徒同士が友達の言葉を引き出そう、大切にしようという様子が伺えた。また、自分の思いを豊かに表現する生徒の姿があった。これは、大柳教諭が日頃から生徒の言葉を大切にされていることの表れだと思う。本実践では「子どもから生まれる問いを尊重する姿勢」「教師自身が考えることを楽しむ姿勢」など、多くのことを学ばせていただいた。貴重な提案をいただいたことに感謝したい。

特別講演記録

演題「内面的資質としての道徳性を主体的に養う道徳科の授業」

文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官 堀田 竜次先生

1 はじめに

こんにちは。調査官の堀田です。今から先生方と共にしっかりと学んでいきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。できる限り授業に生かせるようにお話をしたいと思っています。

今日は、「内面的資質としての道徳性を主体的に養う道徳科の授業」についてお話をさせていただきます。この文言が一番大事だと思っていますので、この文言をイメージしながら今日の研修を振り返っていただけるとありがたいです。

私の出身は、鹿児島県です。鹿児島県は、南北 600km あります。初任校は沖永良部島で、3年間過ごしました。教頭のときは甑島(こしきしま)で、60人ぐらいの小学校の子どもたちと30人の幼稚園の子どもたちと共に、楽しく過ごしていました。小中一貫教育の取組をしており、中学校の先生方と、道徳科をはじめ様々な教科等でお互いに交流し、非常に楽しみながら小中一貫教育を進めたことを記憶しています。

今日、この愛媛県の研修の在り方はとてもすてきだと思いました。それはなぜか。今、中教審答申は、子どもの学びと教職員の学びが相似形であってほしいと言っているのです。要するに、子どもたちに「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」を言うのであれば、教職員の学ぶ姿についても、「主体的・対話的で深い学び」であってほしいということです。そういう視点で、今日、午前中の分科会を参観させていただきました。例えば、小学校の分科会は、先生方がワークシートに、どのような中心的な発問をしたいかということを書き込んで考えていました。道徳科で言うならば、道徳的諸価値についての理解を踏まえながら、今までの経験を基に自己を見つめる作業をされていたわけです。そして、それをグループで共有されていました。

赤松指導主事が、4月に『初等教育資料』の「指導主事アイ」というコーナーに、「愛顔(えがお)あふれる」というキーワードを前面に押し出して、愛媛県の取組を書いてくださいました。今日の小島先生の基調提案にも、最後にこのキーワードが出てきました。私は、この言葉がとても好きです。「愛顔(えがお)あふれる」の「えがお」が「愛」にあふれているわけですね。よく道徳科のマークに私はハートを使うんですが、まさに「愛」だと思います。この「愛顔(えがお)あふれる」というフレーズを、愛媛県の先生方に大事にしていただけると、子どもたちも、とても楽しく幸せに過ごしていくことができるんじゃないでしょうか。そして、小島先生の発表の中で、「これからも」と「も」が付いていました。これがすごく大事だと思いました。愛媛県の道徳教育は、しっかりとしています。児童生徒の実態をしっかりと踏まえながら、「道徳教育」と「要である道徳科」を進めてくださっているということがよく分かる。だから「も」が使っており、更に大事にしたいのが、「学びがいのある授業」ということですね。その中で、対話の在り方を要として、「共に考え、語り合う場」がある。これ、好きですね、私も。

2 午前中の分科会の振り返りから

今日の研修を振り返ってみましょう。それぞれの部会では自分の考えを持ちながら学んでくださっていました。例えば、中学校部会では、付箋紙を使って発問がどの視点から考えられるかということ、協議し



てくださっていました。まさに、共に考え、語り合う。「物事を広い視野から多面的・多角的に考えている先生方の研修の場があった」ということです。そういったことを考えたときに、主題名のことや整合性、一貫性の話が出てくるので、これを押さえておきたいと思います。

ねらいというのは解説によると、「道徳科の内容項目を基に、ねらいとする道徳的価値や道徳性の様相を端的に表したものです。先ほど小島先生が指導案も示してくださいましたが、まさに、このことなのです。教材については、主題設定の理由の、教材の活用の中に示されています。主題名というのは、ねらいと教材で構成し、授業の内容が概観できるように端的に表したものです。なぜ今日はこれを出したかという、授業について、「親切」、例えば、小学校であれば、「親切、思いやり」について考えているけど、なんとなく「勇気」の話になっているなどということがあります。中学校の森脇校長先生は、教師はねらいをもって、しっかりと授業しなければいけないと言われていました。ねらいをもって授業し、子どもたちが話し合っているときに、グループの話が「なんかちょっと違う」というときが、いっぱいあるわけです。そのときの一番のポイントは、ここでいうならば「主題名を教師がいかに意識して子どもたちに声を掛けているか」ということになるわけです。そうすることによって授業がぶれないということです。教師はねらいをもって授業をしているわけですので、手掛かりとする内容項目やねらいとする道徳的価値を意識しながら机間指導をしたり、対話をしている子どもたちが考えることができるようにしたりすることが大事です。小島先生の発表や森脇校長先生の提案をお伺いしながら、そのとおりでいい、今、申し上げたところです。

森脇校長先生の部会は、先生方が資料に、教材提示を例として挙げてくださっていました。例えば、写真、4コマ漫画といった形です。このことについては、解説書の中の教材提示の工夫の中にしっかり書いてあります。例えば、教材を提示する方法としては、読み物教材の場合、教師による読み聞かせが一般的に行われています。紙芝居や、ペープサートもあります。劇のように示すこともあります。もっと、ほかにもありますね。また、ビデオや映像、これらも吟味した上で使用することは全然構いません、可能だということです。事前に年間指導計画等を検討する際に、児童生徒の実態を踏まえながら意図的、計画的に生かしていただくのも今日の研修の大きな参考になる部分じゃないかと思っております。そういったことを考えたときに、今日、森脇校長先生たちに対するお礼としてのまとめとなりますが、今日のような講座は、小学校であれば76～77ページ、中学校であれば74ページに該当します。学習過程や指導過程、指導方法については、児童や学級の実態などに応じて適切な方法を開発する姿勢は大切だが、やはり基本的な学習指導過程については共通理解を図っておく必要があると示されています。そういったことを、例えば、校長先生を中心に道徳教育推進教師等のリーダーシップの下、みんなで共通理解した上で、多様な指導方法を考えていくことは非常に大事だと、今日の分科会を参観させていただく中で強く思ったところです。ぜひ参考にいただければと思います。

次に、小学校部会では、教材が「親切、思いやり」の教材を取り扱い、模擬授業をしてくださっていました。模擬授業は、やっぱり参考になりますね。私は、ちょうど先生が役割演技をしてくださるときに会場にいました。大橋先生、良かったです。間が大事ですね。発問した後に、すぐに次の言葉を出しそうになりますよね。あれは、意外と我慢しないといけないのです。私も多分、「ちょっと隣の先生と話してください。」と言って、「すぐやめてください。」って言うかもしれません。模擬授業だと、間の大切さも分かりやすいと思いました。また、内容面について、主体的に子どもたちが考えるということを教師がイメージするのであれば、子どもたちがどんなふうに分かるとかというのをしっかりと捉えておかないといけないということになります。発問は、児童生徒の実態によって変わってくるのですが、学習指導過程の中に示しておく必要があると思います。また、子どもたちがどう考えているかということを考えながら、発問等を精選していく必要があると思いました。

例えば、子どもたちが教材の道徳的な問題等を自分事として受け止めて考えることができるような発問になっているか、あるいは、日常生活や学校生活等を想起しながら考えているか、などと考えることが、目標にある、道徳的諸価値についての理解を基に自己を見つめ、自己理解に進んでいくところと大きく関係があります。ですから、こういったイメージをもちながら発問を構成していくことも、大事だと思います。

中学校部会では、動物と人間との共存に関わる、絶対答えがないかも、と思うような教材でした。命について本当に深く考えさせられる教材で、マトリックス的な思考ツールに、それぞれの立場の中からどんなことが考えられるかというのをを出していき、それについてみんなで考えてくださっていました。中学校で生命の尊さについて考えるときには、小学校でどんなことを学んでいるのかということ把握しておくことが大事になってきます。生命の尊さの内容項目が、小学校の低学年からどういう構成になっているかというのを分かっておかないと、今日の教材を吟味するときに、これは小学校の高学年でも十分、考えていることじゃないのかという話になるわけです。

例えば、低学年であれば、生活経験の中の生きている証、家族の思い等について考えることが中心になってきます。そして、中学年であれば、死の理解、唯一無二、多くの人々の支え、与えられた命等について考えることが中心になってきます。高学年であれば、つながりの中で共に生きる、生命の誕生から死に至るまでの過程等について考えることが中心になってきます。じゃあ、今日のように中心的な発問を議論する中で、このことを踏まえた上で、あれだけ難しい、いろんな葛藤が生まれると考えられる教材についてどう考えるか、となったときに、やっぱり感謝の念とか偶然性とか有限性とか連続性とか自他の生命の尊重について考えることができるような発問が大切ではないかと思いました。

学習指導要領解説は、幼稚園から中学校3年生までの発達の段階が踏まえられるような構成になっています。ぜひ、解説の内容項目をしっかりと確認した上で授業を構成してください。今日の分科会は全てそれがイメージされていたのでうれしく思います。

道徳科講座の部屋に私が入ったとき、目の前にいらっしゃった先生は、学習指導要領の内容項目のところを開いていました。なおかつ、気になったところに付箋がしっかり貼ってあって、さらに、大事だなというキーワードには、蛍光ペンが引いてあったのです。それを見た瞬間、うわ、これは、先生がここまで内容項目等を把握しながら、教材をどう活用しようかと考えてくださっているのだなというのを感じることができて、先生に学んでいる子どもたちは、きっと幸せだろうなと思ったところです。ぜひ、解説の内容項目も含めてご覧いただきながら、授業で活用する教材を見ていただけると、きっとヒントが多々あると思います。

3 先進校の取組から

小島先生の発表でも、ICTが学校教育を支える基盤的なツールだとありました。ここで、ある学校の取組をご紹介します。今日の資料は、愛教研の道徳委員会のホームページからダウンロードできるということです。それってすごく大事なことで、欲しい人がいつでも見られますよね。欲しい人がいつでも見られる。それを学校内でやっている例です。例えば、指導案をクラウドに全部集めているのです。また、私が指導に行ったときに配った資料をPDF化して、全部見られるようにしています。あと、授業研究をした後の授業研究の記録もアップできるようにしてあるわけです。義務感が出るとあっぷあっぷしてしまいますので、最初からフォームをつくっておいて、自然とアップできるように準備しておくのです。今、ちょっと笑うところでもあったのですが。

もう一つは、板書をクラウド上にアップできるようにしてあるのです。小学校1年生の「親切、思いやり」の板書と、6年生の「親切、思いやり」の板書が同じようなものだったらおかしいですね。発達の段階が違いますから。指導に日頃、悩んでいた、「うーん、ほかの学年どんな授業しているのだろう。」と思ったりし

たときに、クラウド上で板書を見るだけで、ヒントを得ることができるような状況です。そして、見た先生が感想を入力したり、「こんな方法もあるんじゃない」と入力したりすることによって、文章が並んでいく。それぞれの先生が適宜、見ることができるように、クラウドを活用しているという例です。

もう一つ紹介すると、「礼儀」の授業で、ワークシートの選択について、小島先生から発表がありました。これは、礼儀について考えるときに、思考ツールを子ども自身が選んで考えるという方法です。個別最適な学びの「最適」の言葉の意味を簡潔に言うと、最適とは「本人が決める」ことですよね。そして、「本人が考える」ことです。道徳科の授業において「礼儀」について考えようと思った子どもたちが思考ツールを自分で決めて、そして、自分で考えていくように教職員が手立てを取っていたという授業です。これも、方法の一つとして考えられます。

もう一つ、紹介します。チャットの活用です。中心的な発問の、意図する文脈でチャットを使うと、子どもたちの意見が出てきます。すると、先生は、「あ、〇〇さんはこんなこと考えたんだね。」「〇〇さんはこんなこと考えたんだね。」というふうに、スレッドで流れてくる子どもの発言を時折、声に出して言ってあげるわけです。子どもたちは短文で書くのが得意ですので、そのチャットを見ながら、こうして、「わー、この友達（あるいは、先生）と話したいな。」とか思いながらチャットを打つわけです。そして、先生が、「はい、じゃあ、友達と話したり、このことを聞いてみたいと思う友達のところに行ったりしてごらん。」と言うと、子どもたちはもう自然と集まって行って、多面的・多角的な考え方が進んでいくことになるという方法です。今、私は「方法」と強調して言いました。やっぱり私たちが忘れていけないのは、ICT端末の活用とか大型提示装置の活用が、目的にはなってはいけないということです。私たちが明確な意図をもって授業を行うからこそ、指導方法の工夫が生まれてくるということは、絶対に忘れてほしくないなと思っているところです。

4 道徳教育アーカイブなどの授業の様子から

道徳科の授業の充実を図るために、文部科学省では、「道徳教育アーカイブ」の充実を図ろうとしています。実は一昨日、「感動、畏敬の念」の動画を道徳教育アーカイブにアップすることができました。今年度、小学校5本、中学校5本アップするつもりで動いていますので、道徳教育アーカイブをぜひ、ご覧いただければと思います。ただ、道徳教育アーカイブを見るときに忘れてほしくないのは、この授業を参考に、自分だったらこんな授業ができるかもしれない、こんな場面での発問の仕方は、生徒の実態からするとちょっと変えた方がいいなとか思いながら見てほしいのです。教材の提示の仕方もこの方法しかないという見方をされてしまうと、道徳教育アーカイブの意味がなくなっていきます。やはり、道徳教育アーカイブは、愛媛県が今まで大事にしてきた道徳教育や道徳科の授業の視点を踏まえながら見ていただいて構わないと思います。要するに、そのようにして授業のよりよい改善を図り、学びがいのある授業にしていっていただければと思います。

例えば、「よりよい学校生活、集団生活の充実」の授業の中でポイントとなる「役割」「責任」「約束」等の言葉が、具体的な話の中で、しかも、40~50人の先生が見ている中で出てきますのでご覧ください。（授業の映像を見て）こういった真剣な語りにつなげていくためには、その学級だけやればいいのか。違いますよね。まずは低学年のときから中学校3年生までをイメージしたときに、ペアで話す場をつくったとか4人で話す場をつくったとか、道徳科の授業以外でもそういった場面を積極的につくって、子どもたちが対話する、語れるような場を設定してあげないと、当然、語る場がないのに語れないですよね。このことは、道徳科以外でも大事になってくると思うところです。このようなことを大切にしながら質的充実を図る必要があるということです。そういったことを考えていくと、ちょっと分かっていないといけないのが、2022年のPISA調査のときに文部科学省が今後、取り組むべきことと出して出したものです。この前のPISA調査

て数学的リテラシーを中心分野として調査したのですが、科学的リテラシーも読解力も非常に高い水準にあったわけです。要するに、先生方の日々の授業改善が非常に生きていたということなのです。だから、今後も主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善は、しっかり行っていきましょうということだと思います。

そして、もう一つが、「自立した学習者の育成」です。これは、課題として挙げられたわけです。そうしたことを少しでもクリアしていくためにも、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実を通じた、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善とGIGAスクール構想を着実に実施していきましょうという話だったわけです。

私はこれを見たときに、道徳教育も絶対、大事だと改めて思いました。道徳教育の目標の中に、「自立」という言葉は元々、入っていますよね。ということは、「自立した学習者を育成していくためには、やっぱり道徳教育でよりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことが大事」ということです。このことを、愛媛県の皆さんと共通理解をしておかないといけないと思います。加えて、このことを小・中・高等学校の目標として見たときには、次のように書いてあります。小学校は「*自己の生き方についての考えを深める*」、中学校は「*人間としての生き方についての考えを深める*」、これは道徳科においてです。さらに、高等学校については、「*人間としての在り方や生き方についての考えを深める*」となっているわけです。高等学校については、学校の教育活動を通じて行う道徳教育においてということなのです。私たちは、発達の段階にも関わる目標の違いを分かっていないといけないということなのです。

その中で、「道徳性を養う」の道徳性について、私が最近、特に大事にしてほしいと思うことが何かというと、「人間らしいよさ」です。この「人間らしいよさ」というのは、まさに自己肯定感だったり、自己有用感だったりします。道徳性を養っていくと、子どもたちはよりよく生きたいと思うようになり、自己肯定感や自己有用感等が育まれていくだろうということが、この道徳性からもよく分かるということなのです。あともう一つは、「*道徳的価値が一人一人の内面において統合されたもの*」ということなのです。つまり、「親切、思いやり」、「思いやり、感謝」だけを一年間学べばいいということではないのです。遵法精神、公德心や生命の尊さなど、いろんな手がかりとする内容項目、ねらいとする道徳的価値について学んでいくからこそ、道徳性が養われるということを言っているわけです。その中で人間らしいよさも実感できたり、味わったりすることができるのです。道徳教育の全体計画や道徳教育の年間指導計画の重要性が、この道徳性から分かってきます。このことを先生方にもっとご理解いただくためには、先ほどから道徳科の解説の話をしていますが、ぜひ、道徳科の解説プラス学習指導要領解説の総則編を読んでいただけたらうれしいなと思います。

総則編に道徳教育の重要性とか学校、家庭、地域との連携の重要性、更にいじめの問題の件についても触れていますので、ぜひ、ご覧いただけたらありがたいです。こういったことを踏まえながら、補充、深化、統合の役割を担っている道徳教育、要である道徳科について、今から残りの45分で語っていきたいと思います。

5 道徳科の目標

そして、道徳科の目標です。「第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己の(人間としての)生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」このことは、今日、どの部会でも、示していただきました。道徳科では、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野か

ら)多面的・多角的に考え、自己の(人間としての)生き方についての考えを深める学習を、道徳性を養うために、道徳性の諸様相を育てるために行ってくださいという、分かりやすい目標なのです。これを大事にいただければ、子どもたちの道徳性は養われるということですので、先生方は、学校に戻られたときに道徳科の授業で悩んでいる先生がいたら、「この目標にある学習をすればいいよ。」と、一言言ってあげてください。

6 道徳科の特質とは何か

隣の先生方と「道徳科の特質とは何ですか。」と、今から2分間、話し合ってもらいます。「特質」を分かりやすくいうと、「ならでは」だと思ってください。「道徳科ならでは」です。いいですか。

今日のテーマですよ。『*内面的資質としての道徳性を主体的に養っていく時間*』が道徳科の特質です。解説にずばり書いてあります。で、これを示すと、長すぎると言われるのです。だから、先生方は、「道徳科の特質って何か。」と聞かれたときには、「*道徳性を養うこと*」とまずは言ってください。「道徳性を養うこと」、これがまさに道徳科の特質です。他の教科と違うところです。そして、ぜいたくを言うと「*内面的資質である道徳性を養うこと*」と、できれば言ってほしいと思います。更にぜいたくを言うと「*内面的資質である道徳性を主体的に養っていく時間*」まで言っていただけると、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を、道徳科もしっかりと進めているということが皆さんに伝わっていくと思います。

このように、道徳性を主体的に養っている子どもたちがどんな学習をしているかということ、私たちはイメージしておく必要があります。子どもたちは、道徳科の学習において、「*人生いかに生きるべきか*」ということを考えながら学習しているのです。つまり、生き方の問いを考えているということなのです。では、教師が、よりよく生きたいと思いながら生き方の問いを考えている子どもたちに対して、どういうことを前提に授業を行えばよいかということですね。これは小島先生の基調提案の中にもありました。子どもたちは、「よりよく生きる」ということを考えながら学んでいますので、そのような学びをしている子どもたちと教師は共に考え、共に探求することが前提となるということです。以前次のような質問がありました。なぜ、探求の「きゅう」は「求」なんですかと。これは解説に全部書いてあることなんですが、調査官の先輩方も大変大事にされてきたことで、「よりよい生き方を求める」ということです。だから、探し求めるの「求」です。ただし、「真理の探究」は「真理を究める」という願いがこもっていますので、真理の探究の「きゅう」は「究める」です。あと、課題追究等も「究める」と書いてあると思います。ここでは、「よりよい生き方を求める」というふうにご理解いただければと思います。

では、具体的な授業場面を述べていきましょう。「考え、議論する」の「考える」は、「主体的・対話的で深い学び」の「主体的な学び」と言えます。ですから、子どもたちに自分の考え方、感じ方を明確にする時間を取っていただかないといけないということです。そして、多様な考え方と出合う場面は、対話的な学びですので、その時間をしっかり取っていただきたいということです。それをつないで、関連付けることによって、深い理解、深い考えとなっていきます。ですから、「考え、議論する道徳」は、「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」に資するということになります。つまり、考え、議論する道徳をしていただければ、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善が行われているということになります。このことには、解説書でいうと、小学校は110ページの下から8行目、中学校は112ページの下から8行目を見ていただければと思います。

7 中学校『一冊のノート』から

主体的・対話的で深い学びの「主体的」とは「見通しと振り返り」ですので、やはり導入が大事になってくるわけです。ここで『一冊のノート』の導入場面を2分間見ていただきたいと思います。自分だったらどん

な導入ができるかなと思って見ていただければと思います。

(映像から)

今日は、家族の在り方について考える時間にしたいと思います。以前、みんなに家庭でのコミュニケーションに関するアンケートをとりました。覚えていますか。「家の人とふだん、夕食を一緒に食べますか。」について、どう思いますか。「はい」か「いいえ」でどうでしょうか。「おーっ」って感じてでしょうか。次の「どれくらい学校での出来事について話しているのかな。」については、どれくらいだと思いますか。頭の中で想像して。「おー」ですか。でね、「家の手伝いをしますか。」これはどうですか。「家の人から頼まれたらする。」という人が多めでしたね。一番興味ある。「あなたにとって家族とはどのような存在ですか。」という質問に、みんなはこんなふうに考えてくれました。家族についての捉え方も人それぞれだということが分かりますね。今日は家族の在り方、なんかこういうとちょっと難しく感じるかもしれないのだけれども、家族との関係、家族との向き合い方について考える時間にしたいと思います。今日の登場人物は、主人公、僕、そして、最近、物忘れが激しくなってしまったおばあちゃんです。皆さん、事前学習で認知症について学習したと思います。ちょっとそのことを思い出しながら今日のお話を聞いてください。

という導入です。こういう導入もあると思います。『一冊のノート』は、範読をすると10分以上かかりますよね。そういったときに導入はどうあればいいのか。あともう一つの問いとして、中学校部会で大柳先生が準備してくださっていた資料が参考になると思います。その中で「生徒の問い」という一覧表ができてありましたが、その問いを、どのようにして子どもたちがその授業でもつことができるようにするかということは、先ほど申し上げた「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善の見通しを持つ」ことと、「自己の人間としての生き方の考えを深める際の一つの柱立てとして考えたときの自分の振り返りの視点」としても、非常にその問題意識というのが重要になってくるわけですよ。そういった点で、導入がどうあればいいのかということを考えていく必要があるのかなと思います。私がこのように言うと、例えば、めあてを書く必要があるのか、ないのかという話になります。そうしたときに、毎回、めあてが必要なのかと逆に疑問を持つときも当然、出てくるわけです。これは、黒板の縦書きと横書きとも関連してくるのですが、「意図があるかどうか」ということです。めあて等をもつ意図がはっきりとあるかどうか、ということが重要なポイントになってくるので、そういった意図を踏まえながら導入の在り方も充分にご検討いただけるとありがたいと思います。

先にいきます。先ほどの道徳的判断力、心情、実践意欲、態度について、少し言葉を優しくして示すとすれば、こんなことが言えるんじゃないかということです。

今日の道徳科講座の中であったように、教師はねらいをもって授業を行っているので、道徳的心情を育てるのであれば、「いいことを見たり、したりしたときには気持ちがいい。」とか「悪いことを見たり、したりしたときには気持ちが悪い。」というようなイメージを子どもたちが授業でもつことができるような授業をする必要があるわけですよ。教師としては、ねらいをもっているわけですから。態度であれば、子どもたちがみんなの考えを聞きながら、先生と教材の生き方について共に学びながら、身構えたり、それに備えたりすることができるような、イメージをもてるような授業にする必要があるということです。さらに、「道徳的諸価値についての理解を基に」というのは、もうこれは浅見先生も赤堀先生もいつもおっしゃいますが、「価値理解に関わる発問があるといいな。」とか「人間理解に関わる発問があるといいな。」というように、発問に関係してくるわけです。あるいは、「他者理解に関わる発問があるといいな。」ということになります。それを子どもたちが自分との関わりで捉えることによって自己理解が深まっていきます。中学校の解説に価値理解、人間理解、他者理解は具体的に示されていませんが、小学校でこのような考え方をしているの、中学校の先生方も発問のイメージはこのイメージをもっていただいて構いません。そういう流れ

の中で自己理解を深めていくわけです。

この自己理解を深めるということは、例えば、個別最適な学びの学習の個性化にもつながっていく可能性があります。それはどういうことか。1単位時間の中で、子どもたちが道徳的価値の自覚を深めて、人間の生き方についての考えを深めたときに、課題を見つけたり目標を見つけたりして成長を実感します。35人いる生徒が全員同じことを思うはずはないですね。そうしたときに、それをクラウドとかICT端末を使ってとりためておいたりとか、ワークシート等でとりためておいたりして、子どもたちが適宜、いつでも振り返られるようにしておく、子どもたちは自分で決めて、自分で考えて、自分の成長やそのねらいとする道徳的価値について振り返ることができるようになっていくわけです。そういったことをイメージしていただくと、個別最適な学びも、すごく捉えやすくなってくるかなと思います。要するに、子どもたちが思ったことを大事にしていってあげるとうれしいなと思います。

8 小学校『はしの上のおおかみ』から

『はしの上のおおかみ』は、考えやすいと思います。今まで学んできたことを具体的な発問とその流れで考えてみたいと思います。これをもし、「親切、思いやり」、「思いやり、感謝」の、「道徳的心情」の視点から授業を構成するとすれば、どうでしょうか。

中心的な発問は、「抱いて渡してもらったおおかみはどんな気持ちでくまの後ろ姿を見送っていたのでしょうか。」と、おおかみがくまの姿を見たときのことです。最初の発問は、「おおかみはどんな気持ちで『戻れ、戻れ。』と言ったのでしょうか。」「しちやいけないと分かっている、つついしてしまう」という人間理解に関わる発問です。次に、「くまはどんな気持ちでおおかみを渡してあげたのでしょうか。」という発問です。これは、おおかみを通してくまを見ている。発問を通して他者を考えることができるので、他者理解に関わる発問ではないでしょうか。三つ目、「抱いて渡してもらったおおかみは、どんな気持ちでくまの後ろ姿を見送っていたのでしょうか。」という発問は、「親切、思いやり」、「思いやり、感謝」について子どもたちは考えることができるので、価値理解に関わるイメージができるのですが、私が他者理解も追記しているのは、友達の発表をたくさん聞くことによっても他者理解は深まっていきますよね。だから、あえて他者理解も付け加えています。

こういったようなことを通して、子どもたちは自己理解を深めて、道徳的価値を自覚し、自己の生き方についての考えを深める。森脇校長先生が強調してくださっていたように、ねらいをもって教師は授業をし、道徳的心情を育てているので、どんなイメージを子どもたちが捉えることができれば、「教師がねらいをもってやってよかったな」と思うかということですね。

これは、中心的な発問でも感じるすることができます。例えば、おおかみになって「してもらってよかったこと」を発表するわけです。そのときに教師が問い返しをしてあげるわけです。「おおかみにしてもらった。そのときどんな気持ちだったの。」と聞いたら、きっとしてもらってよかったので、「気持ちがよかった。」と、子どもたちは発言する可能性があります。自己理解のところでも、「よかったこと、うれしかったこと」と書いていますが、「親切にしてもらったことはありますか。」でもいいと思います。「そのときどんな気持ちだったの。」と問い返してあげると道徳的心情に関わるイメージをもった子どもたちの発言が出てくる可能性というのは十分にあるわけです。そういったことを教師がねらいをもって行うというのは、やっぱり授業の中では大事になってくるということです。

次に、「道徳的態度」であればどうなのか、こんな発問を考えていきます。今度はおおかみが実際にやったことを中心的な発問にするわけです。「うさぎを抱き上げて道を通した後のおおかみはどんな気持ちになったのでしょうか。」その前の発問は、「くまの後ろ姿を見送りながら、おおかみは、どんなことを考えてい

たでしょう。」最初は人間理解に関する発問で、「みんなを追い返したおおかみはどんな気持ちだったでしょう。」です。ここでもあえて他者理解を人間理解のところにしています。してはいけないと思いながらもやってしまうところについて、いろんな友達の発言を聞くことによって他者理解も深まっていきますよね。

それを今度は自己の生き方についての考えと道徳的価値の自覚を深めていくために、「親切にしてよかったこと、うれしかったことはありますか。」という発問に対して、してもらったことを子どもたちが発表するわけです。したことをたくさん聞く、いっぱいいいことを浴びていくわけですので、子どもたちに「構え」ができるわけです。具体的な場面が出てきて、「ああ、〇〇さんは、こんなときにあんなことができたのだ。」という構えができる。態度に関わるような授業をイメージできるようになってくるのではないのでしょうか。要するに教師がねらいをもって授業をしているということです。

そういったことを多面的・多角的に考える。「多面的・多角的に」って何度も聞いていると思うのですが、特に、「他者と対話したり、協働したりするから多面的・多角的に考えている」と思ったら駄目ですよ。その後に「考える」ってありますよね。考える。考えないと駄目なのです。だから、子どもたちが友達の考えを聞きながら、自分の考えと比べたり、「同じだな。」と思って聞いたり、「あ、新しい考え方がちょっと何か浮かんだぞ。」とか、「あ、自分が気付いてなかった自分の思いがあるぞ。」というのをメモしたり、または言葉で発することができたり、または表現することができたりするような場をつくってあげないといけないってことです。そういった授業が見られるとうれしいなと思います。

そして、一番大事な「自己の生き方、人間としての生き方についての考えを深める」です。「自己の生き方についての考えを深める」は小学校で、「人間として」が中学校です。中学校も「自己を深く見つめる」ってありますよね。ということは、中学校でも、自己を深く見つめる時間を取ってあげないといけないということです。じゃないと、他の教科の授業と間違えられてしまいます。せっかく生き方について学んでいるわけですので、しっかりと自己を深く見つめられるようにしていただけたらうれしいなと思います。小学校の解説には、児童も教師も「自己の生き方についての考えを深める」ということをしっかりと意識することが重要だと書いてあります。ということは、これは中学校も同じように大事にいただけたらうれしいなと思います。

さて、これは、学習支援ソフトを用いて、「自己の生き方についての考えを深める」を一斉に共有している場面です。内容項目は、「相互理解、寛容」。児童の考えを紹介すると、「人の意見の方が大事だと思っていたけど、自分の意見を尊重するのも大切ということが分かりました。自分と違う意見が出たらいいねとかコメントしたり、二つの意見が出たらそれを合わせたりするのがいいと思いました。」などがありました。評価の視点からするならば、「多面的、多角的に考えようとしているか」というところを見取ることができますよね。この学習支援ソフトで自己の生き方や人間としての生き方についての考えを深める。特に振り返るところで一斉共有すると生命の尊さとか友情、信頼とか家族愛に関わることなどは、個人にすることがたくさん出てくる可能性があるものが多分にあります。一斉共有を前提にして書いたり、入力したりすると、子どもたちは本当のことを書けなくなる可能性があります。だから、そこは十分に配慮をしながら、一斉共有をするときには名前は出さないとか、または声を掛けて数名挙げるとか、そうした配慮も必要になってくると思います。そこはお互いに、共通理解しておかなければいけないと思います。中学校では書く場面もあります。入力する場面も当然あります。あくまでも明確な指導の意図があってからこそその授業です。今までタブレット端末や板書のことも言ってきましたが、やっぱり「明確な意図が必要ですよ。」ということです。

9 小学校『およげないりすさん』から

では、『およげないりすさん』を具体的な授業場面と映像で見たいと思います。主題名が大事で

すね。「誰に対しても分け隔てなく」、これを聞けば、「公正、公平、社会正義」ということが分かります。ねらいは、「誰に対しても分け隔てなく接し、公正、公平にしようとする態度を育てる」というとき、ねらいとする道徳的価値について、指導案にも出てくるように、日頃から各教科等でも指導しています。でも、児童の実態としては、「公正、公平、社会正義」に係る課題がある。日頃から指導しているけれども、児童の実態としては、要である道徳科で「公正、公平、社会正義」についてしっかり考えることができるようにしなければいけない。だから、日頃からやっているんだけど、要である道徳科でしっかりやろうということで「深化」の授業として捉えるということ。そういう中で教材の活用について考えるとこういうことになるわけです。「りすさんを囲んで島へ向かうみんなの思いを考えさせる場面を大事にしたいよな。」と。

今日、中学校でありましたが、サルとの共存について考えるときに、まずは生徒の実態を思い浮かべながら、どの場面を中心的な場面にしたいのか考えると、中心的な発問を考えやすいかもしれません。明確な意図をもったからこそ、指導方法の工夫になるわけです。その指導方法の工夫を考えるときには、まずは中心的な発問から今日の演習みたいに考える。この場合は、りすさんを囲んで、島へ向かうときはどんな気持ちだったかということを考える。そのときに私が大事にしてほしいのは、児童の発言を予想しておくということ。そうでなければ、いわゆる問い返しも難しくなってきます。

その上で前後の発問を考えます。まずは、りすに、「いっしょにつれて行ってね。」と頼まれたときのみんなの思いを考える。そして、次に、りすさんをつれていかに島に行っているみんなはどんな気持ちなのか、島で遊んでいるとき、みんなはどんなことを思っていたのか。ここが役割演技の場面になります。今から動画が出てきます。この授業では、中心的な発問が、価値理解に関わる発問です。つまり、「公正、公平、社会正義」について考えられます。そして、りすさんに、「ぼくも一緒に連れて行ってね。」と頼まれたとき、本当は連れていけないといけないと思っているけれど、公正、公平な気持ちになれずに置いていっているのが人間理解に関わる発問となる。そして、いろんな意見を聞けば、他者理解に関わる発問でしょうね。そして、島で遊んでいるあひるさん、白鳥さん、かめさんのそれぞれの考えを役割演技で聞きますので、他者理解に関わる発問になるということです。具体的に見ていきます。

まず、導入ではアンケートを使います。事前アンケートです。このようにアンケートを示します。「不公平なことがあった、または見たり、そんな気持ちになったりしたこともあるよね。」でも、アンケートはこれだけではないのです、導入は。じゃあ、役割演技をしましょう。自我関与をして登場人物の思ったことを役割演技にします。でも、役割演技をするときって先生が視点を示してあげないといけないのです。見る子どもたちに対する視点も必要になってきます。この先生は、とても役割演技のスタートが上手です。一つは場面設定がしっかりしています。あと、しっかりと今から役割演技ですよっていうのが分かります。もう一つ、視点をしっかりと示しています。ちょっと見ていただくとありがたいと思います。

(映像から)

白鳥さんと、あひるさんと、かめさんを持って、考えたことをやってください。いいですね。じゃあ、最初の3人はどこかな。このチームいってみようかな。じゃあ、どうぞ。どうぞ。前に出てきてください。かめさん、こっちね。顔がこっち向いているからね。それでは3人に劇をしてもらいます。皆さんは今、自分が考えたことと比べながら聞いてください。「あ、似ている。」とか「ちょっと違うな。」とか。劇が終わったら白鳥さんと、あひるさんと、かめさんが何て言ったかを聞きます。それから劇を見て分かったことや考えたことを聞くことがあります。先生に言えるようによく考えながら見てください。じゃあ、あひるさん、白鳥さん、かめさん、準備はいいですか。

はい。公園です。島の楽しい遊具の前で3人が相談しています。よーい、はじめ。「やっぱさ、全然、楽しくないね。」「うん、そうだね。」「やっぱり、りすさんと呼んだ方がよかったかもね。」「あんないじわる言っちゃ

ったから、今ごろしょんぼりしているだろうな。」「なんかちょっと損した気がする。」「明日、りすさんと一緒に4人でまた島で遊ぼうよ。」「うん。それじゃ、僕がりすさんを背中の上に乗せて泳ぐね。」「うん、そうしよう。」

こんな感じです。役割演技の一つの方法としてご覧いただければいいかなと思います。1対1でするときには役割交代とかも多面的、多角的に考えるためには非常に効果があるのではないかなと思います。そういう授業展開の中で、子どもたちの発言を構造的にしっかりと板書してあげると、思考はより一層深まることになります。

子どもたちがワークシートを配る先生の様子を見ながら、自分は分からないな、ちょっと考えることがつらいなと思い、集まってきています。自然と集まってくることになります。これも実は個別最適な学び。自分で決めて、自分で考えて、先生の周りに集まって、ヒントを得て、自分の席に戻って、また考えることができる。そういう姿が子どもたちに出てくると自己調整が行われている学習が見えてきます。このような机間指導も、子どもの視点からするならば、指導の個別化にもつながっていくものですので、先生方は日頃から、こうした机間指導等も含めて個別最適な学びを行ってくださっているとと言えるわけです。要するに、今までの見方を子ども視点から見ただけであれば、先生方はきっと個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ろう、図ろうとされていると思います。

この授業の自己の生き方についての考えを深める最後のところで、このようなコメントが出てきます。「妹のお菓子を欲張って取ってしまったことがあって、つい『全部、お兄ちゃんの。』と言ってしまった。自分にやられたらどうなるのか考えてやめようと思ったので、妹に『ごめんね。』と言って、お菓子を渡しました。」

まさに、道徳的価値の理解を自分自身との関わりで深めているかどうかということ、大きくりの視点の一つの材料として見取り、その成果として生かすことができる場面が見てとれるのかもしれないと思うところです。

10 最後に

それでは、個別最適な学びの中で、私が一番言いたいところを伝えて、終わりたいと思います。今から先生たちが個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る際には、複線的な授業も出てくると思います。個別に学ぶ子どもたちと、協働で学ぶ子どもたちが出てきます。これは小学校低学年でも、中学校でもそういった場面が出てきます。ただ私たちがICT端末も含めてやっぱり大事にしなければいけないのは、私たちが明確な指導の意図をもっているということ。基調提案でもありましたように、児童の実態、生徒の実態と道徳的価値、教材の活用と合わせてしっかりとつかんだ上で、明確な意図をもって個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実するということです。それをつなぎ、関連付ける。とにかく個別最適な学びを孤立させては駄目です。必ず、協働的な学びとつないで、その上で、深い学びへとつなげていただくことが非常に大事です。

今日、学んだことを、日々の授業の実践の中で個別最適な学び、協働的な学びをつなぐ、関連付ける教師の役割を、十分に意図をもって、ねらいをもって進めていただけると、きっとより学びがいのある道徳科の授業というふうになっていくと思ったところです。またゆっくりとお話したいと思います。本日はまことにありがとうございました。

道徳教育アーカイブ

<https://doutoku.mext.go.jp/>



Ⅲ 研究大会報告

第60回全国小学校道徳教育研究大会(徳島大会)

松山市立久枝小学校 三宅 浩司

1 大会日程、会場

- ◇ 第1日 令和6年11月14日(木)徳島市国府小学校
全体会 公開授業 授業研究分科会
- ◇ 第2日 令和6年11月15日(金)パークウエストン
課題別分科会 基調提案 指導講話 記念講演

2 大会主題

自己の生き方についての考えを深め、よりよく生きる子どもを育てる道徳教育

3 大会の概要

(1) 会場校全体会

「内容項目」から「板書計画」に至るまでの11の項目から成る独自の「授業構想シート」というものを活用していた。指導の工夫を考案したり、授業の細案に役立てたりする上で有効であると考えた。

(2) 公開授業

6年生の授業では、「本当の自由とは」を主題に授業が展開された。安心して発言できる雰囲気、自然なつぶやきや話し合いなどから、「道徳科の授業は学級経営の上に成り立つ」ということを改めて感じた。順接的な板書ではなく、構造的な板書がなされており、それが児童の思考を手助けしていた。

(3) 授業研究分科会

内容項目における「責任」の概念が主題化された協議になった。「自由と責任」はセットで指導したいところではあるが、教材によっては難しい場合もあり、しかも45分という限定された箱の中に何を詰め込み、何を捨てるのか、そこにあるのはやはり教師の明確な「ねらい」が重要であることを再認識した。

(4) 課題別分科会

西条市立壬生川小学校の特色である「ローテーション TT 道徳」について多くの関心が寄せられ、参加者の質問を発端に活発な協議が展開された。学級担任の持ち時数が増えるなど、「働き方改革」と一見逆行するように見えるこの「ローテーション TT 道徳」であるが、この取組に対して壬生川小教職員の多くが肯定的な受け止めをしているとの発表があった。

(5) 基調提案

徳島県の取組について「道徳教育を推進するためのカリキュラム・マネジメントの充実」「道徳科と他の教育活動等とを関連させた道徳教育の充実」「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実を図る授業の工夫」「道徳科における現代的な課題に関する指導の工夫」「家庭や地域社会との連携を生かした道徳教育の充実」「道徳科における評価の工夫」の六つの視点から提案があった。

(6) 指導講話

教科調査官の堀田竜次様が国府小学校の授業と関連付けながら話された。学習指導要領の解説書で述べられていることについて、具体例を示しながら説明して下さったことで、我が国の道徳教育の目指すべき方向性について理解が深まった。

(7) 記念講演

絵本作家のくすのきしげのり様の講演であった。作品に託している願いをうかがっていると、私たちが教材を扱う際にどのような気持ちで教材に向き合えばよいかを問われているように感じた。絵本に限らず、教材に込められた願いを私たちはどのように受け取り、授業に生かしていくのか、大切な視点であると感じた。

IV 支部だより

四 国 中 央 支 部

1 研究主題(小・中共通)

生きる力の基盤となる豊かな心を育む道德教育の研究 - 道德の時間を要として -

2 研究のあゆみ

(1) 道德主任会(4月)

- ア 役員選出、研究主題の設定、研究計画の立案
- イ 情報交換

(2) 市内小中学校教科等研究会(6月)

3 研究の内容

(1) 研究授業 6月28日(金) 授業者 川之江北中学校 第3学年 教諭 星川 真衣

- ア 主題名 自分の生活を見つめ直す【A 節度、節制】
- イ 教材名 スマホに夢中!(「新しい道德3」東京書籍)
- ウ ねらい 主人公の行動と自分自身とを重ね合わせながら考え、自分の生活を見つめ直す学習を通して、安全で調和のとれた生活を送ろうとする意欲を高める。
- エ 準備物 教科書、ワークシート、大型提示装置
- オ 展開

	学習活動 【時間・学習形態】	○主な発問 ◎主発問 ・予想される生徒の反応	○指導上の留意点 ◇評価
導入	1 「歩きスマホ」「自転車スマホ」について考える。 【5分・一斉】	○ この二つのグラフから、どんなことが分かるだろう。 ・歩きスマホ、自転車スマホが危険だと思う人が多い。 ・歩きスマホや自転車スマホが危険だと分かっているのにやってしまう人がいる。	○ 「歩きスマホ」や「自転車スマホ」についてのアンケート結果を提示する。
安全で調和のとれた生活のために必要なことは何だろう。			
展開	2 教材を読む。 【5分・一斉】 3 奈美恵の行動や気持ちを考える。 【15分・一斉】	○ ふだんのスマホの使い方や事故の前日、当日の行動に触れる。 ○ 今回、どうしてこのような事故が起こってしまったのだろう。 ・楽しい方を優先したから。 ・危ないと思っていなかったから。 ・スマホに関する母との約束を守る気がなかったから。 ・事故を他人事のように考えていたから。 ○ 事故の後、奈美恵はどのようなことを考えたのだろう。 ・お母さんとの約束をしっかり守ってあげばよかった。 ・もう歩きスマホなど危険なことはしないようにしよう。	○ 事故が起きるまでの奈美恵は、自分の欲望を抑えきれず、自己の身の危険まで考えが及んでいなかったことを確認する。 ○ 奈美恵のスマートフォンに依存しすぎていることが事故につながったこと、グラフの人々と同じ意識であることを押さえる。

	<p>4 安心・安全な生活を送るために大切にすべきことを考える。 【20分・個人→一斉】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・たくさんの人に迷惑を掛けてしまった。 ・自分の身に危険が及ぶようなことはもうしないようにしよう。 ○ 危険だと分かっているのに、やってしまうのはなぜだろう。 ・楽しいと夢中になってしまうから。 ・自分は大丈夫だと思っているから。 ・気持ちに余裕がないから。 ◎ 危ない目にあって後悔する前に、安全で調和のとれた生活を送るために大切にすべきことは何だろう。 ・本気で安全について考える。 ・その行動がこれからの自分にとってプラスかマイナスか判断する。 ・家族や友達と話す。 ・積極的に情報を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 危ない目にあう前にできることについて、具体的に考えることができてきているか。 ○ 多様な考えを引き出すために全員に発表させる。 ○ 自分自身の生活につなげようとする意欲を高める。
終末	<p>5 本時のまとめをする。 【5分・一斉】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 授業の振り返りをしよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教師の説話を行う。

(2) 研究協議

- 導入のアンケートは、生徒の日常に関係があり、登場人物の気持ちにも添うものであった。
- 問い返しの発問があったことで、人間の意志の弱さについてより深く考えることができた。
- 20秒程度の時間配分で話し合い、すぐに発表できているのがよかった。
- 全員発表が今回のねらいにつながったかという点で十分ではなく、出た意見に対して考えを深めることの方がよかった。
- 板書を見ることでどのような意見が出ているのかを振り返ることができたので、発言を書き取る板書がよかった。しかし、ICTを使う方が教師の負担が少ないかもしれない。

(3) 指導助言

- だめだと分かっているのにやってしまう、「なぜ」の部分でもっと意見や考えを出すことができたのではないか。問い返しをすることで、人の弱さが分かる。
- 読み物教材の順を追うのもよいが、「なぜこれがだめなのか」という、揺り返しをするのもいいかもしれない。
- 今回は、道徳的価値を達成できないということが問題となる教材であるため、もう少し早くから自分と向き合う時間をとってもよかった。
- 考えを深め、道徳的価値に近づけるように、発問を吟味し、板書の工夫をすることも大切である。また、発問と板書をリンクさせることも大切である。

4 研究の成果と課題

- 教材分析シートを用いて教材研究を深めることで、教材で生徒に考えさせたい道徳的価値の理解をより深めることができた。生徒の実態を把握した上で、教材で生徒と考えたい、生徒に伝えたいことを明確にし、中心発問や問い返しをしっかりと考えてから授業に臨むことができた。
- 生徒がじっくりと考えられるような発問や問い返しを研究し、更に授業の工夫をしていきたい。また、生徒自身が授業で考えたいことや発問を設定するなど、生徒が主体的に学習を展開できるような課題解決型学習についての研究を深めたい。

新居浜支部

1 研究主題(小・中共通)

よりよく生きるための基盤となる道徳性が育つ道徳教育の研究

－ 学びがいのある道徳科の授業を要として －

2 研究の歩み

(1) 道徳主任会(4月)

ア 役員選出、研究主題の決定、年間研修計画の作成、その他の研修計画

イ 情報交換

3 研究の内容

(1) 研究授業 令和5年11月30日(木)授業者 第6学年 中萩小学校 教諭 稲井 杏里

ア 主題名 人としての生き方を見つめよう【C 公正、公平、社会正義】

イ 教材名 山の粥(「きょうだい」愛媛県同和教育協議会)

ウ ねらい 厳しい差別の中であっても、人としての誇りを失うことなく、苦しむ農民を助けようとした村の人たちの大切にしている思いや生き方について話し合うことを通して、差別を許さず、正しいことを貫こうとする道徳的心情を育てる。

エ 準備物 センテンスカード、挿絵、ワークシート、タブレット端末

オ 展開

学習活動	主な発問と予想される児童の反応	○指導上の工夫 ◎評価
村の人たちの生き方から学び、自分自身の生活を振り返ろう。		
1 前時を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 村の人たちはどんな思いだったのでしょうか。 ・なんで殿様や農民から差別を受けないといけないのか。 ・どうして自分たちばかりこんな目に遭わないといけないのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前時を振り返り、登場人物の関係性や村の人々は農民から不当な差別を受けていたことを確認し、本時の内容へとつなげる。
2 教材を基に話し合う。 ・平介や村の人たちの心の中を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 手紙を持って走る平介はどんなことを考えていたでしょう。 ・差別されているのにどうして助けないといけないのか。 ・差別する農民の村に手紙なんて届けたくないな。 ○ もし自分が村の人だったら山の粥をふるまいますか。 ・いつも差別を受けているので、ふるまいたくない。 ・ふるまいたくない気持ちもあるけど、死にそうな人を放ってはおけないからふるまう。 ・困っているからふるまいたいが、いつも差別を受けているからふるまわない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 差別を受けながらも農村へ手紙を持っていこうとする平介の立場で考えることで、被差別側の心情を捉えることができるようにする。 ○ 自分ごととして捉えるように、村の人の立場になって考えるように促す。 ○ 考えを共有しやすくするため自分の考えを可視化する。その際、心情と行動が分かるようシンキングツールの座標軸を電子黒板で提示し、互いの考えが交流できるようにする。

<p>3 自分の生活を振り返る。</p>	<p>◎ 平介の村の人たちは、こんなにも差別を受けていたのに、どんな思いで山の粥を農民にふるまい続けたのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ふるまわなかったら、農民と同じになる。 ・困っている人を助けることは当たり前。 ・差別されていた側だからこそ、命は大切にしなければならなかった。 <p>○ 今日の授業で学んだことやこれまでの自分自身を振り返り、自分がこれからどんな生き方をしていきたいか考えましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分が正しいと思ったことは勇気を持って言おうと思う。 ・どんな人にも優しく寄り添うことのできる人になりたい。 ・差別は絶対に許さない。だめなことはだめと言える人になりたい。 	<p>○ 多様な意見を出せるように、書く活動やグループ活動を設ける。</p> <p>○ どんな状況でも正しいことを貫く村の人たちの優しさや温かさ、すばらしさに気付くことができるように問い返しをしていく。</p> <p>○ 事前に行ったアンケート結果や授業の振り返りを通して、身の回りにある差別心や思い込み、偏見に気付けるように書く活動の時間を取り入れる。</p> <p>◎ 苦しむ農民を助けようとした村の人々の強い思いや生き方に共感し、これからの生活で正しいことを貫こうとする心情を育むことができたか。</p> <p style="text-align: right;">(ワークシート)</p>
----------------------	---	--

(2) 研究協議

- ふるまう、ふるまわない、ふるまいたい、ふるまいたくない、の座標軸の活用が、子どもたちの素直な気持ち、自分の気持ちを出しやすい方法だった。
- 教師と児童の信頼関係がなかったら、山の粥をふるまうか、ふるまわないか話し合うことはできない。最後の感想に対する担任の返しも、一人一人の個性やふだんの生活の様子を踏まえた返しだった。

(3) 指導助言

- 自分の学級の実態を踏まえ、この授業で何を学ばせたいかという、授業者の思いがとても大切である。授業者の思いをしっかりと伝えられる授業にするために、展開や学習の場を工夫する。そこに先生方の個性が出てくる。
- 座標軸を使うという新しい学習方法にチャレンジしていた。シンキングツールで視覚化を図り、より心の在り方が分かるという工夫だった。研修していろいろな方法を勉強することが大事である。
- 学級の中でお互いが自分の思っていることを話せる学級づくりをしていくことは大事である。そのためには、担任自身が自分をさらけ出して子どもに寄り添っていくことが一番大事である。

4 研究の成果と課題

- 子どもにどこまで事実を伝えていくか。差別は絶対だめなことで、不合理な部分や差別を受けた時の気持ちをどのように伝えたいのか。教師自身が、新しい事実、勉強を続けていくことが大切である。
- 人権学習を通して、自分自身が成長していくのだと捉えることが大事である。自分たちの生活に登場人物の生き方を戻し、自分たちの日常とつなぎ合わせて考えられる授業づくりに取り組んでいきたい。

西条支部

中学校部会

1 研究主題(小・中共通)

よりよく生きるための基盤となる道徳性が育つ道徳教育の研究
 - 学びがいのある道徳科の授業を要として -

2 研究の歩み

(1) 道徳主任会(4月)

- ア 役員選出、研究主題の設定、研究計画の立案
- イ 情報交換

(2) 市内中学校教科等研究会(10月)

3 研究の内容

(1) 研究授業 10月23日(水) 授業者 第2学年 西条市立西条西中学校 教諭 中田 友

- ア 主題名 いじめのない世界へ【A 自主、自律、自由と責任】
- イ 教材名 あの子のランドセル(「新しい道徳2」東京書籍)
- ウ ねらい 過去の自分の行動に心を痛める主人公の気持ちを考えるを通して、自分の「良心」に従って行動することの大切さに気づき、自ら責任を持って行動しようとする道徳的態度を育てる。
- エ 準備物 クロームブック、短冊、大型提示装置、アンケート結果
- オ 展開

学習活動	時間	主な発問と予想される生徒の反応	○指導上の留意点 ●評価
1 「良心」について考える。		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">「良心」とはどのようなものなのだろう。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・正しく行動しようとする心。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 心は目に見えるものではないため、考えることが難しいことに気付かせる。 ○ 良心の定義を明らかにする。
2 教材を読み、考える。 (1) どうして友達の誘いに乗ったのだろう。		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">「私」は、どうして友達の誘いに乗ったのだろう。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・面白そうだったから。 ・深く考えていなかったから。 ・あの子の気持ちが考えられなかったから。 ・遊びの気持ちだったから。 ・あの子を困らせたかったから。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 主人公が軽い気持ちや面白半分でランドセルに傷をつけたことを確認させることで、いじめはこんなことから始まってしまうことに気付かせる。 ○ 自分自身のこれまでの心境や行動の中に、これと似たものがなかったかを振り返らせる。
(2) 「私」が傷つけたものについて考える。 (個人) → (班)		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> ① 「私」が傷つけたものは何だろう。 ② 心が傷ついて、どんなことを思っただろう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ランドセル ・あの子の心 なぜ私が…。学校になんて行きたくない。 ・あの子の家族の心 命を落としたりしないだろうか。 ・私の心 どんなにしても、取り返しがつかない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 多面的・多角的に考えさせるため、小グループで話し合わせる。 ○ 被害者・加害者、双方の心境を考えた上で、いじめは加害者側も不幸にすることを押さえる。 ● 自分の「良心」に従って、責任ある行動をとることができなければ、大変な後悔にさいなま

<p>(3) 「私」はどうすれば良かったのかを、自分と重ね合わせて考える。</p> <p>3 自分を振り返る。</p> <p>4 教師の思いを語る。</p>		<p>・私の家族の心親としていたたまれない。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">どの場面ですれば良かったのだろう。</div> <p>・誘われた場面で注意をしてやめさせる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">今日の授業を通して考えたことを書こう。</div> <p>・いじめはいけないことだ。いじめをされた方は、もちろん悲しくなりひどく傷ついてしまうけど、してしまった方の心も深く傷つく。「良心」という言葉が出てきた。善悪の判断をくだし、悪をおさえる心という意味の言葉だった。これから自分の良心にしっかり従って、善悪の区別をしながら生活していきたい。</p>	<p>れることを自覚し、それは自分の大切な人にも及ぶことに気付くことができたか。 <学習支援ソフト></p> <p>○ 自分の軽率な行為の結果、相手だけでなく、自分自身も長い間苦しむことになってしまうことに気付き、どの場面で、どうすれば良かったのかを考えさせる。</p> <p>○ 自分のこれまでの行動を振り返りながら、「良心」に従って行動することの大切さを自覚し、自ら責任を持って行動するためにどうあるべきかを考える。</p> <p>● 友達の考えに触れ、自己の経験と照らし合わせて、更に深く考えることができたか。 <学習支援ソフト></p>
--	--	---	--

(2) 研究協議

- 生徒に聞き取りやすい声で朗読したり、学習規律が整っていたりと、生徒が内容を理解して話合いに参加しやすい環境であった。
- ねらいにせまる授業展開がよく練られており、特に発問に工夫が見られた。
- 学習支援ソフトを使用することで、級友の意見から新たな発見が得られ、意見が深まる「学び合い」につながっていた。
- 個別課題とグループ課題の使い分けが巧みであり、生徒の思考が深まるように工夫されていた。

(3) 指導助言

- 道徳で用いられる教材は、一つの教材の中に様々な道徳的価値が含まれている場合が多く、授業の始めにねらいとする道徳的価値を押さえておくことは、生徒の思考を深めるために重要である。しかし、一つの意見に偏ると、思考の深まりは生まれにくい。多様な意見を比較することが必要であり、時には教員が提示することも必要となるのではないか。
- ICTを活用することで、人前で発言しにくい生徒の意見を引き出したり、各自の意見を生徒同士で確認したりするなど、多様な考えに触れる機会が得られていた。しかし、全ての活動でICTを活用しようとする、生徒は機器の操作に意識を奪われ、考えを深めたり十分な意見交換を行ったりできない恐れがある。授業展開に応じて、デジタルとアナログの使い分けが必要である。
- 道徳教育は人間性、人格の形成に大きく寄与するものである。生徒はもちろんであるが、教師も教材研究や授業を通して、成長しようとする姿勢で道徳教育に取り組んでほしい。

4 研究の成果と課題

今回の道徳授業では、生徒たちが積極的に意見を共有し、思考を深める姿が見られたことが成果として考えられる。特に、学習支援ソフトを活用した意見の可視化や、個別・グループ課題の適切な使い分けにより「学び合い」が促進された。また、発問をよく練り、生徒が自身の体験を振り返るきっかけにつながったのではないかと思う。一方で、感想の共有に時間を割けなかったことや、「無責任」などのキーワードが唐突に出た点、タブレット中心の活動に偏った点が課題である。紙を使った活動や口頭発表を取り入れることで、考えを更に深める機会を提供する必要があると考える。

今 治 ・ 越 智 支 部

- 1 研究主題 考え、議論するための授業構成の研究
 - ICTを活用した、多面的・多角的な意見を伝え合う場の工夫 -

2 研究のあゆみ

(1) 道徳主任会(8月)

- ア 講義(模擬授業・研究協議・講義) 講師 今治市立西中学校教諭 益田 哲郎先生
 イ 質疑応答

(2) 道徳教育授業研修会(10月)

3 研究の内容

(1) 研究授業 10月10日(木) 授業者 第3学年 今治市立九和小学校 教諭 曾我部 芳昭

- ア 主題名 友達のよさ【B 友情、信頼】
 イ 教材名 たまちゃん、大好き(「新しいどうとく3」東京書籍)
 ウ ねらい 友達と互いに理解し、信頼し、助け合おうとする道徳的心情を養う。
 エ 準備物 挿絵、センテンスカード、ワークシート、役割演技グッズ、電子黒板、タブレット端末
 オ 展開

学習活動	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点(○)と評価(◇)
1 友達と仲良くできた経験を発表する。 2 教材を読んで話し合う。	○ 友達がいてくれてよかったなと思ったのはどんな時ですか。 ・一緒に遊んで楽しかった時。 ・助けてくれた時。 ・相談にのってくれた時。	○ 経験を発表し、ねらいとする価値への方向付けをする。
友だちともっとなかよくするためのひみつを考えよう。		
(1) 約束をしたときのまる子の気持ちを考える。	○ たまちゃんと約束した時、まる子はどんな気持ちでしょう。 ・楽しみだな。たまちゃんは何を書いたのかな。 ○ いつまでたってもたまちゃんが来なかった時、まる子はどんな気持ちだったでしょう。 ・来ないなんてひどい。 ・タイムカプセルなんか捨ててやる。 ○ たまちゃんが謝っているのに、まる子が許してあげなかったのはどうしてでしょう。 ・留守番なんて鍵をかければいい。 ・約束を破るのは悪い。	○ 電子黒板に挿絵を提示し、場面の状況や登場人物の気持ちを押さえる。 ○ 約束を守ってくれなかった友達への怒りがつのるまる子の気持ちに共感させる。 ○ たまちゃんの気持ちを考えることのできないまる子の気持ちを押さえる。
(2) はっとした時のまる子の気持ちの変化を考える。	◎ はっとしたまる子は、どんなことを考えたのでしょうか。 ・たまちゃんも留守番をしていたから来ることができなかったんだな。 ・ひどいことを言ってしまったな。 ・たまちゃんの気持ちを考えてなかった。 ・私も謝って仲直りしたい。 ・タイムカプセルを探そう。 ・許してもらえるかな。	○ たまちゃんの事情に気付いたまる子の思いを考えさせるためにワークシートに書かせる。 ○ 多様な意見に触れることで、まる子がたまちゃんの気持ちを理解し、相手のことを思いやることができ始めたことに気付かせる。 ◇ たまちゃんの立場に立って、まる子の気持ちを考えようとしている。(観察、発表、ワークシート)

<p>(3) 涙が止まらないままの子の気持ちを考える。</p>	<p>○ 「ごめんね。」と言い合いながら涙がとまらないままの子は、どんな気持ちだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・許してあげられなくてごめんね ・タイプカプセルを捨ててごめんね。 ・仲直りできてよかった。 ・これからはたまちゃんの気持ちをもっと考えるね。 ・気持ちを伝え合えてよかった。 	<p>○ 役割演技を通して、相手を思いやり友情を深める二人の気持ちに共感させる。</p>
<p>3 自分の生活を振り返る。</p>	<p>○ 今日の学習で思ったことや考えたことを書きましよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達の気持ちをよく考えずに嫌なことをしてしまったことがあった。 ・けんかの後、話を聞いたら友達の気持ちが分かって仲直りをする事ができた。 	<p>○ まる子やたまちゃんと似た経験はないか振り返らせた上で、思ったことや考えたことをワークシートに書かせる。</p> <p>○ 友達の立場や気持ちを考えることが、友達と仲良く過ごす秘密の一つであることに気付かせる。</p>
<p>4 教師の説話を聞く。</p>		<p>○ 教師の説話を通して、価値への自覚を深める。</p>

(2) 研究協議

- 児童が自分の生活と照らし合わせながら考えられており、適切な教材、ねらいであった
- 児童のタブレット端末の活用力がすばらしく、ICT機器が効果的に活用された授業であった。記録に残るので、振り返りができるし、友達同士で意見を共有できる良さもあった。
- 中心発問や振り返りの場面では、協働学習支援ソフトにまとめたことを基に、児童が発表し合う場面を設けることで、より多面的、多角的に考えを深めることができる。

(3) 指導助言

- 「○○の立場に立って」の怖さを知っておかなければいけない。相手の立場に立って考えることが難しい場面もある。「『○○』と言ったまる子をどう思う。」というような問い掛けをすることで、自分をこちら側に置いて考えること、客観視して考えることができる。
- 道徳の授業とは、教師が問いを重ねることで、児童に自分の心の中の良質さを見いだせることである。(自分の心の中にもちゃんと優しさがある。自分も捨てたもんじゃない。)
- 今まで「支持的風土のある学級」という言葉がよく使われてきたが、今こそ、内ではなく外へ目を向け、「互いに関心を寄せ合う学級」を目指したい。教師自身も、子どもの世界に関心・好奇心を持って接することが大切である。
- タブレット端末のフォントの文字と児童の手書きの文字のどちらにも良さがある。中心発問や振り返りの場面においては、自分の手で書き、自分の声で伝える方がより気持ちが深まるのではないか。

4 研究の成果と課題

- ふだんから仲が良く、トラブルもあまりない学級であるが、自分の思いを自由に出し合うことはまだ十分できない。こうした児童の実態に即して、ねらいを設定したり、実施したアンケートを基に、生活を振り返ったりすることで生活の具体的な場面の気持ちや行動について一人一人が考えることができた。また、授業の中に、自由に発言する場、役割演技、タブレット端末による共有など、多様な形の活動を取り入れることで、自分の思いを自由に語り合い、友達の考えを聞きながら多様な考えに触れることができていた。
- 授業の中でICT機器を効果的に活用することが研究テーマの一つである。ICT機器の様々な活用方法を研究してきたが、ワークシートに書かせる活動も、思いが深まり、自分の心をじっくりと見つめることができるという良さがある。どの場面でどう活用することが効果的であるかを考えながら、授業の中に工夫して取り入れていくことが大切である。

松山支部

小学校部会

1 研究主題

よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う道徳教育の研究

- (1) 道徳教育の確かなマネジメントの推進と充実
- (2) 主体的・対話的で深い学びを実現する道徳科の充実

2 研究のあゆみ

- (1) 第1回道徳主任会(4月19日)

役員選出、努力目標の確認、主任会運営と行事計画について

- (2) 第2回道徳主任会 第2回道徳主任会(7月23日)

講師による講話(日本道徳教育学会四国支部 副支部長 坂井 親治 先生)

- (3) 第27回愛教研小・中学校道徳研究大会への参加(8月9日)

- (4) 第3回道徳主任会(2月10日)

研究会報告、教科訪問報告、本年度主任会運営の反省、次年度努力目標の審議

3 研究の内容

- (1) 授業実践 松山市立生石小学校 第1学年 西原 弥由 教諭

ア 主題名 親切な心で【B 親切、思いやり】

イ 教材名 はしのうえのおおかみ(「あたらしいどうとく」東京書籍)

ウ ねらい おおかみの気持ちの変容を通して、親切は自他ともに気持ちがよくなることに気付き、身近な人に対して思いやりの心を持って接しようとする道徳的態度を育てる。

エ 展開

学習活動	主な発問(◎中心発問) 予想される児童の反応	○指導上の留意点 ◇評価
1 親切にもらった経験について考える。	○ 親切にされたことはありますか。 ・片付けを手伝ってくれて、うれしかった。 ・けがをしたら心配してくれた。 ・一緒に遊んでくれた。	○ 生活の中で親切にされたことについて考えることで、本時の学習で考えさせる価値への焦点化を図る。
2 教材を読んで話し合う。	○ 「もどれ、もどれ」と言っているおおかみは、どんな気持ちでしょう。 ・面白いな。 ・強くなったみたいでいい気分だ。 ○ おおかみは、どんな気持ちでくまの後ろ姿を見送っているのだろう。 ・くまさんは優しいな。 ・自分よりも大きいのに通してくれた。 ・みんなに悪いことしたな。 ◎ どうしておおかみは、うさぎにしんせつにしたのだろう。 ・くまさんに親切にされてうれしかったから。 ・くまさんみたいに優しくなりたいから。 ・うさぎさんに喜んでもらいたかったから。 ○ はじめとあとのいい気持ちは、同じ気持ちだろうか。 ・あとの気持ちの方が、いいと思う。 ・あの方が、くまさんもうさぎさんもいい気持ち。	○ くまに親切にされた時の気持ちを深めさせるために、自分より小さい動物に意地悪をして楽しむ時のおおかみの気持ちを考えさせる。 ○ 教師がくま役、児童がおおかみ役で役割演技を行うことで、場面の状況を理解させる。また、くまに親切にされた時のおおかみの心情の変化に気付かせる。 ○ おおかみがうさぎに親切にした理由を考えることで、親切にすることは、自他の喜びにつながることに気付かせる。 ○ 意地悪をしていた時の気持ちと、親切にしたあとの気持ちを比較することで、いい気持ちの価値の違いに気付かせる。 ◇ 親切にすることのよさについて考えている(発言、ワークシート)。 ○ これからどんな場面でもどんなことをしたいか具体的に考えさせることで、実践への意欲付けをする。
3 本時の学習を振り返り、これからの自分について考える。	○ これからは、どんな時にどんなことをしたいですか。 ・友達が困っていたら声を掛けて助ける。 ・一人である友達と一緒に遊ぶ。 ・友達がけがをしたら、一緒に保健室に行く。	

オ 研究協議

おおかみのいい気持ちの比較の際に、うさぎの気持ちにも目を向けさせたのがよかった。役割演技が単なる動作化にならないよう、教師の切り返しを精選したり、演技後に児童に思いをインタビューしたりするなど、思いを交流し考える時間が大切である。ゴールへの近道を求めず、みんなで考え、話し合いが高まった末に、みんなの意見が見えたという実感をもたせるとよい。

中学校部会

1 研究主題

よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う道徳教育の研究

- (1) 計画的、発展的で特色ある道徳教育の推進
- (2) 要となる道徳科の充実

2 研究のあゆみ

- (1) 第1回道徳主任会(5月2日)
役員の選出、本年度の努力目標の確認及び研修計画の立案
- (2) 第2回道徳主任会(7月23日)
講師による道徳教育についての講話
- (3) 第27回愛教研小・中学校道徳研究大会への参加(8月9日)
- (4) 第3回道徳主任会(1月31日)

研究会報告、冊子を用いた道徳教育の研修、本年度主任会運営の反省、次年度努力目標の審議

3 研究の内容

今年度、松山市立内宮中学校で第53回放送教育四国大会愛媛大会が行われ、「NHK for school」を用いた道徳科の授業が実践された。以下、その授業実践の取組をまとめた。

- (1) 教材名 みんなの自由な公園(「ココロ部!」NHK for School)
- (2) 主題名 自由な行動に責任を持つこと【A 自主、自律、自由と責任】
- (3) ねらい きまりについて考えることを通して、自由な意思や判断に基づいた行動には責任が求められることを理解し、自らを律し、自分や社会に対して誠実に行動しようとする態度を育てる。
- (4) 教材について

NHK for School「ココロ部!」という道徳教育情報番組の映像教材である。主人公が「自由公園」の管理人となり、全員が楽しく過ごすことのできる公園にするためのルールを考えるという内容である。公園の利用者が好き勝手過ごすことで、互いに不満を持つようになってしまい、管理人がルールを作るとますます不満が出てしまう。相手や集団、社会のことを考慮した上で責任感のある自律した行動をすることが生きる上で大切であると考えられる教材である。

(5) 成果と課題

- 今回扱った NHK for School の教材は小学校高学年から中学生を対象としており、非常に分かりやすい。生徒の主体的・対話的で深い学びを引き出す上でも有効であったと考えられる。
- 生徒の発言に対する問い返しの発問で授業を組み立てたことにより、道徳的価値についてより考えを深めることができた。
- 生徒が積極的に授業に参加しており、放送教育の研究実践としては良かったが、【A 自主、自律、自由と責任】を扱った道徳の授業としては、「責任」の部分に対する深まりがあまり見られなかった。
- 「他人の思いやりに甘えて自分勝手する人が出てくるのでは。」といった一見授業展開に逆らうような問い返しをすることで、生徒の思考を揺さぶり、自己の欲と良心との間で葛藤させることができるとなお良かった。

学習活動 【時間・形態】	主たる発問と予想される生徒の反応	○ 指導上の留意点 ◇ 評価の視点
1 自由についてのイメージを確認する。 【5分・一斉】	○ 「自由公園」とは、どのような公園なのだろう。想像してみよう。 ・みんなが自由に使える公園 ・何をしても許される公園 ・みんなが楽しく過ごせる公園	○ 学習課題に対する関心を持たせる。「自分勝手」「みんなが楽しく」という二つの考え方を引き出したい。
	学習課題 「自由」について考えよう。	○ 資料名と絡めながら学習課題を提示する。
2 映像資料を視聴し、管理人の視点から公園の利用について考える。 【15分・個人→ペア→一斉】	(クリップ①本編1分10秒～4分50秒を視聴する。) ○ 児島さんは、利用者から寄せられた苦情を認んでどのようなことを考えたのだろう。 ・そんなこと言われても…。 ・ルールを作って管理しよう。 (クリップ②本編6分23秒～8分47秒を視聴する。) ○ 児島さんは、利用者からさらに詰め寄られて、どのようなことを考えたのだろう。 ・みんな、わがままだ。 ・地域住民がきちんとすれば解決するの。	○ 主人公の児島さんの心情に寄り添って考えさせる。 ○ ルールを設定するのにうまくいかず葛藤する児島さんの気持ちに共感させる。
3 利用者の発言を踏まえ、自由について考えを深める。 【20分・個人→小集団→全体】	○ 「このどこが自由公園なんですか!」と言った利用者が考える「自由」とは、どのようなものだろうか? ・好き勝手すること。 ・ルールに縛られないこと。 ・自分のことだけ考えること。	○ 好き勝手行動することによって、自由が奪われてしまったことに気付かせる。 ○ 自分の自由だけでなく相手の自由も考えるべきであることを理解させる。
	◎ 「自由に行動する」とは、どのように行動することなのだろうか。 ・自分で善悪を判断すること。 ・責任を持って行動すること。 ・相手や集団、社会のことを考えて行動すること。	○ 公園だけではなく、学校での過ごし方、社会での過ごし方についても通ずる部分があることに気付かせる。
4 振り返りを行う。 【10分・個人→一斉】	○ 今日の授業を通して感じたことや考えたことについて書こう。	◇ 自由な意思や判断に基づいた行動には責任が求められることを理解し、誠実に行動しようとする態度が見られたか。

東 温 支 部

1 研究主題

よりよく生きるための基盤となる道德性が育つ道德教育の研究

－ 学びがいのある道德科の授業を要として －

2 研究のあゆみ

(1) 東温市春の教育研究集会(4月19日)

役員選出、研究主題の決定、研究計画の立案

(2) 東温市道德委員会夏季研修会(8月9日)

第27回愛教研小・中学校道德教育研究大会に参加

(3) 東温市道德委員会研修会(10月29日)

「愛媛県特色ある道德教育推進事業」推進校発表会(東温市立重信中学校)に参加

3 研究の内容

ここでは、「愛媛県特色ある道德教育推進事業」推進校発表会における公開授業(東温市立重信中学校第2学年)を紹介する。

(1) 授業実践

ア 主題名 いのちを考える【D 生命の尊さ】

イ 教材名 奇跡の一週間(「新しい道德2」東京書籍)

ウ ねらい 北村さんの生き方や、北村さんと接する作者の心情の変化を通して、限りある生命を輝かせて生きていくことの尊さを理解し、生命を大切にすることは、どういう生き方なのかについて考え、自他の生命を尊重する道德的実践意欲と態度を身に付けさせる。

エ 展開

学習活動 【時間・形態】	主たる発問と予想される生徒の反応	○指導上の留意点 ◇評価の視点
1 事前アンケートの結果について知る。 【3分・一斉】	○ なぜ命は大切なのか。 ・一つしかないから。 ・親からもらった命だから。	○ 命は大切だと分かっているが、その有限性やかけがえのなさについては、日頃深くは意識していないことを押さえ、問題意識をもたせる。
2 教材について考える。 (1) 北村さんと出会う前の「私」の気持ちを考える。 【3分・一斉】	○ 北村さんに会うまで、「私」はどのような気持ちで患者さんと接していただろう。 ・少しでも患者さんの苦しみを減らしてあげたい。 ・安らかな気持ちで死を迎えてほしい。	○ 教材は事前に読んでおく。 ○ 「私」がホスピスの患者を同情の気持ちで見ていることに気付かせる。
(2) 「私」の心情の変化について考える。 【15分・個人 →全体】	○ 「私」が北村さんに「真剣になって」注文をつけることにしたのは、なぜだろう。 ・北村さんの思いに真剣に答えたいと思ったから。 ・最期まで精いっぱい生きようとしている北村さんの手助けを、少しでもしたいと思ったから。	○ 北村さんの姿を通して、命の尊厳について深く考える「私」の気持ちに共感させる。 ○ 北村さんと真剣に向き合った「私」の気持ちを考えさせることで、限りある命を輝かせて生きていくことの尊さに気付かせる。

<p>3 命を大切にすることはどういうことなのかを考える。 【22分・個人 →小集団→全体】</p>	<p>◎ 限りある命を大切にすることはどうか。 ・自分のやるべきことを見つけてそれを精いっぱいする。 ・悔いの残らない人生を送ろうとする。</p>	<p>○ 命を大切にすることはどうか、自分事としてじっくりと考えさせる。 ○ タブレット端末を用いて問いを投げ掛け、全員が話し合いに参加できるようにする。 ○ 一人一人の意見を可視化し、対話の活性化を図る。</p>
<p>4 自分を振り返る。 【7分・個人 →全体】</p>	<p>○ 今日の学習を通して、今後どう生きていきたいか、考えたことや感じたことを書こう。 ・いじめをせず、周りの人と協力する。 ・他人の人権を傷つける行為は、他人の命を大切にしないことなので、悪口を言わない。</p>	<p>◇ 本時の学習を通して、自他の生命を尊重することについて、自分の生活と結びつけて考えているか。 (ワークシート)</p>

(2) 研究協議と指導助言

- 導入でアンケート結果を出すことで、自分事として捉える機会をつくることができていた。
- ICT の活用では、協働学習支援ソフトで個々の考えを共有させることで生徒から多様な意見を引き出すことができた。また、他の生徒の意見を基に話し合いを充実させていく様子があり発表もしやすくなっていた。
- 教師が生徒と一緒に考えていこうという姿勢があり、テーマについて真剣に考えていた。授業を通して、生徒同士の関係性が更に良くなっていった。
- 問い返しの発問により、生徒の本音を引き出すために教師と生徒、生徒同士の対話の時間をもっと増やしても良かった。

教材名(出典)	奇跡の一週間(東京書籍「新訂 新しい道徳2年」)	
主題・内容項目	D(19)生命の尊さ	
教材を読む 1(骨子をつかむ)	①生き方を自覚(変化)したのは誰か(主人公)	「私」
	②生き方を自覚(変化)することになった出来事(助言)は何か	末期癌で死を迎えようとしている北村さんが、懸命に絵をかいていたこと。
	③生き方を自覚(変化)するのはどこか	私が出会ったホスピスの患者さんたちは、「死んでしまった人」ではなく、「生きていた人」「もうじき死ぬ人」ではなく、だれよりも一生懸命「生きている人」。
<構図>	《出来事》	
2		
ねらい	(A) 北村さんの、限りある生命を輝かせている生き方や、北村さんと接する「私」の心情の変化を通して	
3	(B) 生命の尊さについて、その有限性を理解し、かけがえない生命を尊重し	ようとする
	(C) 道徳的態度	を育てる。
※書き方	(A):教材の活用を簡潔にする。(主人公が道徳的に変化する場合は、「出来事(助言)」の部分抜き出して表記する。)	
	(B):内容項目から適切に抜き出す。	
	(C):道徳性の要素(道徳的判断力、道徳的心情、道徳的实践意欲と態度)を入れる。	
4	本時で考える道徳的価値(上記3の(B)の理解)	限りある生命を輝かせて生きる態度や、自他の生命を尊重する態度が大切であるということ。

資料1 教材分析シート

4 研究の成果と今後の課題

- 今年度も昨年度と同様、東温市道徳委員会夏季研修会を愛教研小・中学校道徳教育研究大会と兼ねた。各校道徳主任以外の教員も参加し、各分科会や特別講演での学びを2学期からの道徳科の授業実践につなげることができた。
- 東温市内の中学校で発表会が行われたことで、小・中のつながりを意識した道徳教育について学びを充実させたり、情報共有を図ったりすることができた。今後も小・中連携を意識した研究を進められるよう計画していきたい。

伊予支部

1 研究主題

よりよく生きるための基盤となる道徳性が育つ道徳教育の研究

－ 学びがいのある道徳科の授業を要として －

2 研究のあゆみ

(1) 道徳科主任研修会(4月)

ア 役員選出、研究主題の設定、研究計画の立案

イ 情報交換

(2) 伊予地区教科等主任研究会(11月)

3 研究の内容

(1) 研究授業 11月20日(水) 授業者 第3学年 伊予市立南山崎小学校 教諭 宮岡 華

ア 主題名 みんなが楽しく【C 公正、公平、社会正義】

イ 教材名 ぼくのボールだ(「小学どうとく3」日本文教出版)

ウ ねらい 間違っていたのかと思い始めてきたぼくの気持ちについて考えることを通して、一人一人の思いや願いをみんなで大切にしなければならないことに気づき、誰に対しても公平に接しようとする。

エ 準備物 道徳ノート、掲示物

オ 展開

学習活動	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点 ☆評価
1 本時のめあてを確認する。	○ 学級遊びで楽しかったことや困ったことはありますか。 ・みんなで仲よく遊べて楽しかった。 ・けんかをしたことがあった。	○ みんなで楽しく過ごすためには、どんなことが大切なのかを考える意識を持たせる。
みんなで楽しく過ごすために、どんなことを大切にするといいだろう。		
2 教材「ぼくのボールだ」を読んで話し合う。	○ ぼくが「サンキュー」と言って、たかし君からボールを取り、まさと君にパスをしたとき、ぼくとたかし君はどんなことを考えているでしょう。 <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; padding: 5px;"> ぼく ・やったあ。 ・勝ちたい。 ・みんなまさと君に回しているから。 ・はやくまさとくんに戻さないと。 ・まさと君に投げないと負けてしまう。 </div> <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; padding: 5px;"> たかし君 ・どうして。 ・ぼくが投げたいのに。 ・取られて悲しい。 ・ボールを返してよ。 ・勝手に取るなんて、腹が立つな。 </div> </div>	○ パネルシアターを使って、状況を分かりやすく整理しながら物語を確認する。 ○ 役割演技を通して、たかし君がボールを投げたい気持ちに気付かず、まさと君にボールを回すことが当たり前だと思っているぼくの気持ちに気付かせる。
	◎ ぼくは、どんなところが間違っていたのかなと思い始めているのですか。	○ 様々な意見を引き出したり、自分の考えを持ち

<p>3 学習のまとめをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・たかし君のボールを取ったこと。 ・たかし君を泣かしたこと。 ・たかし君の気持ちを考えていなかったこと。 ・たかし君は投げないと決め付けていたこと。 <p>○ みんなが楽しく過ごすために大切にしたらいいことは、どんなことでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなが楽しめるように考える。 ・みんなで楽しめるルールを決めるといい。 ・自分勝手にならないように気を付ける。 ・相手の気持ちも大切にする。 ・相手の思いを決め付けないようにしたい。 	<p>やすくしたりするために、グループで意見交流させてから全体で話し合う。</p> <p>☆ みんなで楽しく過ごすために大切なことについて、自分の考えをまとめている。[ノート、発言]</p>
---------------------	--	---

(2) 研究協議

- パネルシアターを活用して、状況を分かりやすく整理しながら物語を確認したのは、効果的だった。導入に、もう少し児童の日常生活からの話題を取り入れ、行為の中にある心を話し合うとよかった。
- 一人一人が考えをよく書けていた。教師が一人一人に寄り添って、しっかり考えさせようとしていた。しかし、グループでの意見交流で、それを全てホワイトボードに書いていたので、まとめて書けるようになるか、意見交流のみにして全体での話合いに生かせればよかった。
- 教材分析シートだけでなく、中心発問への問い返し表を作って授業に臨んでいたのはよかったが、時間配分の問題で十分に生かせなかったので、話合いの学習訓練を行うなどをして、全体協議に時間を割けるようにしたい。
- 人数の少ない学級と、35人近くいる学級とでは、効果的な話合いの形態も変わってくる。学級の人数に応じて、話合いの形態を工夫するとよい。
- 協働学習支援ソフト等を活用し、個人の考えを全体で話し合ってもよかった。

(3) 指導助言

- 道徳科の時間は、言葉を介して行われる。自分や人間のよさを語り合うのが道徳科の時間である。登場人物に共感したり、立場について考えたりしながら、よさに気づき、よさを語り合う自我関与型の道徳科の授業を行う。
- よいと分かっていることをなぜ道徳科で学習するのか。それは、新しい視点を獲得するためである。児童は未熟ながらも、その子なりの理解を持っていて、いろいろな見方や考え方があがる。児童が持っている理解を広げ、深めていくのが、道徳科である。児童の「分かっている」を超えられるように教材分析を行い、授業を構成する。話合いが広がってもよい。問い返しによって、ねらいへと絞っていく。問い返しを発言者だけでなく全体へ行うのも効果的である。
- どんな発言も受容する姿勢をもち、ニュートラルな態度で返していくとよい。

(4) 研究の成果と課題

- パネルシアターで分かりやすく物語を確認したり、役割演技で人物の気持ちを考えたりするなどの手立てを取り、児童が自分の生活に引き寄せて理解することが重要であることが分かった。
- 道徳科で何を考えさせたいのか、教師自身が言語化し、問い返しを行いながら、教師も児童も一緒に考えていくことが大切である。これからも、学習訓練を重ね、話合い活動の充実を図ったり、しっかりと教材分析によって問い返し表を作成したりして、よさに気づき、よさを語り合う道徳科の授業をつくっていききたい。

上浮穴支部

1 研究主題

よりよく生きるための基盤となる道徳性が育つ道徳教育の研究
 - 学びがいのある道徳科の授業を要として -

2 研究のあゆみ

- (1) 上浮穴郡久万高原町研修活動協議会(4月19日)
 役員を選出、研究主題の設定、研究計画の立案
- (2) 上浮穴郡教育研究大会(11月28日)
- (3) 郡内各小中学校の校内授業研究(道徳科)への参加・交流

3 研究の内容

(1) 授業実践

ア 主 題 ともだちとなかよくするよこび【B 友情、信頼】

イ 教材名 二わのことり

ウ ねらい みそさざいややまがらの気持ちを考え、話し合うを通して、友達のことを思って大切に
 することの喜びに気づき、友達と仲よくしようとする道徳的心情を育てる。

エ 準備物 場面絵、ペープサート、ワークシート、名札カード

オ 展 開

学習活動	教師の発問(○)と児童の意識の流れ(・)	○指導上の留意点 ◎評価
1 友達について話し合う。	○ 友達がいてよかったと思うことを話そう。 ・一緒に遊んだら楽しい。 ・困っていたら助けてくれた。 ・一人で遊んでいたら声を掛けてくれた。	○ 事前アンケートを基に考えを出し合い、本時の学習の方向付けを行う。
2 めあてを確認する。	ともだちについてかんがえよう。	
3 「二わのことり」を聞いて話し合う。	○ 迷っているときのみそさざいの気持ちはどうかな。 ・うぐいすさんの家は明るくていいな。 ・みんながうぐいすさんの方へ行くならそっちへ行こう。 ・やまがらさんの方へ行きたいけれど遠いな。 ・誕生日は今日だからやまがらさんの方へ行こうかな。	○ アニメーションやペープサートを使って教材を提示することで、場面や状況を想像しやすくさせる。 ○ 友達の気持ちよりも周りに合わせてしまった弱さをみそさざいの迷いから考えさせる。
【個→ペア→全体】	○ うぐいすの家で歌っているときのみそさざいのこにこ度はいくつかな。 ・歌を歌って楽しいけれど、やまがらさんのことが気になる。 ・やまがらさんに悪いことしたな。 ・やまがらさん、ごめんね。今から行こうかな。	○ 自分の考えを明確にするために、ワークシートにみそさざいの気持ちを書かせる。 ○ 名札カードを使ってにこにこ度を全体で共有することで、多様な考えに触れさせる。

<p>【役割演技】</p> <p>4 本時の学習を振り返る。</p> <p>5 教師の話聞く。</p>	<p>◎ やまがらの涙を見て、みそさざいはどんな気持ちだったのかな。</p> <p>・もっと早く来ればよかった。</p> <p>・やまがらさんが喜んでくれてよかった。</p> <p>・お互いにいい気持ちになったね。</p> <p>○ 友達のことを考えて行動したとき、どんな気持ちになったかな。</p> <p>・友達が「遊びに入れて。」と行った時に「いいよ。」と言って一緒に遊んで、楽しかったよ。</p> <p>・友達が喜ぶと、自分もいい気持ちになったよ。</p> <p>○ 友達のことを思って接することができた児童のエピソードを話す。</p>	<p>○ やまがらに悪いことをしたと思っているみそさざいの気持ちを捉えさせる。</p> <p>○ 役割演技をし、みそさざいとやまがらの両者の気持ちについて考えさせることで、二人とも温かい気持ちになったことを感得させる。</p> <p>◎ 友達の気持ちを考えて、友達と仲よくしようとする意欲を高めているか。(発言)</p> <p>○ 友達と仲よくしたい、友達を大切にしたいという思いを深めやすくする。</p>
---	---	---

(2) 研究協議

- 児童が主人公の気持ちに寄り添って考えることができるように役割演技を取り入れたことが効果的であった。役割演技を児童同士でできるのが理想ではあるが、さらに深めるために、児童と教師で行ってみるパターンもある。また、教師がインタビュアーになって引き出すという方法もある。教師の強調したい所をピックアップでき、児童同士の役割演技時に、ここという場面で深めることができる。
- 児童が自分の考えをうまく言葉にできにくかったり、表現することに自信を持てなかったりすることへの手立てとして、名前カードを活用して、全員の考えを視覚的に捉えることができるように工夫していた。みそさざいの心情を、「にこにこ度」として数値化して、全員の名前カードで黒板に表し、その根拠を出し合う中で、同じ数値でも違う意見があったり、少しの数値の違いから多様な考えを引き出すことができたりしていた。

4 指導助言

- 役割演技では、全員をペアに分けて取り組ませる方法もある。その後、ペアごとに発表させたり、役割を交代させて演じさせたりしてもよかった。役割演技後の教師の問いかけがよかった。見ていた児童から、発表した児童に質問させるという方法もある。
- 名前カードを活用して、全員の「にこにこ度」を板書に明示することが、児童の意見を引き出す根拠になり、多様な考えを引き出すのに効果的であった。最初に考えた数値から変更させて、その理由を発表させても面白い。

5 研究の成果と課題

- 役割演技の取り上げ方を郡内の小中学校教員が参加し協議することによって、その内容が自校にとどまらず広く情報共有することができた。そのことが道徳科の授業力向上につながったと考える。
- 極小規模校が大半を占める本支部では、各校で校内授業研究を行う際に、郡内全ての小中学校に参加案内を送り、相互に授業研究の交流を行っている。他校の道徳科授業実践を参観し、研究協議を通して意見交換を行う機会は貴重であり、今後もこの機会を有効に活用して道徳科の授業力の向上に取り組んでいきたい。

大洲支部

1 研究主題(小・中共通)

よりよく生きるための基盤となる道徳性が育つ道徳教育の研究

－ 学びがいのある道徳科の授業を要として －

2 研究のあゆみ(令和4年度より、心の教育専門委員会としても活動)

- (1) 第1回道徳班会(4月24日)
- (2) 第2回道徳班会(5月13日)
- (3) 第3回道徳班会 <部会別で実施>(7・8月)
- (4) 第4回道徳班会 <部長会>(10月21日)

3 研究の内容

(1) 授業実践 9月30日(月)授業者 第1学年 大洲東中学校 教諭 露口 知子

ア 主題名 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度【C 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度】

イ 教材名 ぼくのふるさと(「新しい道徳1」東京書籍)

ウ ねらい ふるさとを愛し、ふるさとのためにできることをしたいと願う作者の気持ちに触れることで、
自分が生まれ育ったふるさとのためにできることを考えようとする道徳的実践意欲を高める。

エ おおずの授業スタンダードの視点と手立て

㊦きだそう学習意欲 ㊧つくり考える時間の確保 ㊨んがえを交流させる活動 ㊩かったことをまとめる時間

㊦ 自分のふるさとに対する思いやこれからの生き方について考える。

オ 準備物 教科書、ワークシート、タブレット端末、テレビ、掲示物

カ 展開

学習活動	時間	○主な発問・予想される生徒の反応	指導上の留意点 ★評価の観点
㊦ 1 自分の「ふるさと」について考える。	3	○ あなたは自分の「ふるさと」が好きですか。 ・自然が豊か。 ・地域の人が優しい。 ・店がないのが不便。	(事前アンケート) 隣同士で交流させ、生徒が意見を言いやすい雰囲気づくりをする。
㊧ 2 串原村について知る。	4	○ 串原村について知ろう。	スライドを利用して串原村について紹介する。
3 教材を読んで話し合う。	15	○ 串原村の課題とは何だろう。 ・人口が少ない。・不便だ。 ・高齢化が進んでいる。 ○ 作者が、「大人になっても串原村で働き、村の発展のために努力していきたい」と考えたのはなぜだろう。 ・お年寄りだけ残しては、村がだめになるから。 ・大好きな串原村で働くことは串原村を守ることになる。 ・都会の暮らしにも憧れるが、生まれ育った串原村がなくなるのは辛い。	串原村のいろいろな課題を確認する。 串原村にはいろいろな課題があるが、その課題を乗り越えようと努力する作者の思い(ふるさとに対する愛や誇り)を確認する。

㊦	4 これからの生き方について考える。	20	◎ あなたは自分の「ふるさと」が好きですか。また、将来は作者のように自分の「ふるさと」に残りたいですか。 ・地域に残って、地域をもっと活気づけたい。 ・生まれ育った場所は好きだけど、都会に出て、好きな仕事に就きたい。 (個人→全体)	マトリクスを利用し、作者の思いと自分自身の思いを比べながら、自分がそのように思う理由を考え、意見を交流する。 ★ 作者のふるさとを思う気持ちから、自分のふるさとに対する思いを見つめられているか。
㊧	5 本時のまとめをする。	8	○ 今日の学習を振り返り、感じたこと、考えたことを記入しよう。 ・地域の行事にもっと参加するなどして、ふるさとを大切にしたい。 ・今まであまりふるさとについて考えたことはなかったが、地域の課題などを知ろうとすることは大事だと思う。	自分のふるさとについて改めて見つめ直すことが、自分のふるさとをより理解し、自分の生まれ育ったふるさとを大切にしていける姿勢につながることを伝える。

(2) 生徒の感想

- 今日の学習を終えて、僕は将来ふるさとに残りたいなと思いました。将来は地域のためになることをしたいと思いました。また、もしふるさとを離れてしまうことになったときには、自分のふるさとのことを忘れず、大切に思い続けることが大事だと思いました。
- 私は、自分のふるさとが大好きです。自然豊かで、地域の人人も優しく、とても良い地域だと思っています。また、地区の人たちが企画してくれて、ずっと続いている行事などもあります。地区の人たちはふるさとが好きなのだと思いました。これからも、地域の祭りに参加して、地域を盛り上げる一人でありたいです。

(3) 授業者より(反省)

今回の授業は、昨年度「大洲市教育研究所一斉班会」で作成した指導案を活用した。元の指導案には「学習活動4 これからの生き方について考える。」の後に、地域コーディネーターの思いを聞く時間があったが、今回の授業では、学習活動4で考えを共有する時間を充実させた。主発問で意見交換や考えを深める時間を作ったことで、終末の感想記入では地域に対して何ができるかということを考えている生徒もいたが、中には「ふるさとに残りたいか、残りにたくないか」の考えでとどまっている生徒もいた。問い返しや一人一人の生徒に合う声掛けがあると、更にふるさとに対する思いを深められたと感じている。

4 研究の成果と課題

- 改善ポイントを明確にして、班会で作成した指導案を活用したことで、生徒の考えを共有する時間が充実し、ふるさとに対する思いを深めることができた。
- 道徳教材の開発に取り組んでいる班会として、今後も地域性や児童・生徒の発達段階の面で考慮して、教材を改善・検討する必要がある。来年度は、「中江 藤樹」に視点を当て直し、教材の見直しを行いたい。

喜多支部

1 研究主題(小・中共通)

よりよく生きるための基盤となる道德性が育つ道德教育の研究

－ 学びがいのある道德科の授業を要として －

2 研究のあゆみ

(1) 喜多郡小・中学校道德委員会(4月16日)

ア 役員選出、研究主題の設定、研究計画の立案

イ 情報交換

(2) 内子町小中学校道德研修会(6月26日:天神小学校)

(3) 文部科学省委託愛媛県教育委員会指定「特色ある道德教育推進事業」推進校研究発表会

(11月29日:天神小学校)

3 研究の内容

(1) 示範授業 6月26日(水) 第2学年 松山市役所人権・共生社会推進課 齊藤 照夫先生

ア 主題名 他国の人たちとなかよく【C 国際理解、国際親善】

イ 教材名 せかいのくにの 人たちと(「新しいどうとく2」東京書籍)

(2) 研究授業 6月26日(水) 第3学年 内子町立天神小学校 教諭 大澤 陽子

ア 主題名 きまりを守る【C 規則の尊重】

イ 教材名 きまりじゃないか(「新しいどうとく3」東京書籍)

ウ ねらい きまりに対する裕一の思いを考慮を通して、きまりは誰もが安全にかつ安心して気持ちよく生活するためにあるということに気付くことで、進んできまりを守っていこうとする道德的態度を育てる。

エ 準備物 アンケートの結果、挿絵、ワークシート、心情円盤

オ 展開

学習活動	○主な発問・予想される児童の反応	○指導上の留意点(◎評価)★合理的配慮
1 これまでの生活を振り返り、本時のめあてを共有する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校で、時々守れていないきまりは何ですか。 <ul style="list-style-type: none"> ・廊下を走らない。 ・学校にお菓子を持ってこない。 ○ なぜ、守れないのでしょうか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ちょっとぐらい良いかと思う。 ・早く行きたい。 ・友達がしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 事前アンケートを基に、実態を知る。 ○ 具体的な場面を提示し、自分のこととして考えようとする意識を高める。
きまりは、何のためにあるのだろう。		
2 教材を基に話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 裕一の「遊びたい気持ち」と「きまりを守ろうとする気持ち」がどのぐらいか考えてみましょう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教材は、事前に読ませておくことで、場面把握の時間を短縮する。 ○ 挿絵やセンテンスカードなどを提示し、教材の内容を確認する。 ○ ペアで意見交換をさせた後、全体で意見交流をすることによって、多面的・多角的に考えさせる。 ○ 心情円盤を使って、裕一のきまりに対する思いの強さを視覚的に捉えやすいようにする。

<p>3 自己を見つめる。</p>	<p>○ きまりは、何のためにあるのでしょうか。 ・みんなが気持ちよく過ごすため。 ・安全に学校生活を送るため。</p> <p>○ きまりを守ってよかったことはありますか。 ・廊下を走っていないので、けがをせずに過ごすことができています。 ・集団下校の時にみんなはしゃべっていたけれど、自分は静かに並んだので、早く整列できた。</p>	<p>○ 遊びたいという正直な思いや、こういう思いは誰にでもあるということに気付かせる。合わせて、きまりの意義についても考えさせる。</p> <p>○ 自分なりに、きまりの大切さを再認識させる。</p> <p>○ 自分事として考えさせるために、価値との関わりで自己の生活を振り返らせる。</p> <p>○ 日常の生活場面を把握しておく。</p> <p>○ きまりを守った自分に気付かせることで、自尊感情を高める。</p>
<p>4 本時の学習を振り返る。</p>	<p>○ 今日の授業を通して、どんなことを考えましたか。 ・今まで「ちょっとぐらいいいだろう」ときまりを守れていないことがあった。 ・みんなが気持ちよく過ごすためにきまりは大切だと分かった。 ・これからは、きまりは守るぞ。</p>	<p>◎ 多様な考えに触れ、自分との関わりの中で、考えを深めることができたか。 (ワークシート・発表)</p> <p>★ 自分の考えを書くときに個別に声を掛ける。 (児童A、B、C) (I-I-I)</p>

(3) 研究協議

- 事前に本文を読ませておきたい場合には、朝の読書の時間などを使うなどの工夫が取られていた。
- 児童たちに事前アンケートを取ることで、自分事として考えることができていた。児童たちが自分たちの経験を基にして発表することができていた。
- 発表などの学習訓練がしっかりとできていた。
- きまりが必要ではないという意見に対して、問い返しがあればよかった。

(4) 指導助言

- 道徳的判断力、道徳的心情、道徳的实践意欲と態度について、判断力は行為ではなく、内面についてのことである。「価値を知る」と「価値理解」は異なり、価値理解が深まると行為につながっていく。
- 「きまりを作るか作らないか」は行為を問うことであり、道徳は思い(心の成長)を問うことである。「きまりは作らない方がいい。」という意見に対して、「すごいね、よく考えたね。」と言葉を掛け、「このことについては、また、今度考えようね。」と伝える。どんな意見も認めることが大切であり、周りの児童の反応を見逃さないようにすること。
- 児童の意見が出たところで、「この中でぴったりくるのはどれかな。」と問い掛け、みんなの納得解を見つけるのも一つの方法である。(クローズ・エンド)

4 研究の成果と課題

- 心の内面を可視化する心情円盤などの効果的な使い方、板書の仕方について話し合うことができた。
- 今後も子どもたちの素直な意見を聞き、問い返しの仕方を工夫することで、研究を進めていきたい。

八 幡 浜 支 部

1 研究主題(小・中共通)

よりよく生きるための基盤となる道徳性が育つ道徳教育の研究

－ 学びがいのある道徳科の授業を要として －

2 研究のあゆみ

(1) 第1回市教育研究大会 4月12日(金)

役員選出、研究主題の設定、研究計画立案

(2) 第2回市教育研究大会 11月14日(木)

授業研究

3 研究の内容

(1) 研究授業 11月14日(木) 授業者 第1学年 八幡浜市立江戸岡小学校 教諭 池田 美咲

ア 主題名 だれとでも【C 公正、公平、社会正義】

イ 教材名 ふたりだけで(「しょうがくどうとく1」日本文教出版)

ウ ねらい 友達の誰か一人を仲間外しにすると、仲間外れにされた子が傷付くだけでなく、その子に悪いことをしたと試してみんなが楽しくないことを理解し、誰に対しても、自分の好き嫌いにとらわれないで接するための道徳的判断力を育てる。

エ 準備物 ワークシート、挿絵

オ 展開

学 習 活 動	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
1 これまでの生活を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ みんなで遊びたいと思っているのに、仲間に入れられないのは、どんなときですか。 <ul style="list-style-type: none"> ・遊びの途中で、入れにくいとき。 ・二人で遊ぶ約束をしていたとき。 ・人数が合わないとき。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ アンケートの結果から、日常生活の中で、友達と仲良くしたい気持ちがあるのに、できないことがあるという問題意識を持たせる。
2 教材「ふたりだけで」を読んで考え、話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 二人で遊んでいるとき、ララとココはどんな気持ちだったでしょう。 <ul style="list-style-type: none"> ・楽しいな。ずっと二人で遊びたいな。 ○ カカが「仲間に入れて。」と言ったときの、ララとココの考えを比べてみましょう。 <ul style="list-style-type: none"> ① ララはどんな気持ちで「いやよ。」と言ったのでしょうか。 <ul style="list-style-type: none"> ・二人だけで遊びたい。邪魔をしないで。 ・ココをカカに取られたくない。 ② ココはどんな気持ちで「カカとも一緒に遊ぼうよ。」と言ったのでしょうか。 <ul style="list-style-type: none"> ・入れないと、カカがかわいそう。 ・三人で遊んだほうが楽しいよ。 ◎ 二人だけで遊ぶのはだめなのかな、と考え始めたララに、何と言ってあげたいですか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ララの気持ちはわかるけど、カカの気持ち 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 二人とも、仲良しの友達と二人で遊ぶことに幸せを感じていることを押さえる。 ○ 二人だけで遊びたいというララは、カカの気持ちに気付いていないことに気付かせる。 ○ 仲間に入れないカカの悲しい気持ちを思いやり、三人で遊ぶ良さに気付いているココの発言に共感させる。 ○ 「みんなで仲良くしたい」というココの思いをワークシートに書いてから、ペアで役割

<p>3 日頃の生活の中で、みんなで仲良くすることの良さについて考え、本時の感想をまとめる。</p> <p>4 友達の作文を聞く。</p>	<p>を考えてみて。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二人で遊んでも、カカが悲しかったら、わたしは楽しくないよ。 ・みんなで遊んだほうが楽しいよ。 ・一緒に遊んだら、カカとも友達になれるよ。 <p>○ 1年生みんなが仲良しだと、どんな良いことがありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・けんかがなくなる。 ・いろいろな友達と遊べる。 ・学校がもっと楽しくなる。 <p>○ 友達と仲良くできてうれしかったことを、こんなふうに書いている友達があります。</p>	<p>演技をする。</p> <p>○ ララにアドバイスする言葉を考えることで、公正、公平な態度についての考えを深めさせたい。</p> <p>○ みんなで仲良くすれば、楽しいことが増えていくことに気付かせ、学んだことを今後の生活に生かそうとする意欲を高める。</p> <p>○ 友達の良さを感じ、温かい気持ちで終わられるようにする。</p>
<p><評価の観点></p> <p>○ 誰も仲間外れにすることなく、仲良く遊ぶことの良さを考え、伝えようとしているか。(ワークシート、観察)</p>		

(2) 研究協議

ア 自評

- 思ったように授業が流れなかった。教材範読後に感想をたくさん聞いてしまい、その後の展開を迷った。予定では、感想を短く聞き、話の流れに沿ってココとララの気持ちを追っていかうと思っていた。
- 子どもたちから、「カカが悲しいと、私も悲しい気持ちになる」という考えを出させたかったがうまくいかなかったので、どのように発問すればよかったのだろうか。

イ 協議

- 「みんななかよく」の方に流れたと言われていたが、中心発問のところで、「入れてあげるとララが優しくなれるよ。」と言った際に、「ココは優しいね。見習ってほしいね。」「優しい人が増えると、誰とでも仲良くなれるね。」等、子どもの意見を拾ってあげるとよいと思う。「いい子だから遊ぼうよ。」の意見にも「いい子じゃないと遊ばないの。」と問い返すと、「公正、公平」の方に流れたのではないか。
- 「誰とでも仲良くするために大切なことを考えよう」のような目当てを立てると、子どもたちの気持ちが「誰とでも」にいったのではないか。
- 前で役割演技をした際に、「どうして、そう言おうと思ったの。」と切り返しをされていたので、子どもたちの考えが深まったと思う。子どもたちの心の中にあることが引き出されて、自分なりの理由を言うことができ、考えが広がっていた。
- 最後に、作文と写真があり、温かい気持ちで終わることができていた。

ウ 指導助言

クラスの課題を解決するという目的に向かって授業が組み立てられており、児童が意欲的に取り組んでいた。本時のまとめでは、「これからどう行動するか」より、「今日の学びをどのように生かしていくか」を考えさせるとよい。また、「道徳的価値」「人間理解」「他者理解」が重なり合う授業構成にすることにより、本時のねらいとする道徳的価値の理解が深まり、自分事として学ぶことができる。

4 研究の成果と今後の課題

授業研究を通して、考えを深めさせるための中心発問や問い返しの発問、役割演技、ICTの活用についての研究を進めることができた。今後も、ICTや別葉の効果的な活用について情報交換を行い、更に研究を深める。

西 宇 和 支 部

1 研究主題(小・中共通)

よりよく生きるための基盤となる道徳性が育つ道徳教育の研究
 - 学びがいのある道徳科の授業を要として -

2 研究のあゆみ

(1) 第1回町教育推進集会(4月12日)

役員選出、研究主題の設定、研修計画の立案

(2) 道徳科委員研修会(10月)

ア 研究授業

イ 情報交換

3 研究の内容

(1) 研究授業 10月7日(月)授業者 第1学年 瀬戸中学校 教諭 上甲雅史

ア 主題名 誠実な生き方【A 自主、自律、自由と責任】

イ 教材名 裏庭のできごと(「中学道徳1」日本文教出版)

ウ ねらい 健二の心の変容を捉えることで、自ら判断し、誠実に生きることの良さに気付き責任ある行動を取ろうとする道徳的実践意欲を育てる。

エ 準備物 ワークシート

オ 展開

学習活動	時間	○主な発問 ・予想される生徒の反応 ◎中心発問	○指導上の工夫 ◎評価(評価方法)
1 理想の大人像について考える。	3	○ 理想の大人になるためにはどんなことが大切だと思いますか。 ・何事にも積極的に取り組む。 ・諦めずに努力すること。	○ アンケートを活用する。 ○ 自分のこととして考えさせる。
2 教材を読んで話し合う。	6 5 5 8 15	<p>範読6分</p> <p>○ 健二について疑問に思ったことはありますか。 ・ガラスを割ったことを最初は黙っていた。 ・良くないと思いつつも流されてサッカーをした。</p> <p>○ 健二は学校でどんなことを考えていたのだろう。 ・先生に正直に言った方がよい。 ・大輔に止められて言いにくい。</p> <p>○ あなたが健二なら先生のところに言いに行きますか。 行く ・言わないとすっきりしない。 ・正直に言った方がいい。 行かない ・怒られたくない。 ・大輔に口止めされている。</p> <p>◎ 次の日、健二はなぜ職員室に向かったのだろう。</p>	<p>○ 主人公の健二に焦点を当てることを伝え、他の登場人物の行動や関係性を教師主導で簡単に整理する。</p> <p>◎ 健二の判断や心情を多様な視点から捉え、考えようとしている。 (観察・ワークシート)</p> <p>○ 正直に言えない健二の揺れる気持ちを考えさせるために補助発問を入れる。</p> <p>○ 健二の気持ちをより身近に感じるために自分のこととして考えさせる。</p> <p>○ 大輔の口止めや先生に怒られるなどの心配があるにも関わらず行動す</p>

		<ul style="list-style-type: none"> ・正しいことをすることが大切だと考え直した。 ・このままでは後悔する。 ・自分の弱さに負けたくない。 	<p>ることに決めた理由を、問い返しをしながら深めていく。</p> <p>◎ 人物の行動や心情だけでなく、道徳的価値に触れて考えている。</p> <p>(観察・ワークシート)</p>
3 自分の生活を振り返る。	8	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校生活や友達との関わりの中で、同じような場面がないかを振り返ってみよう。 ・忘れ物をした際に、正直に言う。 ・友達を傷つけた時に、素直に謝る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分たちの学校生活に同じような場面がないか見直す意識を持たせる。 ◎ 本時の学習内容を基にして考える。 <p>(観察・ワークシート)</p>

研究の視点 ・ 道徳的価値に触れるための発問や問い返しの工夫

(2) 研究協議

- 少人数(4人)学級での現状を踏まえ、効果的な授業展開になるように、予想される生徒の反応や思考を予想し、追い質問や問い返しを事前に考えていたことで、効果的な問い返しができている。特に、中心発問での生徒の「雄一との仲が悪くなりたくない」という発言に対して「じゃあ、大輔はいいの。」また、「もやもやをすっきりしたいから。」という発言に対して「もやもやって何。」とすぐ問い返したのは道徳的価値に迫る上で効果的であった。
- 登場人物の葛藤を身近に考えさせるために、自分だったらどうするかという発問は、考える立場が変わることで生徒が混乱するという意見もあるが、生徒のことを一番よく分かっている学担が、教材研究をした中でやりたいと思う方法で自信を持ってやればよいのではないかと。
- クラスの雰囲気良く、道徳の授業を進めるのに良い土壌が形成されていた。全員が自分の考えを伝えることができ、少人数の良さが表れた授業だった。
- 4人ならペアでの活動も可能である。行く 行かない で意見が分かれていたので、立場の違うペアで考えさせられたのではないかと。自分の頭の中だけで考えるより、ペアでのやりとりを通してどんどん言葉に出させると考えが明らかになるのではないかと。また、心情グラフなどの活用もできる。
- 展開の変化で、違う価値に向かう場合がある。今回は友情と重なるところがあり、最後に教師が、価値に寄せるように持って行きがちなので、本教材では、友達3人での場面で起こった出来事が、もし自分一人の時だったらどうかと問うことで、自主・自律、自由と責任の価値を考えていくこともできるのではないかと。最後に、生徒から価値が出ない場合は、無理に教師がまとめるのではなく、説話として価値を伝えるという方法もある。教師の話は、よりよい行いが取れなかった体験談の方が効果的である。
- 教材の中で、どきっとするキーワードがある。雄一の「なんだよ、汚えな。」大輔の「おれを出し抜いて先生の所に行くなよ」。それに対して健二の「僕は、僕自身はどうしたいのだろう。」と鏡に映っている自分につぶやくシーン。ここを葛藤場面として、健二が鏡の中の自分に何を言っているのかを吹き出しに書いて考えさせる工夫もあるのではないかと。

(3) 指導助言

- 中心発問で生徒の意見を引き出すために生徒の反応を事前にノートに書き出し予想し、問い返しの発問を工夫してねらいに迫る授業への準備がなされていた。
- 生徒の素直な表現から教師と生徒の信頼関係ができていることが伝わってきた。学級経営や環境づくりが道徳の授業には大切である。
- ねらいに迫るために揺さぶる場面をどこにするか、教材を深く読み込んでいくことが大切である。

4 研究の成果と課題

- 少人数学級でも、日々の学級経営において自分の意見が安心して言える土壌をつくることや、教師が児童生徒の反応や思考過程を予想し、問い返しや切り返しの発問を工夫することで、一人一人が考えを深め、道徳的価値に迫る授業ができることが分かった。
- 今後も、読み物教材を深く読み込み、教材の構造分析をしっかりと行い、ねらいに迫ることのできる中心発問の設定ができるように努めたい。

西 予 支 部

1 研究主題(小・中共通)

よりよく生きるための基盤となる道德性が育つ道德教育の研究
 - 学びがいのある道德科の授業を要として -

2 研究のあゆみ

- (1) 西予市所属部会総会道德委員会(4月16日)
役員選出、研究主題の設定
- (2) 第1回西予市道德委員研修会(6月11日)
研修計画立案、西予市教育研究大会道德部会のもち方について
- (3) 第2回西予市道德委員研修会(8月26日)
西予市教育研究大会道德部会の公開授業の指導案審議
- (4) 西予市教育研究大会道德部会(10月29日)
ア 授業研究
イ 愛媛県総合教育センター指導主事 藤内 大介先生による出前講座

3 研究の内容

- (1) 研究授業 10月29日(火) 授業者 第5学年 西予市立田之筋小学校 教諭 古谷 利恵
 - ア 主題名 自由に、規則正しく【A 善悪の判断、自律、自由と責任】
 - イ 教材名 うばわれた自由(「みんなの道德5」学研)
 - ウ ねらい ろう屋の中でジェラル王が考えたことについて話し合う活動を通して、自由とは、善悪の判断の下に自分で決めて行動することが大切であることに気付き、自分の意志で考え、判断し、責任を持って行動していこうとする道德的実践意欲を高める。
 - エ 準備物 挿絵、文字カード、ワークシート、タブレット端末
 - オ 展開

学習活動	時間	主な発問と予想される生徒の反応	○指導上の留意点 ◇評価
1 「自由」について、友達の考えを知る。	5	○ ふだんの生活の中で、みんなが自由だと感じるのは、どんなことですか。 ・自分の好きなことが何でもできる。 ・何にも縛られない。 ・友達と遊ぶ。 ○ 自由ではないと感じるのはどんなことですか。 ・授業中、宿題、手伝いなどやりたくないことをやる。人から決められる。 ・きまりを守らないといけない。	○ 事前のアンケート結果を提示し、ねらいとする道德的価値について問題意識を持たせる。 ○ 自由ではないと感じることやその理由をみんなで共感しつつ、学習課題への方向付けをする。
「本当の自由」とは、どういうことなのでしょう。			
2 二人の登場人物の考え方について話し合う。 ○ ジェラルのいう「自由」について ○ ガリユーのいう「自由」について	10	○ ジェラル王子とガリユーの自由についての考え方にはどんな違いがありますか。二人とも、同じ自由。 <ジェラル王子は自由についてどのように考えていたでしょう。> ・したいことをしたいようにする。 ・人のことを考えない。 <ガリユーは自由についてどのように考えていたでしょう。> ・きまりを守る。 ・迷惑をかけないようにする。	○ 事前に教材を読ませておき、ここでは登場人物、条件、状況について、挿絵や文字カードを提示しながら内容を押さえる。 ○ 異なる部分を対比して左右に板書し、両者の考え方を比較しやすくする。 ○ 「どちらがより多くの方が幸せになるのか、なぜそうなのか」という補助発問をしながら考えをまとめていく。

<p>3 ろう屋でジェラル王が考えたことを話し合い、「本当の自由」について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 個人で考える。 ○ 班で話し合う。 ○ 全体で話し合う。 ○ 「本当の自由」について考える。 	<p>25</p>	<p>◎ ジェラル王はろう屋の中で何を考え、ガリューに何と言ったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わがまま、好き勝手はだめだ。 ・みんなのことを考えてなかった。 ・きまりを守ることが大切だ。 <p>○ それぞれが考えたことや理由、ジェラル王がどうすべきだったかについて、班で話し合ひましょう。</p> <p>○ 班で話し合ったことを発表しましょう。</p> <p>○ 「本当の自由とは、」に続く言葉を自分で考えてみましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・きまりを守りながら行動すること。 ・自分勝手な行動をせず、相手のことを考えること。 ・自分で善悪を判断し、責任を持つこと。 ・弱い自分に負けないこと。 	<p>○ ジェラル王の言葉を隠しておき、ガリューに話したことを考えさせ、共有ノートに短い言葉で書き込ませる。</p> <p>○ ガリューに謝る言葉だけでなく、ジェラル王の後悔や反省の言葉が出るように発問する。</p> <p>○ 自分の考えや理由だけでなく、どのようにすればよかったのか、話し合わせるようにする。</p> <p>○ 班で出た考えについて共有ノートでまとめさせる。</p> <p>○ 共有ノートや板書を見ながら、「本当の自由」について、自分の言葉で発表できるようにする。</p> <p>◇ 友達と考えを交流し合うことを通して、「本当の自由」について考えを広げ深めようとしていたか。</p>
<p>4 学習を振り返る。</p>	<p>5</p>	<p>○ 今日の学習したことを基に、「自由」について考えたことや学んだこと、これから自分はどのように生かしていくかについて、ワークシートに書きましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初と学習後では、自由について考えが変わった。 ・自由とは、何でもやっていいのではなく、自分でそれがいいのかどうか考えて行動しなければならない。 ・これからも誘惑に負けるかもしれない。自分に負けたくないようにしたい。 	<p>○ 導入時の自分の考えや共有した友達の考えと比較しながら、ねらいとする価値について、自分を見つめさせ、ワークシートに書かせる。</p> <p>○ ネットの誹謗(ひぼう)中傷などについても触れ、次時へつなげるようにする。</p> <p>◇ 自由について価値を理解し、自分自身で考え、判断し、行動していこうとする意欲が高まったか。</p>

(2) 研究協議(一部掲載)

- 事前にアンケートを行っていて、自分を振り返りながら児童が授業を受けられてよかった。
- 子どもたちを揺さぶる発言や問い返しをしながら児童の思考を深めていた。
- 教師の補助発問から、一人一人の意見を大切にしていることが感じられた。
- 展開は、「自由」という難しいテーマだった。児童自身の中で、「本当の自由」についてじっくり考えさせてから教師の意見を伝えてもよいのではないか。
- ジェラルやガリューの自由についてもう少し押さえる必要があったかもしれない。最後に、「本当の自由」についてまとめ、そして、自分の生活に返して「本当の自由」について考えさせたらよかった。
- 共有ノートは、発表しにくい子の手立てにもなると感じた。ガリューの目線で、「ルールを守ったのに、自由を奪われてしまう」という視点で授業をしても面白いのではないか。また、今回の授業では、人数や目的などを考慮すると、ホワイトボードでの可視化で十分だったのではないか。

(3) 出前講座「道徳科の授業づくり」愛媛県総合教育センター指導主事 藤内 大介先生

ア 学校全体で取り組む道徳教育

意見共有アプリの紹介や道徳教育の目標の確認、内容項目や道徳的価値について

イ 道徳科の授業づくり

中心発問や基本発問の設定の仕方や効果的な ICT 活用、話し合いを深めるための工夫について

4 研究の成果と課題

道徳科の授業において、児童生徒から考えを引き出すには、発問構成をしっかりと考える必要がある。教師が道徳的な価値を捉え、児童生徒の実態に応じて教材を効果的に活用するなど、教師の明確な指導の意図が不可欠である。今後も、児童生徒が自己の生き方について考えを深められるように、発問構成や指導方法の工夫を行うなど、学びがいのある授業を目指して研究を進めていきたい。

1 研究主題

よりよく生きるための基盤となる道德性が育つ道德教育の研究

－ 学びがいのある道德科の授業を要として －

2 研究のあゆみ

(1) 第1回教科等研究委員会(4月12日)

常任委員の選出、研究計画の立案

(2) 第2回教科等研究委員会(4月22日)

常任委員の承認、研究主題・研究計画の協議

(3) 道德研究委員会夏季研修会(8月20日)

出前講座「今、求められる道德教育の具体的な展開」

愛媛県総合教育センター 指導主事 藤内 大介先生

3 研究の内容

(1) 道德研究委員会夏季研修会

今年度は、夏季研修会において、愛媛県総合教育センター指導主事 藤内 大介先生を講師にお招きし「今、求められる道德教育の具体的な展開」と題して出前講座を行っていただいた。宇和島市内の小中学校道德主任を中心に、29名の参加を得て研修に取り組んだ。

(2) 講義の内容

ア 学校全体で取り組む道德教育

○ 道德教育は、道德科だけで行うものではなく、学校の教育活動全体を通じて行うものである。道德科以外で、いつ、どのような場面で、どのようにそれぞれの内容項目の指導をするのかを明らかにするため、道德教育の全体計画の別葉を作成する。

○ 道德教育の全体計画の別葉を基にし、組織的・計画的に道德教育を進めることが大切である。そのためには、他の教師との協力的な指導を実施する必要がある。

○ 道德教育推進教師が中心となり、道德教育の全体計画の別葉を見直したり、研修で別葉について触れたりするなど、全教職員で道德教育を進めていく。

○ 学校行事や日常の生活、教科等とつなげる働き掛けが必要であり、道德科の授業で更に深めていく。

○ 道德教育と道德科の関連や道德性を捉える四つの様相、内容項目に含まれる道德的価値について確認する。

○ 一人一人が意思決定を行う際には、様々な道德的価値観が大きく関わっている（資料1）。



資料1 様々な価値についての解説

イ 道德科の授業づくり

○ 道德科の授業では、教師の明確な指導の意図が必要である。まずは、ねらいや指導内容について教師の捉え方を明確にする。次に、ねらいや指導内容に関連する児童生徒のこれまでの学習状況や実態と教師の願いを明確にする。そして、使用する教材の特質やそれを生かす具体的な活

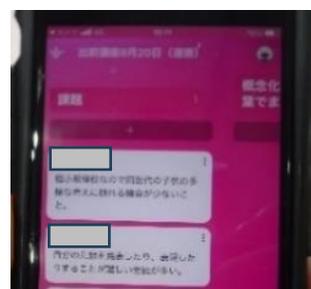
用方法を明確にする。

- 教師の指導の意図や道徳的価値の捉え方、教材の特質等によって発問は変わる(資料2)。
- 「発問の立ち位置四区分」というマトリックスを参考にして、発問の分類や具体的な内容を押さえる。
- ねらいに迫るためには、学習過程における指導の工夫が必要である。教材の提示やペアでの対話、グループによる話し合い、役割演技、ワークシート等、様々な指導方法がある。



資料2 ねらいや中心発問の解説

- ICT機器は、ねらいに迫るための手段の一つである。ICTの活用事例として、導入段階で主題に関連する映像やグラフを提示する方法や、端末に考えを示して他者と共有する方法などが挙げられる。
- 受講者同士の考えを共有するには、共有機能を持つアプリを使用することもできる(資料3)。
- 道徳科における対話・話し合いの活性化のためには、教師がファシリテーターとして子どもの考えをつなぐ役割がある。
- 話し合いを深めるためには、問いを自分自身との関わりで考えさせること、子どもの話に耳を傾けながら多くの思いを引き出すこと、考えの書き方や教師の適切なフィードバックに配慮することが必要である。



資料3 Padletによる
考えの共有

(3) 参加者の所感

- 学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育とのつながりの中で、児童生徒を育てることの意義を理解することができた。
- ねらいの立て方、中心発問の作り方、授業展開の仕方など、具体的に指導していただき分かりやすかった。授業に生かしたい。
- 「ねらい」を明確にするという根本的なところに改めて目を向けることができ、自分の反省点を見付けることができた。

4 研究の成果と課題

愛媛県総合教育センター指導主事 藤内 大介先生をお招きして研修を受けることで、道徳教育の理解を更に深めることができた。学習指導要領解説にある内容項目ごとの概要や指導の要点を活用しながら、ねらいや指導内容についての指導者の捉え方や指導の意図を明確にすることが大切であると分かった。講義の中で、ペアやグループを取り入れた演習を行っていただいた。子どもの実態や教材の特質等に応じて、ねらいに迫る中心発問を考えることは難しかったが、各々の価値の捉え方を交流することで、教師がねらいを明確にして授業をすることの大切さに改めて気付くことができた。また、日々の授業における教師の声掛けやフィードバックの重要性についても知ることができ、受講者各自がそれぞれの言動を振り返る良い機会となった。各校では、校内研修を通して講座の内容を共有するとともに、それらを参考にして、授業改善に取り組んだ。特に、ねらいや指導内容の教師の捉え方を明確にすることについて重点的に取り組み、学びがいのある道徳科の授業づくりにつなげた。

今後は、評価の仕方や子ども自身の振り返りについての研究を進めていきたい。

北 宇 和 支 部

1 研究主題

よりよく生きるための基盤となる道徳性が育つ道徳教育の研究

－ 学びがいのある道徳科の授業を要として －

2 研究のあゆみ

(1) 第1回道徳主任会(5月1日)・・・研究主題の設定と確認、研修計画の立案

(2) 第2回道徳主任会(10月18日)・・・北宇和郡道徳授業研究会、情報交換

3 研究の内容

(1) 授業実践

第6学年 授業者 鬼北町立好藤小学校 教諭 渡部 咲果

鬼北町立泉小学校 教諭 酒井 浩子

ア 主題名 友達との間で【B 友情、信頼】

イ 教材名 ばかじゃん!(「新しい道徳6」東京書籍)

ウ 本時の指導

○ ねらい 自分の思いを伝えたり、友達の意見を聞いたりすることの大切さに気付くことで相手を理解し、信頼し合いよりよい友情関係を築いていこうとする態度を育てる。

○ 展 開

学習活動	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点(★評価) ■ ICTの活用
<p>1 友達との関わりについて考え、本時の学習テーマを捉える。</p> 	<p>○ 今まで友達との関係で困ったことや悩んだことはありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話題についていけないとき ・嫌なことを言われたとき ・約束を破られたとき <p>○ 友達から嫌な言葉を言われたとき、あなただったらどうしますか。</p> <p>A:確かめる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・また同じ言葉を言われたら嫌だから。 ・自分だけ言われると不安だから。 <p>B:確かめない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話しかける勇気がないから。 ・また言われるかもしれないから。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-top: 10px;"> 友達と仲良くしていくために大切なことは </div>	<p>■ 事前に両校にアンケートを取っておき、友達との関係で困ったことや悩んだことを紹介する。</p> <p>■ 事前にプレゼンテーションアプリに自分が考える立場にネームカードを置かせ、その理由も書かせておき、結果を共有する。</p> <p>○ これまでの自分の生活経験を振り返らせることで、本時のねらいとする価値への方向付けを行う。</p> <p>○ 話合いの時間確保のため、事前に教材文を読ませしておく。</p>
<p>2 教材を読んで話し合う。</p> <p>(1) 前半部分の「恵理菜」の気持ちを考える。</p> <p>(2) 中間部分の「恵理菜」の気持ちを考える。</p>	<p>○ 「ばかじゃん!」と言われたとき、どんな気持ちだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どうして、私にだけ言うのだろうか。 ・私のことが嫌いになったのかな。 <p>○ 恵理菜は、かおりの話を聞いてどんなことを思ったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わざとではなかったのかな。 	<p>○ 友達の言動に対して不快感を抱いたときの気持ちを考えさせる。</p> <p>○ 直接話をすることで、お互いに言葉や行動のすれ違いがあったことに気付かせ</p>

<p>(3) 後半部分の「恵理菜」の気持ちを考える。</p> <p>3 最初のアンケートを振り返り、自分と友達の関わりについて考える。</p> <p>4 本時の学習を振り返る。</p>	<p>・もっと早く話を聞けばよかったな。</p> <p>◎ 月曜の朝、真っ先にきのちゃんの席に向かった恵理菜は、どんなことを考えていたのでしょうか。</p> <p>・また、私の思い込みかも。</p> <p>・相手の思いを聞いてみよう。</p> <p>・もう、嫌な思いをしたくない。</p> <p>○ 友達と仲良くしていくために、友達から嫌な言葉を言われたとき、あなただったらどうしますか。</p> <p>・勇気を出して友達の気持ちを聞く。</p> <p>・自分では確かめる勇気がない。</p> <p>○ 学習の振り返りを書きましょう。</p>	<p>る。</p> <p>■ プレゼンテーションアプリごとに作成したシートに意見を書かせ、意見を共有しながら、グループ→全体で話し合うことで自分の考えを深めるように導く。</p> <p>○ 事前アンケートを活用して生活経験を振り返る。</p> <p>○ 自分の考えに変化があった場合はネームカードを動かしてもよいことを伝える。</p> <p>★ 友達と仲良くしていくために大切なことについて考えることができたか。</p> <p>(発言・ワークシート)</p>
--	---	---

(2) 研究協議

- テンポのよい授業で、教師の声や発問もはっきりしていた。児童が人前で物おじせず意見を言うなどよく育っていた。ふだんの学級経営の成果が出ているのだろう。
- 事前に相手校と何度も打合せをし、同じ板書計画で授業を進めたので、45分間同じ流れて両校が授業を進めることができていた。
- 相手校への意見の問い掛けはあったが、中心発問は本校よりになりがちだった。
- 両校の児童が自由に話し合う時間がもっとあればよかった。
- オンライン型授業・学習管理ツールで、両校の児童がデータ共有しながら、意見を交換することができていた。
- 公開授業のため参観者に配慮し、イヤホンをつけて両校が話し合う活動をしなかったが、今後はふだんの交流学习で行うと、より活発な意見交換ができると思う。
- リモート授業を行ったことで、意見の広がりがあった。この実践を町内の共有フォルダに入れ、各校で活用し、道徳科の授業を充実させていきたい。
- 四つの座標軸に分けてネームプレートを置くことで、自分の意見を明確化でき、考えの変容が視覚的に分かりやすく効果的であった。

(3) 指導・助言

- オンライン授業について様々な意見があったが、これは一つの提案と捉えて自分ならどうするか、自校ならどうするか、それぞれの学級規模や学級編成等の実態に合わせてよりよい方法を探っていくのがよい。また、今回は、各校で同時に進行を行い、時々クロスするという新しい形であった。クロスする際には、各校の配分に気を付ける必要がある。
- 内容項目はぶれないことが大切であり、児童を引っ張るのではなく、授業者は上手にコーディネートするよう、ふだんから心掛けていくことが大切である。今日の授業を基に、更に理論と実践を積み重ねながら一層道徳科の授業の充実を図ってほしい。

4 研究の成果と課題

今年度もオンラインでの交流を取り入れた授業を行った。小規模校が多い北宇和郡にとって、学級規模や学級編成等の実態に合わせて授業改善を行うことが重要である。そして今後も、授業研究や情報交換を行い、更に研修を深めていきたい。

南 宇 和 支 部

1 研究主題

よりよく生きるための基盤となる道徳性が育つ道徳教育の研究
 - 学びがいのある道徳科の授業を要として -

2 研究のあゆみ

(1) 道徳主任会(5月)

- ア 役員選出、研究主題の設定、研究計画の立案
- イ 情報交換

(2) 教科等研究会(10月)

南宇和支部では、県の道徳科の研究主題に基づいて日々の授業実践や教育活動に取り組んでいる。今年度は、南宇和郡内の道徳委員会のメンバーが参集し、小学校第1学年の道徳科「ハムスターの赤ちゃん」の研究授業、研究協議を行い、研究を深めた。



3 研究の内容

(1) 研究授業 10月25日(金) 授業者 第1学年 一本松小学校 教諭 清水 麗未

ア 主題名 命の温かさ【D 生命の尊さ】

イ 教材名 ハムスターの赤ちゃん(「あたらしいどうとく1」東京書籍)

ウ ねらい 生き物の誕生や成長、家族の思いから、かけがえのない命を大切にしようとする態度を育てる。

エ 準備物 挿絵、お面、ワークシート、タブレット端末、手紙、ハムスターの模型

オ 主な授業の流れ

まず、身近な動植物について日常生活を振り返りながら考えることで、教材への関心を高めた。そして、誕生から10日までの赤ちゃんハムスターの成長を実物大の大きさのものに触れたり、動画を視聴したりすることで、小さくとも精一杯生きようとする命について気づかせた。中心発問では、お母さんハムスター役、赤ちゃんハムスター役に分かれて役割演技をすることでハムスターを命あるものという実感を持たせるようにした。その時に、教師が問い返しを行うことによって、児童自身が持つ、生きていることへのすばらしさや生命の大切さなどに対する思いを言語化させ、ねらいに迫った。終末では、家族からの手紙を読んで、これからの生活について考えさせ、互いの意見を聞き、多様な考えに触れさせることでねらいの達成を図った。

カ 展開

学習活動	○主な発問・予想される児童の反応 (◎中心発問)	○指導の工夫 (◎評価)
1 身の回りの命や生きていることについて考える。	○ 育てている生き物や野菜が生きているなど感じるのはどんなときですか。 ・大きくなったとき。・温かいと感じたとき。 ・花ができたとき。	○ 日常生活を振り返りやすくするために、児童が撮った写真を活用する。
2 本時のめあてを確認する。	いのちについてかんがえよう。	
3 教材の話聞き話し合う。	○ 生まれたばかりの赤ちゃんを見て、どう思いますか。 ・小さいな。・かわいい。 ・目がまだあいていないみたい。 ・おっばいをおいしそうに飲んでいる。	○ 実物大の赤ちゃんを再現した粘土や動画を見せ、小さくとも精一杯生きようとする赤ちゃんの様子

<p>4 家族からの手紙を読んで、命について考える。</p>	<p>◎ お母さんと赤ちゃんは、どんな話をしていると思いますか。 (お母さん) ・もっともっと大きくなってね。 ・かわいいね。・元気に育ってね。 (赤ちゃん) ・ありがとう。・もっと大きくなるからね。 ・お母さん大好き。</p> <p>○ お手紙を読んで、どんな気持ちになりましたか。 ・一生懸命育ててくれている。 ・命を大切にしたい。・ありがとう。</p>	<p>を実感させる。</p> <p>○ 自分の考えを持てるように、吹き出しに書かせる。</p> <p>○ 役割演技を通して、お母さんの気持ちや、赤ちゃんの気持ちに気付くよう支援する。</p> <p>○ 手紙を読むことが難しい児童には、一緒に読む。</p>
<p>5 本時の振り返りをする。</p>	<p>○ これからどうしていきたいですか。 ・命を大切にしていきたい。 ・生き物も大切にしていきたい。</p>	<p>○ 書く時間を十分に確保して、自分の考えをしっかりと持たせ、発表につなげる。</p> <p>◎ お話や家族からの手紙を通して、命のかけがえのなさに気付いたか。 (発言・ワークシート)</p>

(2) 研究協議

- 生活科の写真や学校生活の写真を見せていた導入がとてもよく、児童が教材に入りやすかった。
- 実物大のハムスターの赤ちゃんを粘土で作っていたのがよかった。しかし、流れとして、粘土の具体物を触った後に、実際の写真や動画を見た方が、子どもたちが分かりやすかったのではないか。
- 役割演技は、先生と児童で行っていたが、子ども同士で行った方がより効果的ではないか。役割演技をペアでさせておいて、発表させる方が、全員が参加できるしワークシートが効果的に働くと思う。

(3) 指導助言

- 教師が、児童に学ばせたいと思うことにつながるつぶやきをきちんと拾っていた。一人一人を認める言葉掛けができていた。例えば…「すてき、いいね。」「それ、すごいね。」子どもの気持ちをよく引き出すために、子どもたちをしっかりと見ていた。
- ねらいの達成について…態度を育てるのか、心情を育てるのかで授業の流れが違ってくる。ねらいを明確にして授業をすることを常に意識する。
- 低学年の道徳について…低学年は、視覚的に働きかけたり、動作化を行ったりすること、生活と関連付けること、よりよく生きるために自分と関わらせることが大切である。
- 動作化について…教材の分析をするときに、道徳の教科書は、とてもよく考えられた内容となっている。ハムスターのお母さんの表情も挿絵をよく見ると全く変わっている。そこを読み取って考えると見えてくるものがある。挿絵を生かした授業展開があってもよい。

4 おわりに

中心発問の問い返しや役割演技を通してのハムスターの気持ちを考える活動が学びがいのある授業として効果的かを主な視点として、小中合同で活発な研究協議を行うことができた。これからも学びがいのある道徳科の授業を目指して、授業実践、教育活動を行っていききたい。

附属支部

1 研究主題

他者との関わりの中で、考えを深め、判断し、行動する力を持った生徒の育成
 - 生徒が立てる問いを基にした道徳科の授業を要として -

2 研究のあゆみ

道徳部会(適宜実施)

3 研究の内容(愛媛大学教育学部附属中学校 第3学年 指導者 萩山 知治)

附属中学校では、「エージェンシーを発揮して、変革を起こす力を持った生徒の育成」という主題の下に研究を進めている。道徳部では、予測不可能な未来社会において、様々な問題解決に向けて生徒自らが選択・判断していけるようにするために、日常生活で直面する事象や現象を自分ごととして捉えさせることが大切であると考えた。そこで、授業では生徒自らが「問い」を立て、協働的・探究的に学び合う中で、研究主題に迫る実践を進めることにした。

以下に、令和4年度2学期に実践した事例を紹介する。

(1) 生徒が問いを立てる授業スタイルの実践に向けた全校体制の取組

ア 学習計画(資料1)

令和4年度は、毎月17日を「道徳いーなの日」とし、朝読書の時間を活用した全校道徳を実施した。教師が様々な価値に迫ることができる教材提示を行い、よりよい生き方について考えを深める時間である。そして、1学期末には「道徳いーなの週」を設定し、生徒の問いを基にした授業スタイルについて共通理解を図るための取組を行った。本実践では、教材「ヤクーバとライオン」(講談社)の読み聞かせを行い、それを基に問いを立てることとした。教材の内容は、「アフリカの奥地の小さな村で、成長した少年が戦士になるための儀式があった。その儀式は、ライオンと一人で戦い、倒してやることである。少年ヤクーバは、戦士になるためにライオンを探した。そしてついにライオンと対峙することになるが、そのライオンは弱り果てていた。ヤクーバは、その弱ったライオンを殺して戦士になるのか」というものである。

6月28日(火)	☆ 全校放送で行われる教材の読み聞かせを通して、「みんなで話し合いたい問い」を個人で考える。 ※ 学級の実態に応じて、主題となるテーマ「勇気」を事前に提示することで、ねらいとする価値を意識させた問いを立ててもよい。
6月29日(水)	☆ 班活動や全体での共有を通して、「みんなで話し合いたい問い」を決定する。 ※ 学級の実態に応じて、話し合ったり多数決を採ったりして決めてもよい。 また、問いは一つでも複数でもよい。複数の場合は、優先順位を決めておく。
6月30日(木)	☆ 「決定した問い」を基に話し合う。 ※ 学級の実態に応じて、話し合いの形態を工夫してもよい。 全体を一つの輪にしたり、複数や班ごとにしたたり、自由に席を立ったりするなど。
7月 1日(金)	☆ 「これから大切にしたい生き方について」考えを深める。 ※ 前日に感想を書かせておき、個人の考えを共有するところから始めてもよい。

資料1 生徒が問いを立てる授業スタイルの実践に向けた学習計画

イ 指導と評価の一体化

実践を終えた生徒の記述には「話し合いたいことについて意見交換できたので考えが深まった。」という肯定的な意見が見られた。一方で、「話の論点がずれてよく分からなかった。」というような意見も複数見られた。これらを基にして、道徳部会で授業スタイルについて修正を行うことにした。

おわりに

愛媛県教育研究協議会道徳委員会

副委員長 木村 良太(八幡浜市立白浜小学校校長)

今年度、私は、11月7日(木)に開催された「愛媛県教育研究大会(発表大会)」に参加し、宇和島市立明倫小学校の6年2組教室で、素敵な道徳科の授業に出会いました。そこでは、活気と温かさが感じられる学級経営、道徳的価値を大切にされた日常の道徳教育、授業における指導者のファシリテーションスキル、主体的・対話的で深い学びに向かう単元デザイン等々、熱心で前向きな学級担任と成長著しい子どもたちから、私自身、大変多くのことを学ばせていただきました。まさに、誰にとっても「学びがいのある道徳科の授業」を垣間見たような気がします。また、授業後の分科会では、約30数名の参加者全員で、道徳科と総合的な学習の時間や特別活動等との関連のさせ方、道徳科における深い学びの実現などについて、互いに意見を交わしながら熱心に話し合うことができ、大変有意義な一日となったのは記憶に新しいところです。

この紹介例は実践の一端にはなりますが、今回、本冊子に編集されている各支部の活動報告からも、県下全域で道徳教育の充実が図られていることが大いに感じられます。冒頭の挨拶で、委員長が述べているとおり、教科化されて6~7年目となる道徳科の授業が円熟味を増してきた証拠と言えるのではないかと思います。もちろん、8月9日(金)に開催された「小・中学校道徳教育研究大会」での課題別分科会、講演も、これらを後押ししているのは間違いありません。なんと、200名を超える参加者がいたというところに、道徳教育に対する関心の高さがうかがえます。

御多用の中、原稿を御執筆いただきました皆様、研究大会の記録をまとめてくださった関係者の皆様にお礼申し上げます。

皆様も御存じのとおり、令和10年度には、全日本中学校道徳教育研究大会(全国大会)が愛媛で開催されます。愛教研道徳委員会では、今現在、この全国大会を視野に入れながら、少しずつ「学びがいのある道徳科の授業」について研究を進めているところです。県内の小・中学校におかれましても、「学びがいのある道徳科の授業」づくりに積極的に取り組んでいただき、来年度も更に、素敵な実践例が各地より寄せられることを願っています。

令和6年度 愛媛県教育研究協議会 道德委員会役員

	氏名	勤務校		氏名	勤務校
委員長	山岡 健二	国安小	運営部幹事	大橋 周平	大久小
副委員長	森脇 和夫	鴨川中	研究部統括	石崎 有一	重信中
副委員長	木村 良太	白浜小	研究部長	小島 啓明	鶴島小
副委員長	石村 秀志	妻鳥小	研究部副部長	松崎 桂子	西中
事務局統括	森下 典明	正岡小	研究部幹事	河野 若菜	白浜小
事務局長	三宅 浩司	久枝小	研究部幹事	宮脇美智代	福音小
事務局長補佐	辻 健一	附属小	研究部幹事	井上 未来	雄新中
事務局会計	東倉 知美	興居島小	編集部統括	有馬 知歩	坂本小
運営部統括	長田 博臣	浅海小	編集部長	野本 淳子	日浦小
運営部長	高市 佳児	栗井小	編集部副部長	岡田由香里	立花中
運営部副部長	重松 直綾	港南中	編集部幹事	河野 美穂	城川中
運営部幹事	村上 理恵	雄郡小	編集部幹事	大柳 美優	北条南中
運営部幹事	豊田 幸子	和気小			

令和6年度 支部委員長

支部名	氏名	勤務校	支部名	氏名	勤務校
四国中央	上田 恭平	三島西中	喜多	平田 慶子	大瀬中
新居浜	山本 恭子	船木小	八幡浜	安部 暁子	八代中
西条	橋本亜由奈	東予西中	西宇和	井上久美子	九町小
今治・越智	大谷 芳佳	九和小	西予	河野 美穂	城川中
松山	名智 律子	窪田小	宇和島	松田 明菜	宇和津小
東温	豊島 泰樹	北吉井小	北宇和	岡田 凌	松野中
伊予	高城 有佳	双海中	南宇和	山本 景子	御荘中
上浮穴	小倉 芳一	父二峰小	附属	萩山 知治	附属中
大洲	露口 知子	大洲東中			

愛媛の道德教育

第49集

令和7年3月 発行

発行者 愛媛県教育研究協議会道德委員会 委員長 山岡 健二

令和6年度

指定2年目

特色ある道徳教育推進事業

授業実践ブックレット

道徳教育を充実させるためのヒントが満載！

県教育委員会では、文部科学省の委託を受け、学校や地域の実態を踏まえ、各学校が当面する課題を解決し、創意工夫を生かした道徳教育を推進するため、研究推進校を指定し、特色ある実践研究や「考え、議論する道徳」の指導方法等に関する研究を行い、その成果の普及を図っています。

研究会当日の授業動画を「愛媛学びの森学習支援サイト」にUP予定！

<研究推進校>

西条市立壬生川小学校



四国中央市立川之江北中学校



松前町立北伊予小学校



東温市立重信中学校



内子町立天神小学校



大洲市立長浜中学校



研究主題

自己を見つめ、よりよく生きようとする心豊かな児童の育成
～関わりを大切にしながら、考えを深める道徳科の授業を通して～

取組と成果のポイント

「全教職員が全校児童の担任」という本校の考えを教職員間で共通理解し、学校の教育活動全体を通して道徳教育を行い、内面に根ざした道徳性の育成を目指した。

道徳教育に係る確かなマネジメントと「ローテーションTT道徳」による授業を行うことで、授業改善を図るとともに、評価の妥当性を高めることができた。また、あらゆる「ひと・もの・こと」との関わりや対話を大切にされた道徳科における授業展開の工夫により、児童は自分の思いを語り、自分事として道徳的価値を捉えることができるようになった。児童も教師も道徳科を「楽しい」と感じ、主体的・対話的で深い学びの実現につながった。

研究の概要及び特色

1 道徳教育に係る確かなマネジメントの推進と充実

学校の教育活動全体を通じて道徳教育を推進するために、教材の内容や実施時期を検討しながら、道徳科が要としての役割を果たせるよう全体計画別葉や年間指導計画を見直した。また、どの教職員も道徳科において「主体的・対話的で深い学び」を生み出せるよう、その手引きとなる「壬生川スタンダード」を作成し、共通理解を図った。

	火 2校時	木 4校時
1松	道	音
2松	音	道

低・中・高学年でローテーションが可能。(R6年度から)

さらに、学級担任以外の教員もT1やT2として道徳科の授業に参加する「ローテーションTT道徳」に取り組めるよう、時間割編成を工夫した。令和6年度は、低・中・高学年でローテーションTT道徳が可能になるよう時間割を編成し、各学年の担当チームに校長や教頭を含めることにより、指導体制の充実を図った。

【時間割編成 低学年の例】

○「ローテーションTT道徳」の成果

- ・P D C Aサイクルによる授業改善
- ・教員の授業力向上
- ・評価の妥当性と信頼性の向上
⇒児童一人一人の多様なよさを見いだすことができ、児童理解を深められる。



【ローテーションTT道徳によるPDCAサイクル】

●「ローテーションTT道徳」の課題

- ・クラスの状況や教員の担当教科、授業時数などを考慮しながら、機能的な指導体制の構築に向け、時間割編成を工夫する必要があること

2 「主体的・対話的で深い学び」を展開する道徳科の充実

道徳科の授業で「主体的・対話的で深い学び」を生み出すために、考えたいと思える問いを持たせる工夫、対話を通して物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について考えを深める協働的な学びの場の充実に取り組んだ。実践を積み重ねることで、道徳

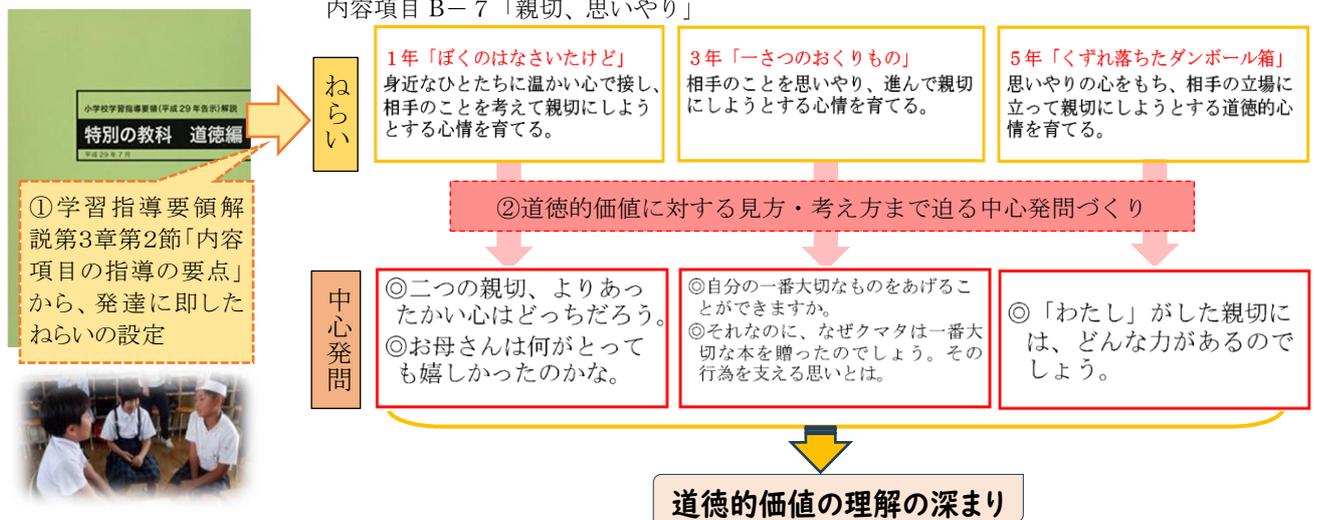


TI・T2による児童の学びの見取り

評価の妥当性と信頼性が高まる。
児童一人一人の多様なよさを見いだす。
児童理解へ

的価値の理解に係る新たな発見や納得がある深い学びを生み出し、児童も教師も楽しいと感じる道徳科の授業を展開できるようになった。

(1) ねらいを明確にした深い学びにつながる中心発問づくり



(2) 「主体的・対話的で深い学び」につながる指導方法の工夫

テーマ学習（児童の作った問いを基にした授業）

児童が考えた問い

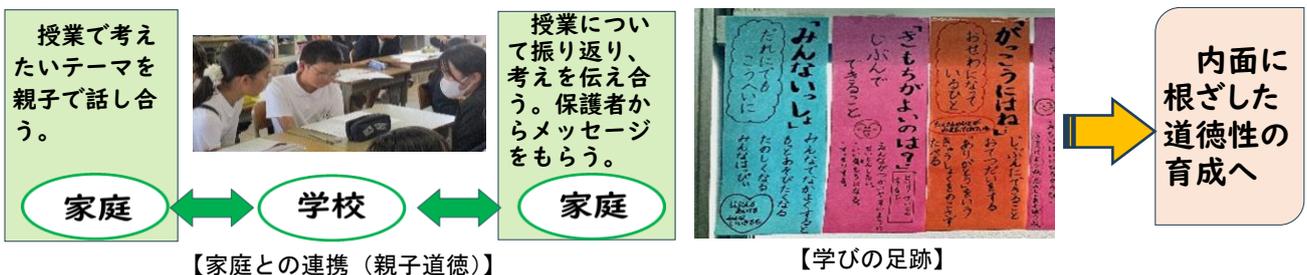
【6年生の授業実践より】

児童が教材を読んで作った問いを基に授業を構成するテーマ学習を行い、児童の思考に沿った授業を展開する。

道徳的価値の理解を自分との関わりの中で深める。

3 教育活動全体における道徳教育の充実

教育活動全体で取り組む道徳教育を充実させ、内面に根ざした道徳性の育成を目指した。令和6年度は、「家庭との連携」や「道徳科の学びを日々の教育活動で生かすこと」に重点を置いて実践に臨んだ。児童は、よりよく生活していこうとする思いをもち、学校生活の様々な場面で主体的に活動できるようになってきた。



研究主題

豊かにかかわり、よりよく生きようとする児童の育成
～自分ごととして向き合い、考えを深める道徳科の授業の工夫～

取組と成果のポイント

道徳科の学習展開を考えるに当たっては、教材分析シートを効果的に活用した。具体的には、ねらいとする道徳的価値を明確にした上で、中心発問や基本発問を精選したり、児童の反応を予想した上で問い返しを考えたりした。また、対話的な活動（「あいあいタイム」）の効果的な活用方法を検討し、話合いの形態を工夫したり、取り入れる場面を精選したりした。その結果、授業において、児童が自己を見つめたり、考えを深めたりする中で、ねらいとする道徳的価値について多面的、多角的に考えることができるようになった。そのほか、地域に根ざした魅力的な教材の開発を通して、児童の心に響く道徳科の授業の創造や、教師の授業づくりに関する力量を高めることにつながった。

研究の概要及び特色

1 「主体的・対話的で深い学び」を実現する道徳科の推進

(1) 教材分析シートの活用による道徳的価値の明確化

教材分析シート（資料1）を用いて授業づくりを行った。分析する項目は、「本時で考えさせたいこと」、「教材の活用・発問」、「『あいあいタイム』の活用」、「ねらいの具現化」の4点に絞り、教材分析の効率化を図った。特に、今年度は、児童同士が対話しながら考えを深める時間「あいあいタイム」の目的をより明確にした上で授業展開を考えられるよう、シートを改善し、「取り入れる場面」や「活用方法」を具体的に示すようにした。シートの活用により、授業の軸となる効果的な中心発問や問い返しをすることができ、児童がより深く自己を見つめたり、考えを深めたりすることにつながった。

教材名（出典）	三つのまほう (愛媛県教育委員会『愛』ある愛媛の道徳一小学校1、2年生一)
主題名（価値）	感謝の心を大切にしよう（B 感謝）
本時で考えさせたいこと	世話になっている人々への感謝の気持ちをじっくりと考えさせたい。
教材活用・発問	中心となる学習 【意図】 世話をしてくれている人々の善意に気付いたときの気持ちを考える。 ◎ スキップしながら教室に入った「わたし」は、どんなことを思っているでしょう。 （予想される児童の反応） ー（問い返し） ・心が温かくなって、なんだかうれしいな。 →心が温かくなると、どんな気持ちかな。 ・けががしたけれど、うれしい気持ちでいっぱいだな。 →うれしい気持ちのほかに、どんな気持ちがあるかな。 ・こんなにたくさんの方が、わたしのことをお世話してくれているんだな。 →それに気付いたわたしは、どんな気持ちになったのかな。
	中心となる学習を支える学習 【意図】 感謝を多面的に考えさせるために、世話をしてくれている人々の思いを想像する。 ○ 3人は、どんな思いで「わたし」に声を掛けたのでしょうか。 世話をしてくれている人々の善意に気付いたときの気持ちを考える場面 ○ スキップしながら教室に入った「わたし」は、どんなことを思っているでしょう。
「あいあいタイム」の活用	取り入れる場面 登壇人物に自我関与して、自分自身が持っている感謝の気持ちを考える。（主体的な学び）
	活用方法 個人 ↓ ペア ↓ 全体 自分の考えを相手に伝えたり、相手の考えを聞いたりして、自分自身が持っている感謝の気持ちを確かめさせる。（対話的な学び） 自分自身が持っている感謝の気持ちを基に、多様な感じ方に触れることを通して、自分の感じ方を広げたり深めたりする。（深い学び）
	ねらいの具現化 世話をしてくれる人々の思いや世話になったときの気持ちを、登壇人物に自我関与して自分ごととして考えることで、世話になっている人々への感謝の気持ちを深め、家族や学校、地域社会で自分のためを思ってくれている人々に感謝しようとする心構えを育てる。

【資料1 教材分析シート】

(2) 多様な価値観に気付き、考えを深める対話的な活動の推進

児童が仲間と対話し、考えを深めるための話合い活動を「あいあいタイム」（資料3）と名付け、道徳科に限らず様々な教科で取り入れた。「あいあいタイム」を取り入れるに当たっては、教員間の指導の差をなくすために、低・中・高学年で身に付けさせたい力（資料2）を示し、全教職員で共通理解を図った。また、児童には、「聴く」ことに重点を置いた「あいあいタイムのポイ

低学年	友達の考えを聴く力の素地を養う。
中学年	複数の意見を聴き、自分の考えと比べる。
高学年	どのような場面でも自分の考えを言う。友達の考えを受けて、自分の考えを述べる。

【資料2 身に付けさせたい力】

ント」(資料4)を作成して提示し、意見交流場面で参考にできるようにした。児童は、「あいあいタイムのポイント」を活用することで、友達の意見をどのように「聴く」のかを意識できるようになってきた。特に、自分の意見との共通点や相違点、相手の意見のよい点を積極的に見付けようとする児童が増えた。



【資料3 「あいあいタイム」の様子】

あいあいタイムのポイント

話すとき・聞くとき

- **自分の考えと同じところやちがうところを見付けよう。**
「〇〇さんの ～と同じ 考えて、…と思いました。」
「〇〇さんと ちがって、…と思いました。」
- **友達の考えで「いいな。」と思うところを見付けよう。**
「〇〇さんの 考えの ～がいいと思いました。」
理由は、…だからです。」
- **分からないことは質問をしよう。**
「～とは どういうことですか。」
「～について、もう少し詳しく教えてください。」
- **友達の考えを受けて、新しく気付いたことや考えたことを伝えよう。**
「〇〇さんの考えを聞いて、～と思いました。理由は、…だからです。」
「〇〇さんの考えを聞いて、～と気付きました。理由は…だからです。」

【資料4 あいあいタイムのポイント(児童用)】

2 適切な道徳科の教材の選択・開発とその効果的な活用

道徳科の教材は、児童が道徳的価値の自覚を深めていくための大きな手掛かりになり、特に、地域に根ざした魅力的な教材は、児童の心に響く道徳科の授業を創造する上で重要な役割を果たすと考える。そこで、本校では、教材・環境研究部が中心となって、令和5・6年度に地域教材の開発に取り組んだ。地域教材の開発に当たっては、作成の手順を明確にして作業を進めた。この2年間で作成した教材は次のとおりである。

	内容項目	主題名	題材名
令和5年度	A-(5) 希望と勇気、努力と強(中学年)い意志	あきらめない	足立 重信
	C-(17) 伝統と文化の尊重、国(高学年)や郷土を愛する態度	北伊予の誇り 受け継ぎ 未来へ	みんなのいこいの場に ～福德泉公園～
令和6年度	C-(16) 伝統と文化の尊重、国(中学年)や郷土を愛する態度	北伊予の誇り 受けつぎ 未来へ	水から生まれる幸せ ～福德泉公園～
	C-(17) 伝統と文化の尊重、国(高学年)や郷土を愛する態度	郷土を愛する心	見ててよ、ぼくの姿を -相原賢の生き方を通して-

本教材を活用した授業の指導案審議と平行して、よりねらいに則した教材となるよう校正を重ね、授業実践につなげた。また、実践後は、自作教材の今後の活用に向け、改善点等を整理し、加除・修正を検討した。

3 道徳科の学習を振り返るための道徳コーナーの整備

道徳科で学んだことを常時振り返ることができるよう、全校で統一した道徳コーナー(資料5)を学級の後方に設けた。「みんな」「じぶん」「まわりのひと」「いのち しぜん」の項目に分け、教材名を掲示することで、児童は日常的に道徳科で学んだことを意識しながら生活することができるようになった。



【資料5 各学級の道徳コーナー】

内子町立天神小学校

研究主題

主体的に学び合う児童の自立の心の育成
～関わりをよりよい生き方につなげる道徳教育～

取組と成果のポイント

道徳的価値を自分事として捉えることができるような道徳科の授業の在り方や、道徳的価値の自覚を深めるための道徳科と体験活動・体験学習の往還及び、相互の有機的連携の在り方について研究した。授業において、「自己を見つめる場」を大切にしたり、積極的に地域教材や人材を活用したりするとともに、生活の場で意図的に道徳的行為の指導を行うことで、よりよい生き方を考えようとする児童の姿が見られるようになった。

研究の概要及び特色

1 道徳的価値について自分事として捉え、考えを深める道徳科の在り方

(1) 確かな指導観に基づく授業づくり

授業で考えさせたい道徳的価値を焦点化し、中心場面と道徳性を構成する諸様相（道徳的判断力、道徳的心情、道徳的实践意欲と態度）を明確にした上で、ねらいを設定した。指導の明確な意図をもつことで、効果的な発問や指導法を考えることができた。

一般的なねらいの例

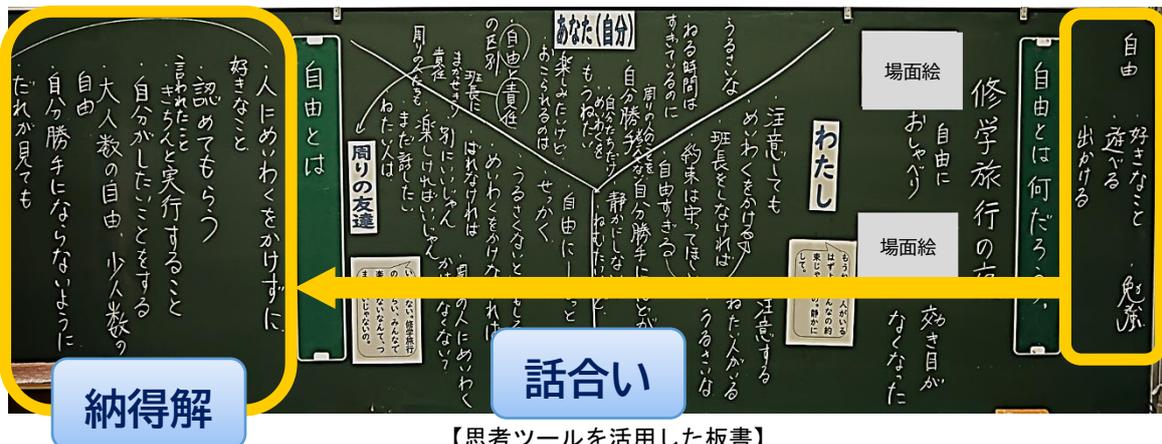
生命のかけがえのなさを自覚するとともに、人間の誕生の喜びや死の重さについて知り、よりよく生きようとする心情を育てる。

焦点化したねらい

14年間佐江子を育ててきた母の思いや、必死に生きようとする佐江子の思い、それを見ている病院関係者の思いを考え、話し合うことを通して、生命は唯一無二であることに気付くことで、生命のかけがえのなさを自覚し、生命を尊重することは大切だと思う道徳的心情を育てる。

(2) 「多様な価値観に触れる場」と「自己を見つめる場」の工夫

中心発問は、登場人物がねらいとする道徳的価値に迫る行為をしている場面を基に設定し、そのときの発言や行動に至った思いを考えさせた。役割演技や思考ツール、心情円盤の活用等、指導方法を工夫し、「多様な価値観に触れる場」を設けた。ペアやグループ、全体での話し合いを通して、児童は自己内対話と他者との対話を繰り返しながら、価値理解、人間理解、他者理解を深め、納得解を見いだすことができた。



【思考ツールを活用した板書】

研究主題

自己を見つめ、互いに認め合い、よりよく生きる生徒の育成
～主体的・対話的で、学びが深まる指導の工夫～

取組と成果のポイント

道徳科の授業と道徳性を育む教育活動の充実に重点的に取り組んだ。教材分析シートを活用して教材研究を深め、中心発問や問い返しを工夫することで、道徳的諸価値を自分のこととして理解し、自分との関わりで捉え、自分なりに発展させていこうとする生徒が増えた。また、互いを認め、支え合う仲間づくりを基盤に、対話を多く取り入れた授業展開や学習形態の工夫をしたことで、生徒が自分の思いや考えを積極的に表現したり、物事を多面的・多角的に捉えたりすることができるようになった。さらに、学級活動や生徒会活動において、支持的風土の醸成を図ったことで、個人や集団生活の充実につながり、生徒のよりよく生きようとする姿勢が様々な場面で見られるようになった。

研究の概要及び特色

1 組織的な指導体制づくり

(1) 道徳教育推進委員会と道徳教育研究部会

研究を計画的かつ組織的に推進できるよう指導体制の見直しを行い、道徳教育推進委員会と三つの部会を立ち上げた。道徳教育推進委員会は毎週開催し、本会で協議、検討した内容は全教職員で共通理解を図り、学級等での具体的な指導につなげた。研究部会は学期に3回程度開き、PDCA サイクルを大切にしながら実践研究を進めた。

(2) 道徳教育の全体計画、別葉及び年間指導計画の見直し

全体計画の別葉や年間指導計画は、職員室の各学年の黒板に掲示し、実施した授業の様子や実施に適した時期等をその都度書き込んだ。昨年度に書き込んだ記録を基に、今年度、より授業の効果が高まる年間指導計画になるよう修正した。

(3) 校内研修の充実

校内研究授業を年に3回実施した。愛媛大学から講師を招き、指導助言と講話をしていただいた。長期休業中には校内で教師役を立て、教職員が生徒役となって模擬授業を行った。ねらいに迫る発問や生徒の気付きを促す問い返しについて、研究を深めることができた。

2 道徳科の授業における指導の工夫

(1) 授業を考える工夫

授業づくりは、教材分析シートを活用しながら概ね次のような手順を進めた。

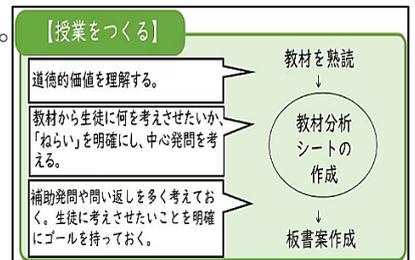
- ① 教材を熟読した上で、生徒に考えさせたい道徳的価値について教師が理解する。
- ② 教材を通して、生徒に何を考えさせたいのかを明らかにする。
- ③ 授業のねらいを明確にした上で、中心発問を考える。
- ④ 授業のゴールイメージをもちながら、補助発問や問い返しを考える。



【組織図】



【年間指導計画別葉の掲示】



【授業づくり】

(2) 話し合い活動の工夫

話し合い活動では、ペア、小集団等、授業の展開や生徒の様子に応じて活動の形態を工夫し、個人で考える時間と小集団等で話し合う時間を交互に繰り返しながら、生徒たちが自分の考えを深め、物事を広い視野から多面的・多角的に捉えられるようにした。また、生徒全員が中心発問に対して発表できるように促したり、授業全体を通して1回は発言できるよう学習形態を工夫したりすることで、自分の思いや考えを抵抗なく語ることができる生徒が増えた。

(3) 自己振り返りシートの工夫

授業後に「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか」「道徳的な価値の理解を自分自身との関わりで考えられたか」について、生徒自身が意識して振り返りを行うことができるよう、自己振り返りシートに観点別の自己評価欄を設けた。シートは道徳ファイルの表紙裏に貼り付け、3年間の取組を蓄積し、機会あるごとに見直すことができるようにした。

3 教育活動全体における道徳教育の充実

(1) 学級目標発表会

自分たちの学級目標やそこに込めた思いをスライドや寸劇にして、全校集会の場でそれぞれが持ち味を発揮しながら発表した。全校で楽しい時間を共有する中で、互いの学級目標を尊重し合い、学級の枠を超え、集団生活を向上させようとする意識が高まった。



【学級目標発表会】

(2) 道徳コーナー

各学級の背面掲示板に、道徳科の学習内容を振り返ることができる「道徳コーナー」を作った。授業内容及び生徒の意見や感想、写真等を貼るなど、工夫を凝らしている。また、廊下や階段の掲示板には学年道徳コーナーを、職員室には教職員対象の道徳コーナーを設置し、学校全体で道徳教育を推進する機運を高めた。



【道徳コーナー】

(3) 道徳タイム

道徳科の授業を実施した翌日の朝に「道徳タイム」を設けている。授業で振り返りシートを書く時間が十分に取れなかった際の補充時間として活用するほか、新聞記事や道徳的な内容を含むミニ読み物資料を読み、自分の考えをまとめることもある。本時間の活用により、授業で学んだ道徳的価値について、改めて捉え直したり、より深く理解したりする機会となっている。

(4) ふれ愛地域体験講座

毎年12月に、地域の方を外部講師に迎え、生徒が受講する講座を20程度開いている。2時間の活動を通して、生徒は地域の方とのつながりと人の温かさを感じながら、地域社会の人々や伝統・文化等に対する理解を深めたり、感謝の気持ちを高めたりすることができる。



【ふれ愛地域体験講座】

教材名	二通の手紙		
主題名	規則の意義とは	内容項目	C-(10) 遵法精神、公德心
1 教材の構成	①生き方を自覚(変化)したのは誰か(主人公)	主人公の元さん	
	②きっかけとなる出来事(助言)は何か	市営動物園の職員である元さんは、動物園の規則を知っているが、幼い姉弟の境遇に同情し、入園時間間際に子どもだけの入園を許可してしまう。母親からは感謝の手紙が届いたが、園からは懲戒処分を言い渡された。	
	③生き方を自覚(変化)するのはどこか	元さんは二通の手紙を受け取り、「この年になって初めて考えさせられることばかり」と言った場面。	
2	自分ならどうするか? 二通の手紙	きまりは何のために	自分の生活を振り返る。
3	ねらい	二通の手紙を受け取った元さんの心情を考えるを通して、法やきまりの意義を理解し、自ら法やきまりを守ろうとする意欲を育てる。	
4	本時で考える道徳的価値	法やきまりの意義を理解し、それらを進んで守るとともに、そのよりよい在り方について考え、自然の権利を大切に、義務を果たして、規律ある安定した社会の実現に努めること。	
5	中心発問	元さんが、この年になって初めて考えさせられたことは何だろうか。	
6	問い返しの発問	<p>予想される反応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・きまりに対する自分の考え方は間違っていた。 ・自分たちの園の規則は、園に来る人の安全や命を守るためにあるのだ。 ・子どもたちの笑顔や幸せを奪ってしまうところだった。 ・きまりは、安心・安全な社会をつくるために守らなければならない。 	
	授業で気付かせたこと	法やきまりは、個人の権利を守るためにあり、きまりを守ることで安心で安定した社会がつけられるということ。	

【川之江北中学校教材分析シート】

研究主題

自他を尊重し、よりよく生きようとする生徒の育成
～多様で効果的な指導の工夫を通して～

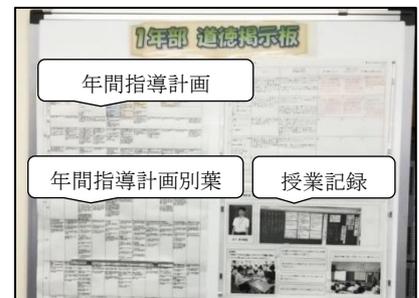
取組と成果のポイント

生徒の実態に応じて道徳科の授業改善を図るとともに、日々の教育活動において多様な体験活動や情操を育む活動を積極的に行うことにより、生徒の自他を尊重し、よりよく生きようとする力を育成したいと考えた。話し合い活動の充実やチームローテーション道徳の実施等、道徳科の授業における様々な工夫により、自己の生き方を見つめ、主体的に道徳的実践を行おうとする意欲をもつ生徒が増えた。また、日々の様々な教育活動において、教師が道徳教育の視点をもって意図的に指導を行うことで、自他を尊重する支持的風土の醸成や、自己実現を図ろうとする態度の育成につながった。

研究の概要及び特色

1 道徳教育諸計画の作成と活用

3年間を通して、系統的・発展的な指導を行い、見通しをもって教育活動を進めるため、道徳科の教材や内容項目と関連する各教科等の内容を確認し、相互の有機的なつながりが生まれるよう道徳諸計画の見直しを行った。また、職員室に設置した道徳掲示板に、諸計画や授業記録を掲示し、情報共有を図るとともに、事前事後指導に役立てた。



【職員室の道徳掲示板】

2 道徳科の授業における指導の工夫

(1) 「教材分析シート」の作成

明確な指導観に基づいた授業づくりをするために、教材分析シートを作成した。本シートを活用した授業づくりの手順は、次のとおりである。

- ① 教材を読み込み、教材に内在している道徳的価値について理解する。
- ② 内容項目に関する理解を深め、生徒の実態を基に、何を考えさせたいのかを明らかにした上で、明確なねらいを設定する。
- ③ 中心発問を吟味し、板書計画を立てる。

本シートを作成することで、教材分析をはじめ、ねらいの設定や問い返しの検討等、複数の教員で協働しながら授業づくりを進めることにつながった。また、指導のポイントが明確になることで、各教員の授業づくりに対する力量が高まるとともに、実践的指導力の向上にもつながった。

(2) 話し合い活動の充実

話し合いの進め方について全校で統一し、どの学級でも共通実践ができるように工夫した。具体的な進め方については、次のとおりである。

- ① 小グループで話し合い、出た意見のキーワードをホワイトシートに全て書く。
- ② ホワイトシートを黒板に貼り、自分の意見と比較する。
- ③ 気になった意見について生徒同士で質問し合うとともに、教師がねらいに迫る問い返しをすることで、考えを深めたり広げたりする。

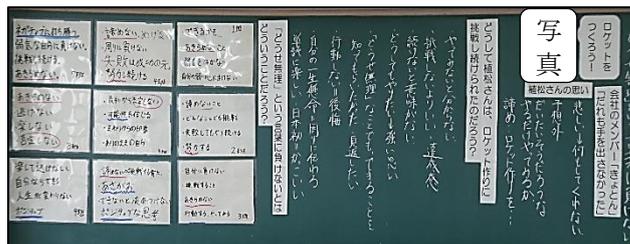
生徒たちは回を重ねるごとに、話し合いの仕方を身に付け、中には、「この意見を深掘りしていきましょう」などと言って、話し合いを上手にリードする生徒も出てきた。

☆司会者は、話し手が話し終わったら、すぐに次の人に移らず、話し合いを深めるために、次のような投げかけをしてみましょう。

- 話し手に**
- ・「なぜ、そう思ったのですか。」
 - ・「それは、〇〇ということですか。」
 - ・「もう少し詳しく教えてください。」
- 聞き手に**
- ・「〇〇さんの意見を聞いて、どう思いましたか。」
 - ・「他に意見や質問があれば、お願いします。」

☆自分の考えと比べながら、最後までしっかり聞きましょう。

☆班員全員の意見をシートにキーワードで書きましょう。



【小集団での話し合いの進め方】

【ホワイトシートの活用】

(3) チームローテーション道德の実施

各学年の教員を3つのチームに分け、授業者と補助の教員が入れ替わって3回ずつ授業を行う「チームローテーション道德」を実施した。担当者や学級担任任せにならないよう、チームで取り組むという意識を大切にしながら、複数の教員で教材研究や授業分析、指導方法の吟味を進め、授業を行った。授業後には、補助の教員が客観的に授業のよかった点や課題を指摘することで、よりよい授業づくりにつなげることができた。



【チームで打合わせをする様子】

(4) 地域教材の活用

「女優 森 律子」（「愛ある愛媛の道德」）の教材を使い、努力と強い意志を主題に各学級で学習した後、坊っちゃん劇場の俳優である佐藤朱莉さんをゲストティーチャーに迎え、学年で一斉に道德の授業を実施した。生徒は佐藤さんの話を聞いたり、友達と交流したりする中で多様な意見や考え方と出会い、自分の生き方について考えを深めることができた。



【学年道德の様子】

3 教育活動全体を通じて行う道德教育の充実

校内放送を利用して、命や人権についてのメッセージを全校生徒に届ける「The Brilliant Day」や、生徒同士がペアになってお互いのよいところを伝え合う「ほめシャワデー」、アルミ缶・エコキャップ回収運動、市主催の花いっぱい運動、募金活動などのボランティア活動に生徒が自由に参加する「Tーボラン活動」等に、生徒会が中心となって取り組んでいる。今年度は、学校行事等の前に、関連する内容項目をテーマに話し合う「小さな道德授業」も併せて行った。どの活動においても、道德教育の視点を大切にしながら活動の目的を明確にし、教員が意識的に声掛けを行うとともに、事前・事後指導の充実に努めた。また、それらの教育活動と道德科の授業を関連させることで指導の効果を高めることができた。



【ほめシャワデーの様子】



【Tーボランによる募金活動】

研究主題

自己の生き方や人間としての在り方の自覚を深める道徳教育の研究
～「主体的・対話的で深い学び」のある授業を通して～

取組と成果のポイント

生徒の実態や昨年度の取組を踏まえ、研究主題の「主体的・対話的で深い学び」のある授業に迫るために、今年度は研究の内容を「中心発問と問い返し」に絞った。校内研修によって共通理解を図り、授業の前には、学年部で教材分析シートを活用してねらいと発問について十分に吟味し、「生徒が答えたくなる、自分事として考えられる発問」「教材を様々な側面から捉え、多様な意見を引き出せる発問」を考えた。授業では、多様な意見を引き出せるよう、中心発問に対してなるべく全員が発言できるようにし、教師はその意見を傾聴し受容するように努め、対話しやすい雰囲気を作った。

実践を通して、生徒は、教材に含まれる道徳的価値について強い関心をもって主体的に考えるとともに、受容的な雰囲気の中で行う対話によって自己有用感を高め、道徳的実践意欲を向上させることができた。また、教師は、教材や発問等を研究する力を高めるとともに、学級における支持的風土の醸成や生徒の発言に対する受容的な反応の仕方等、授業の基盤づくりに係るスキルを向上させることができた。

研究の概要及び特色

1 道徳科の充実に向けた取組

(1) 「よさを語り合う道徳の授業」に向けた発問研究

これまでの取組から、道徳科の時間に、「主体的・対話的に人としてのよさや、よりよい生き方についてじっくりと語り合い、道徳的実践意欲と態度を育てる」ことができるようにするためには、「中心発問と問い返し」が重要であることを再確認した。そこで、発問づくりに係る具体的な方向性を確認するために校内研修を行い、次のことを共通理解した。

- 中心発問は、中心人物が人としてのよさに気付き、しぐさや行動を変容させた場面を取り上げ、その時の思いや考えを問うものであり、主題への入り口であること
- また、生徒の主体的な学びにつながるように、自我関与して語るような問いにすること
- 問い返しは、生徒の常識を揺さぶり、多様な価値観を表出させることによってねらいに迫っていくためのものであり、道徳的価値に対する深い思考や探求を促すことができるように問い方を工夫すること

(2) 組織的に行う授業づくり

授業の前には、学年部で各自教材分析シートを持ち寄って教材研究を行い、模擬授業を実施した。取組を通して、問い返しのタイミングや道徳的価値に対する考えの深め方、自己の生き方について考えさせる方法等について理解を深めるとともに、教師自身が「考え、議論すること」の価値や重要性を実感することができた。その後、模擬授業で得た成果と課題を踏まえた上で、生徒に対して授業を実施した。授業後には、「おおずの授業スタンダード」を基に振り返り、気付いたことを研究授業メモにまとめ蓄積することで、次の実践に役立てるようにした。



【校内研修の様子】



【模擬授業の様子】

(3) 生徒の発言を大切にしたい授業づくり

中心発問は、だれもが自分の考えをもつことができる問いにするとともに、生徒が多様な考えに接することができるよう、発問後は、なるべく全員を指名し、発言できるようにした。また、生徒対象のアンケート結果から、発問に対して自分の考えを逐一書くことに負担を感じている生徒がいることが分かった。そこで、書く活動は、授業の最後に一度だけ設定することにした。その結果、授業中、友達の意見をじっくり聞いたり、自分の考えを語ったりする時間が生まれるとともに、書く活動の充実によって、自己や人間としての生き方について考えを深めることにつながった。

ぼくにもこんな「よいところ」がある(5月29日) 番氏名()

私は、本当に見るべきは自分自身だと思いました。人の考えを急に交えることはできないし、環境に対して何か言っても、変わらないと思います。完璧な人間は存在しないからこそ、お互いがお互いを交え合っていくと思います。だから、大切なのは他人ばかり見るのではなく、自分がするべきと判断したことを自信を持って実行することだと思います。そうして、気づき、考え、実行する人が増えることで、誰かの気持ちや動きがきっかけにもなるんだと思います。

【道徳の授業感想】

(4) 地域素材の活用

本校は、「ふるさとを愛し、未来をしっかりと生き抜く生徒を育てる」を教育目標に掲げ、日々の教育活動に取り組んでいる。そこで、郷土の発展に尽くした先人、西村兵太郎(1884～1934)の生き方を基に郷土を愛する心を育てることをねらいとして、12月に自作の教材を使って授業を実施した。授業をするに当たっては、5月に地元長浜在住の西村兵太郎に詳しい方をゲストティーチャーとして招き、講演していただいた。先人の長浜への思いや業績を学習することで、郷土への愛着をもち、進んで郷土のために尽くそうとする心情を育てることができた。

第3学年 道徳家学習指導案

1 主題名 地域のために尽くす～西村兵太郎～【C 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度】

2 本時の指導

(1) ねらい 長浜の発展のために尽くした西村兵太郎の業績を通し、郷土に愛着を持ち、進んで郷土のために尽くそうとする心情を育てる。

(2) 準備物 掲示用資料、ワークシート

(3) おおずの授業スタンダードの視点と手立て

①ききだそう学習意欲 ②じっくり考える時間の確保 ③んがえを交流させる活動 ④かったことをまとめる時間

(4)

学習活動	○主な発問○中心発問 ・予想される生徒の反応	○指導上の留意点 ◇評価
導入 1 西村兵太郎について考える。 ○長浜町のためにどのようなことを成し遂げたのか覚えていますか。 ◎【一斉】		○外部講師に西村兵太郎について講演していただいたことを想起させる。 長浜大橋架橋、長浜港改修、県会議員、県会議長、長浜漁業組合長、喜多郡漁業組合連合会長、愛媛県水産会長、全国漁業組合中央会理事、帝国水産会代議員支部長、上水道敷設、水族館建設、長浜小学校新築、国鉄下瀬一大洲線開通に尽力
◎西村兵太郎の郷土のために成し遂げたことや込めた思いについて考えてみよう。		

【「地域のために尽くす」 学習指導案の一部】

2 道徳性を育む体験活動と環境整備の充実

(1) 総合的な学習の時間 3年「福祉と私たちの社会」

3年生の「福祉学習」では、「ふだんのくらしをしあわせにする」をキーワードに、社会の中で多様な人々が共生するための課題について理解を深め、その解決方法を考え、行動することを目的として活動を進めている。今年度は、学びの必然性を高め、実感をもって学べるように、体験活動や当事者との対談を取り入れた。学習を通して、生徒たちは、「関心をもつこと」「気づき、考え、実行すること」が人権を守り、福祉社会を支えることにつながることを理解した。最終的に、ここで学んだことをプレゼンテーションにまとめ、文化祭で情報発信した。



【ブラインドウォーク】 【文化祭 3年生福祉体験発表】



【体育大会後のメッセージ交換】

(2) 縦割りブロック活動

様々な活動を縦割りで行ってきたことで、3年生は思いやりの気持ち、1、2年生は、優しく接してくれた先輩に対しての尊敬の気持ちが育ってきた。また、活動毎に思いを伝える場を確保することによって、学年の枠を越えて絆が深まった。



令和6年度特色ある道徳教育推進事業 授業実践ブックレット
令和7年1月 発行